



平成 28 年度指定

スーパーグローバルハイスクール

研究開発実施報告書

第 4 年次



令和 2 年 3 月

和歌山県立日高高等学校

はじめに

和歌山県立日高高等学校

校長 池田 尚弘

本校は、2016年（平成28年）文部科学省スーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受け、「翔べ 日高から 世界へ ~地方を創生するグローバルリーダーの育成~」を軸に、地方に包含する様々な課題に対し、多角的かつ多面的に課題解決を探ろうとする能力を育成することを目指して、4年間活動を続けてきました。それまで活動してきたSSHや、創立100周年におけるアジア高校生フォーラムの主催、その後継であるアジアオセアニア高校生フォーラムや「世界津波の日」高校生サミット等への積極的な参加、SGHと同時並行に始まったOECDイノベーションスクールの活動とともに、学校全体で、課題解決型学習（PBL：Project-Based Learning）に取り組むことにより、活躍する先輩たちをよきモデルとして、生徒一人一人が主体的に学習してきました。

活動当初は、課題設定やアプローチの方法、研究手法などを手探りで始めましたが、発表を重ね研究を続けていくうちに、いくつかのテーマは継続研究となり、地域社会へ働きかけ、課題解決を実践するまでになってきました。この中のいくつかを紹介します。

「地域産業」の研究では、花卉栽培でのスターチスの優位性をアピールし、様々な場面で活用してもらえる工夫に取り組み、市のふるさと納税返礼品に添えるメッセージカードとして採用されました。「地域防災」では、防災学習や災害のニュースに触れたときは、誰もが防災に関心を持つ反面、時間が経つと日常に埋もれてしまったり、自分だけは大丈夫という正常性バイアスにとらわれたりする課題に目をつけ、日常的に防災意識を持つ手段として防災カレンダーを作成しました。防災カレンダーはSGH甲子園ポスター発表の部で最優秀賞を獲得、2020年度版を刊行するまでになりました。この研究は後輩にも受け継がれ、日本だけでなく、世界中で活用できるように多言語版のカレンダーにも取り組んでいる最中です。まさに、地方から世界へ課題解決を広げようとする取り組みとなっています。また、本校のSGHでは、カナダ研修で「移民の歴史」の探究、インドネシア研修で「地域防災」を共有、ベトナム研修で「地域産業」を学習しています。調査方法はそれぞれの国・テーマで異なりますが、今年のベトナム研修は、世界的な課題になりつつある海洋プラスティック汚染に着目、地域のペットボトルリサイクル企業を訪問し、本校も取り組む、空きペットボトルを分別し、そこから製品として再生するまでの工程を、ベトナムの高校生と共有しました。ベトナムでは、リサイクル工場やプラスティックエネルギー化施策などを学び、1つのテーマをもとに両国の高校生で課題を共有しました。

SGHで学んだ資質能力は、OECDのEducation2030で求められる「新しい価値を創造する力 Creating new value」、「緊張とジレンマを調和する力 Reconciling tensions and dilemmas」、「責任をとる力 Taking responsibility」の育成につながります。学校全体で取り組むことにより、参加者一人一人に資質となって蓄積されることを狙いとしています。

最後になりましたが、本校のSGH活動を支えていただいた、文部科学省、県教育委員会、多くのご支援とご指導をいただいた、SGH運営指導委員会、大学、関係機関や地元企業の皆様に心より感謝申し上げます。特に海外訪問に際し、JICA、ERIAの皆様方には心温まる対応をしていただき、誠にありがとうございました。

目 次

研究開発完了報告書	1
I SG課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（総合的な学習の時間/課題研究）	
1 学年	15
2 学年	27
3 学年	40
II 海外研修	
1 インドネシア研修	46
2 カナダ研修	52
3 ベトナム研修	57
III 調査分析	
1 SGHアンケート調査	63
2 海外研修 事前事後アンケート	66
3 「各科目に関するアンケート」アクティブラーニング集計	68
4 GTEC for STUDENTS の受験結果	69
IV 交流活動	
1 姉妹校交流	
(1) 中国	71
(2) デンマーク	74
2 海外研修受入	77
3 アジア・オセアニア高校生フォーラム	79
4 「世界津波の日」2019 高校生サミット in Hokkaido	79
V 資料	
運営指導委員会の記録	81
教育課程表	82
生徒プレゼンテーション資料	84
生徒ポスター資料	87
4年次（令和元年度）取組概要ポスター	89
SGH通信	90

(別紙様式3)

令和2年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 和歌山県和歌山市小松原通一丁目1番地
管理機関名 和歌山県教育委員会
代表者名 宮崎 泉 印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成31年4月1日（契約締結日）～令和2年3月31日

2 指定校名

学校名 和歌山県立日高高等学校
学校長名 池田尚弘

3 研究開発名

翔べ 日高から 世界へ ～地方を創生するグローバルリーダーの育成～

4 研究開発概要

本研究開発では、過疎化や少子高齢化、経済の減退という深刻な地方の課題を解決する意欲と能力を持ったグローバルリーダーの育成を目指す。「総合的な探究の時間」、「総合的な学習の時間」、「課題研究」に「SG課題研究」を設定し、課題解決学習と国内外の高校生との交流や研究を中心に据えた協働学習を開拓する。2年次「SG課題研究Ⅱ」を1単位増の2単位とし、フィールドワークなど探究学修に取り組みやすい環境を整備するとともに、本事業を全校的な取組とすべく、対象を普通科のみから総合科学科にまで拡大する。その中でグローバルな視野を持ったリーダーの育成に向け、地元企業や大学、JICA関西、OECD、ERIA等の関係機関の支援の下、国際的なワークショップやフォーラムに参加する機会を設け、グローバル化に対応する資質や能力を育成する。また、国内外の高校生とのワークショップやフォーラムを通じ、コミュニケーションやプレゼンテーションの能力を高め、協働して課題を解決していくこうとする資質を育成するための探究学修を実施する。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
S G H事業推進のための教職員の加配												→
P B L型授業や研修への支援												→
アジア・オセアニア高校生フォーラムに係る支援			→									
「世界津波の日」2019高校生サミット in 北海道に係る支援				→								
関係各機関との調整												→
S G H運営指導委員会					→							→

(2) 実績の説明

- ・ S G H事業推進のための教職員の加配

S G H事業推進のための教員加配を行った。
- ・ P B L型授業や研修への支援

中間成果発表会、S G H全国高校生フォーラム等、生徒の探究学修や交流学習への支援を行った。
- ・ アジア・オセアニア高校生フォーラムに係る支援

県内外、国外からの参加者との連絡調整、フォーラム運営に係る生徒への指導・支援等を行い、グローバルリーダー育成への支援を行った。
- ・ 「世界津波の日」2019高校生サミット in 北海道に係る支援

サミットで発表を予定している生徒に対して、効果的な英語でのプレゼンテーションについてワークショップを行った。また、関係機関との調整を行った。
- ・ 関係各機関との調整

文部科学省等関係機関への問い合わせや相談をはじめ、さまざまな折衝や調整を行った。
- ・ S G H運営指導委員会

開催回数：年2回開催（令和元年度は8月と3月に実施した。）
 内　　容：事業説明、公開授業、今後の計画への助言等

運営指導委員は以下のとおり

京都大学 防災研究所 教授 牧 紀男 氏
 日越関西友好協会 理事長 築野 元則 氏
 (株) 和歌山放送 代表取締役社長 中村 栄三 氏
 和歌山市教育委員会 教育学習部 読書活動推進課 中谷 智樹 氏

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
① 地域探究プログラムの開発												→
② 大学・関係機関との協働				→					→			
③ 地方創生グローバルサミット												→
④ 校内体制の充実												→
⑤ 成果の普及												→
⑥ 運営指導委員会の開催				→								→

(2) 実績の説明

①地域探究プログラムの開発

地域探究プログラムとして地域文化学修、地域産業学修、移民の歴史学修、地域防災学修の4テーマを設定した。地域探究プログラムは、「SG課題研究」において実施した。1年次「SG課題研究Ⅰ」は「総合的な探究の時間」に導入し、1クラス(40名)単位で授業を展開、1年間で全4テーマについて学修しながら、2年次の探究学修で必要とされる「発信力」、「情報の収集や処理の手法」、「アンケート調査の手法」、「プレゼンテーションの手法」等のスキルを学修した。普通科5クラスの指導は、各クラス1名ずつ、計5名の教員が担当した。総合科学科1クラスについては、2名の教員が担当した。

2年次の探究学修「SG課題研究Ⅱ」は、2単位として午後の2時間連続の時間を設定し、普通科においては「総合的な学習の時間」に、総合科学科においては「課題研究」の時間に導入した。学修テーマは、上記4テーマから1つを生徒自身が選択し、1年間継続的に探究学修を行った。生徒はテーマごとに5名程度のグループを結成し探究活動を行った。また、指導担当教員については普通科5クラスを2・2・1クラスの3グループで展開し、40名ごとに指導者5名、計20名を配置した。指導者1名あたり2グループ(10名程度)を担当している。総合科学科は1クラス(40名)の展開で指導者5名を配置、テーマごとに8名程度のグループで探究活動を行った。普通科「総合的な学習の時間」と総合科学科「課題研究」に計25名の教員が指導に当たった。

3年次「SG課題研究Ⅲ」では、2年次に取り組んだ探究学修のまとめとして、論文の作成と英語要旨作成に取り組んだ。授業はクラス単位で展開し、各担任がその指導に当たった。

②大学・関係機関との協働

a 大学連携

(a) 和歌山大学

教育学部此松昌彦教授・岩野清美准教授、地域活性化総合センター岸上光克教授、

観光学部東悦子教授に「SG課題研究」に係る指導を依頼した。10月に開催した「SG課題研究」の中間発表会へは、此松教授の出席はかなわなかったが、災害科学研究中心今西武客員教授に講評及び指導助言を依頼し、出席いただいた。3月に開催の成果発表会には、当初依頼した4名の先生方に出席していただき、講評及び指導助言をいただく計画をしていたが、同発表会は臨時休校措置のため取りやめとなり、今年度2度目の指導をしていただくことはできなかった。

(b) 近畿大学

国際学部矢澤知行教授に「SG課題研究」に係る指導を依頼した。10月に実施した「SG課題研究」の中間発表会は都合によりご出席いただけなかつたが、3月に開催の成果発表会に出席していただき、講評と指導助言をいただく計画をしていたが、同発表会は臨時休校措置のため開催できず、指導していただけなかつた。

(c) 関西学院大学

10月に1学年普通科（180名）が訪問し、グローバル人材としてこれからの世界を生きるうえで重要な資質について講義を受け、理解を深めた。また、海外の国際機関での活動について、実際に体験した学生から具体的な話を聞き、グローバルな活動についての認識を深めた。

また、3月に開催が予定されていた「WWL・SGH 探究甲子園2020」については、成果発表ポスター・プレゼンテーション部門とラウンドテーブル形ディスカッション部門への出場が書類審査を経て決定していたが、開催が中止となつた。

b JICA研修

10月に1学年普通科（180名）がJICA関西を訪問し、日本の海外途上国支援事業の現状について、担当職員から説明を聞いた。さらに海外支援ボランティア活動体験談を通して世界の国々の実状について学び、海外支援の意義や自分たちの可能性について、生徒それぞれが考え、学ぶことができた。

③地方創生グローバルサミット

a 国内研修

(a) アジア・オセアニア高校生フォーラム

7/27～8/1、和歌山市において開催された和歌山県主催の「アジア・オセアニア高校生フォーラム」に3年生1名、2年生1名が参加した。3年生の生徒は「観光・文化」「教育」「津波・防災」「環境」「食糧問題」の5分科会のうちの一つ「教育」の分科会において“Further involving school libraries in school education”と題する英語によるプレゼンテーションを行つた。学校教育における図書館の重要性と役割の見直しを参加者たちに提案した。

また2年生の生徒は、全体会では司会を務め、分科会の内容を英語で紹介し、ディスカッションの司会を務めるなどフォーラムのスムーズな進行に貢献した。5日間にわたるプログラムでの海外参加者との交流を通じ、多様な考え方や価値観、またプレゼンテーションの技術や方法など多くの学びを得ることができた。

(b) 「世界津波の日」2019高校生サミットin北海道

9月10日～11日に札幌市の北海道立総合体育センター「きたえーる」において開催

された「『世界津波の日』2019高校生サミットin北海道」に、2年生2名が参加した。「意識を高める」とのテーマが設定された分科会において、SG課題研究で住民の防災意識向上のために継続して取り組んできた「防災カレンダー」の英語版の作成とその意義と効果、普及に向けた取り組みについて英語によるプレゼンテーションを行った。さらに、海外からの参加者に向け、防災カレンダーの多言語化への協力の呼びかけを行った。また、防災意識を高めるうえでの課題について、国内外の参加者と意見交換を通じて、防災カレンダーの多言語化の必要性に確信を得た。

b 地方創生イノベーションスクール2030

2018年8月より第2期(ISN2.0)が始まり、日高高校は「実践校」として参加している。第1期(ISN1.0)の3年間で積み重ねた実践と研究成果をふまえ、1、2年生約30名の自主研究グループが地方創生に向けた地域の魅力発見と発信、地域課題及びその解決の方策の探究に取り組んでいる。

c 海外研修

昨年度に引き続き、海外の研修先としてカナダ、インドネシア、ベトナムの3か国の訪問を計画、実施した。事前研修として、海外研修参加者共通の英語研修と行き先（テーマ）別の研修を計画した。英語研修は、夏休みを中心に6回実施し、インタビューやディスカッションを想定した英語力の増強を図った。また、和歌山県教育委員会指導主事を講師に招き、英語によるプレゼンテーション、質疑応答、討論の基礎を学ぶ事前学習会を開いた。加えて、インドネシア研修とベトナム研修の参加者対象にJICAの支援事業や青年海外協力隊の活動の学修のため、「『世界津波の日』2019高校生サミットin北海道」の事前研修を受講し、それぞれの海外研修に備えた。

(a) カナダ研修

探究学修（SG課題研究）のテーマの一つである「移民の歴史学修」の一環として、10月27日～11月1日の日程で実施した。参加者は、1年生2名、2年生6名の合計8名であった。バンクーバー市周辺及びリッチモンド市において研修を行った。バンクーバー市郊外の日系文化センター博物館を訪問し、日系カナダ移民に関する様々な資料に触れ、日系移民一世の歩んだ足跡をたどり、その歴史を学修した。また、現地県人会の方から移民についての聞き取り調査を行い、当方からかつてカナダに渡った先人が、鮭漁やその加工に携わり、生活の基盤を築く過程を詳細に学ぶことができた。加えて、第2次大戦後に移住した方からも話を聞くことができ、戦前の移民と戦後の移住の違いについても学修することができた。

また、リッチモンド市ではリッチモンド・セカンダリースクールを訪問した。午前中は、現地高校生と一緒に授業に参加し、授業形態や生徒の授業への姿勢など日本の高校との違いに刺激を受けた。午後には、プレゼンテーションを行った後、日本とカナダの教育についてディスカッションを行った。

自主研修では、自分たちで設定したテーマ「捕鯨について」、「海洋プラスチックゴミ」について、バンクーバー市内で街頭インタビューを行った。インタビューを通して現地の人々の考えを知ることができただけではなく、コミュニケーションにおいては、言葉以上に伝えようとする意思が大切であることにも気づくことができた。

(b) インドネシア研修

探究学修（SG課題研究）のテーマの一つである「地域防災学修」の一環として、10月14日～19日の日程で実施した。参加者は、1年生3名、2年生1名の合計4名であった。JICA インドネシア事務所を訪問し、インドネシアにおける地震に関する災害や日本が JICA を通して行っている災害関連事業への支援について学修した。

また、ERIA（東アジア・アセアン経済研究センター）では、東アジア・アセアン地域における経済格差や発展格差の問題とその縮小に向けた取組、持続可能な経済成長に向けた取組について講演を聞き、理解を深めた。東アジア・アセアン地域を国の枠を超えて経済ブロックとしてとらえ、相互の利益や発展につながる活動を研究、提案している ERIA での研修は、これから社会を生きていく高校生にとって、グローバル化の必要性を切実な課題として認識させられるものであった。

高校生との協働学修については、2014年以来交流を続けているマダニア高校を訪問し、「防災意識を高める」を共通のテーマとする英語プレゼンテーションを相互に行った。災害時に高校生ができることについて、それぞれの国の実情を反映し、日高高校は、少子高齢化が進む社会において災害時に高齢者に対して高校生ができる支援について発表を行った。マダニア高校は、人口構造において日本とは逆の課題を抱えるインドネシアの実情を紹介し、災害時の子供への対応についての発表を行った。その後、相互の発表内容についてディスカッションを行った。

インドネシアでの研修を通じて、現地の人々の自然災害の捉え方やそれに起因する防災対策の課題に気づくと共に、復興に向けて自分たちで立ち向かう現地の人々の力強さを知ることができた。

(c) ベトナム研修

探究学修（SG課題研究）のテーマの一つである「地域産業学修」の一環として、11月4日～9日の日程で実施した。参加者は、2年生8名であった。地元の樹脂加工メーカーが手がけるペットボトルのリサイクル事業について学修する過程で、プラスチック廃棄物やプラスチックによる海洋汚染の問題に関心が向くこととなった。その問題を調査する過程で、ベトナムが廃棄物処理の深刻な問題を抱えていること、プラスチック廃棄物のリサイクルが盛んに行われていることを知った。

前述の樹脂加工メーカーからいただいたベトナムのゴミ問題を扱った新聞記事から現地で廃棄物処理コンサルタントとして活動する日本人の存在を知り、現地での廃棄物処理やプラスチックリサイクルの現状の学修への協力を依頼した。その結果、廃棄物処理場やプラスチックリサイクル村への視察に同行していただけたこととなった。

研修の事前学修として、地元企業の協力でペットボトルのリサイクルの行程を見学し、また、リサイクルに取り組む企業理念について英語でプレゼンテーションしていただいた。企業活動や企業理念を学修しながら、それが、持続可能な社会の実現につながっていることを理解し、その実現のために自分たちが高校生として出来ることを模索することが出来た。

ベトナムでは、ハノイ郊外の廃棄物の埋め立て処理場やプラスチックリサイクル村、ハノイ市内のゴミ処理の状況を前述の現地協力者の案内で視察した。ベトナムにおける廃棄物処理の問題点や課題、住民の意識、日本との違いなどを専門的な見地から詳細に説明していただいた。また、日本以上に進んでいるプラスチックリサイクルの現

場も見学することができた。

高校生との協働学修では、チャンフー高校を訪問し、プラスチック廃棄物の処理と減量化の問題を共通のテーマとしたプレゼンテーションを相互に行なった。日高高校の生徒は、プラスチックゴミによる海洋汚染の実態とその問題の解決に向けた地元企業のペットボトル再生事業について英語での発表を行なった。その後のディスカッションでは、プラスチックゴミによる海洋汚染の防止にはプラスチックゴミの減量化が必須であり、そのためにはリサイクルが容易になるように分別が重要なこと、分別を徹底するには住民の意識向上が必要であるとの結論に至った。

日系企業の訪問では、ベトナムからの観光客誘致に積極的に取り組む地元商工会の協力のもと、現地の大規模小売店舗を訪ね、プラスチック廃棄物の処理とその課題について担当者から直接、説明を受けた。さらに、プラスチック廃棄物の削減に向け、分別用のゴミ箱の設置やエコバッグの推奨、米粉でできたストローの配布など国対策の先を行く企業の取組についても学ぶことが出来た。

今回のベトナム研修は、地元の企業や商工会からの支援協力と現地の協力者を得て、現地で自分たちのテーマをより深く学修できる企業や施設、機関を訪問することができた。加えて、事前学修の地元企業の取組を調査する中で「地域産業学修」から「環境問題」、「持続可能な社会の実現」へと視野と关心を広げることができ、有意義な研修となった。

d 校外への発信

3年次までのプログラム開発の実践・蓄積をもとに、4年次は広く校外への発信が顕著であった。（次頁表1参照。海外協働学修提携校との相互発表は除く。）

発表は大きく下記4つのタイプに分かれる。

- I——（継続）SGH指定校として、継続参加しているもの。
- II——（新規）探究学修が評価され、外部より発表依頼を受けたもの。
- III——（新規）探究学修を基盤とし、意欲が刺激されて校外に発表の場を求めたもの。
- IV——（新規）校内での種々の取組が刺激となり、校外での活動意欲に繋がったもの。

申込・審査等を経て参加する「発表会」に継続参加することで、生徒・指導者双方に探究方法や指導方法が共有、確立できつつある。その大きな成果として、開催時期の関係で昨年度の報告書への記載が間に合わなかった「SGH甲子園・日本語ポスター賞 レゼンテーション部門最優秀賞」の受賞を挙げておく。これはIで付与された指定校としての出場権利を十分に生かすことができた結果でもあると考える。さらに、それらがSGH枠設定のない他の活動（III、IV）への参加意欲に繋がっていると考える。

また、IIに見られるように、地域からの要請により発表機会を得たことも4年次の大きな成果である。特に「まなぼう災2020」は日高高校が所在する地域行政機関からの依頼であり、探究活動が地域に周知されてきたことや地域と連携が取れていることを如実に示すものである。

表1 生徒校外発表一覧

分類	日時	大会等名称	主催(開催場所)	発表等概要
I	2019年3月21日 ※昨年度末	SGH甲子園	関西学院大学、大阪大学、 大阪教育大学 (関西学院大学)	「防災カレンダー計画」探究活動を発表した。 ※日本語ポスター部門最優秀賞を受賞。
	2019年7月27日 ～8月1日	アジアオセニア高校生 フォーラム	和歌山県 (和歌山県民文化会館他)	・教育分科会で「Further involving school libraries in school education」を英語発表し た。 ・全体会司会者として英語ディスカッションをま とめた。
	2019年9月10日 ～11日	「世界津波の日」2019 高校生サミットin北海道	北海道 (きたえーる他)	「Spread the Disaster Prevention Calendar Around the World」探究活動を英語でプレゼン テーションした。
	2019年12月15日	SWGフォーラム	筑波大学 (東京国際フォーラム)	「Spread the Disaster Prevention Calendar Around the World」探究活動を英語でポスター 発表した。
	2020年3月21日	WWL・SGH×探究甲子園	関西学院大学、大阪大学、 大阪教育大学 (関西学院大学)	・外国人や子どもたちを対象とした防災すごろく を作成しその探究活動成果を発表する。 ・移民をテーマにしたディスカッションに参加す る。 ※今年度の開催は中止。
II	2019年8月9日	第8回国際理解・国際協力 に関する生徒研究発表会	全国国際教育研究協議会 (奈良県文化会館)	「英語版避難所運営カードゲーム作成」探究活 動をプレゼンテーションした。 ※国際理解・国際協力奨励賞を受賞。
	2020年2月2日	まなぼう災2020	日高川町 (日高川町防災センター)	地域住民に向けて防災分野の探究活動を紹 介するとともに、子どもたちを対象に防災すごろ くを企画、実施した。
III	2020年2月15日	第7回全国海洋教育 サミット	東京大学大学院教育学研 究科附属海洋教育センター (東京大学)	「For a sustainable society ～海洋プラスチック ゴミ削減への私たちの取組～」探究活動につ いてポスター発表した。
IV	2019年8月8日	第4回OCEAN's47イベント	にこにこ一般財団法人 (衆議院第一会館)	海洋プラスチックゴミについて考える行事に、 和歌山県代表子ども特使として参加した。

④校内体制の充実

a 事業内容の研究

探究学修については、1年次「総合的な探究の時間」、2年次「総合的な学習の時間」

- ・「課題研究」の担当者打ち合わせ会を毎月1～2回程度開き、年間計画に検証と修正を加え、さらに他のSGH校の事例を参考にしながら前年度に増して効果的な探究学修となるよう取組を進めた。また、日高高校SGH事業全体の計画や研修内容については、事業推進担当分掌である教育開発部の定例部会（週1回）と必要に応じて開かれる臨時部会において検討を重ねてきた。

b 観察研修

本年度は探究学修の成果発表会における生徒発表を従来のプレゼンテーションからポスター発表に変更するため、発表会の充実と円滑な運営にむけた示唆を得るために県内2校を観察した。訪問先では、発表方法、評価方法、運営方法など日高高校の発表会をさらに充実させる知見を得ることができた。

⑤成果の普及

a 研究発表会の開催

(a) 中間発表会

10月に2学年「SG課題研究Ⅱ」の中間発表会を開催した。「地域文化学修」「地域産業学修」「移民の歴史学修」「地域防災学修」のテーマごとに各グループがポスターを作成し、それぞれの探究学修の進捗状況や課題について発表を行った。

テーマごとに和歌山大学の先生に講評と助言をいただき、探究学修の充実に向けた示唆を得ることが出来た。

(b) 成果発表会

3月17日、18日の2日間にわたり、2学年「SG課題研究Ⅱ」の探究学修のまとめとして成果発表会開催を予定していたが、臨時休校措置のため開催中止となった。予定していた内容は、以下の通り。

第1日目は分科会形式でテーマ別のポスター発表会を実施、それぞれのテーマで代表グループを2グループ選出する。発表後、和歌山大学と近畿大学の先生からそれぞれのテーマごとに講評と助言をしていただく。その後、各グループで1年間の活動を振り返り、自分たちの1年間の「学び」の整理と次年度の自分の「学び」の方向性を確認する。

第2日目の全体会は、探究学修の県内の高校への普及を図るという目的も兼ねて、管理機関である和歌山県教育委員会の支援を得て、「和歌山県高校生探究活動発表会」として他校にも参加を呼びかけ、ポスター発表審査会を開催する。日高高校2年生全員と県内の2校からの3グループの参加者を含め、約60グループによるポスター発表を行う。優秀な発表には、和歌山県教育委員会から表彰を行う。日高高校1年生は、発表を参観し、探究活動への理解を深めると共に、次年度の探究学修のテーマ決定向けた、事前リサーチの機会となるようとする。

なお、上記発表会については事前に県内4校6名（発表校を含めると6校8名）から教員観察希望を受けていた。今年度の開催は叶わなかったものの、年度末業務の多忙な時期であることや、日高高校からの遠近を問わず一定数の観察申込があったことを考え合わせると、本企画は、県内唯一のSGH指定校として、取組を県内に広く周知することへの期待と需要に添うものであったことが容易に推察できる。

b 2019年度全国高校生フォーラム

12月22日(日)に文部科学省・筑波大学主催により東京国際フォーラムを会場に開催された「SWG全国高校生フォーラム2019」に日高高校の2年生2名と「アジア高校生架け橋プロジェクト」によるインドネシアからの留学生1名の合計3名が参加した。日高高校の生徒は、生徒交流会(テーマ別分科会)とポスターセッションに参加した。午前に参

加した生徒交流会では、「持続可能な産業と開発」のテーマに沿って、国内外の高校生とディスカッションを行った。他の参加者との意見のやりとりを通して、SDGsへの理解を深め、日本国内だけではなく世界で起きていることに目を向け、「自分事」として捉え、考え、行動していくことの大切さを認識させられた。午後のポスターセッションでは、前年度の取組である「防災カレンダー」をさらに進化させた「多言語版防災カレンダー」の作成と普及の取組について発表を行った。「防災カレンダー」は日本人に対して防災意識の向上を意図して作成したものであるが、その多言語版は、カレンダーに掲載している災害に関する情報や防災の知識を多言語で表記するものであったり、協力各国の防災情報を記載するものである。労働者あるいは観光客として来日し、滞在・在留する外国人の数が、増加し続けているという背景をもとに、多文化共生社会の実現を念頭に前年度の取組を発展させたものである。昨年度の全国フォーラムでは同様に多文化共生社会を意識した取組「英語版 HUG 避難所運営ゲーム『HIDAKARD』」の作成について発表を行ったが、今年度の取組は昨年度のテーマを引き継いで発展させたものである。SG課題研究での取組が年度を超えて深化し続けていると判断できる事例である。

c WWL・SGH×探究甲子園2020

3月21日（土）に関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスで開催が予定されていた「WWL・SGH甲子園2020」に書類審査を通過した2年生4名と1年生1名の合計5名の出場が決定していたが、直前に開催が中止となった。事前の取組と発表予定の内容は、以下の通りである。

探究成果ポスター・プレゼンテーション部門には、SG課題研究II「防災グループ」の2年生4名が、探究学修で作成した「楽しく学べる防災すごろく」の取組について発表する。発表は、災害時に情報弱者となりがちな子どもや外国人にも楽しく遊びながら防災の知識を身につけていくための「防災教育ツール」として作成した「すごろく」の作成過程をポスターにまとめたものである。「すごろく」には「やさしい日本語」が使われており、子どもにも外国人にも理解できる平易な言葉の選定や親しみやすいデザインの考案、留学生や幼稚園児、学童保育所に通う小学生へのモニタリングを通しての改善などの取組をポスターにまとめて発表する。

ラウンドテーブル型ディスカッションでは、テーマ3「難民受け入れの是非」に1年生1名が出場する。日本を含む先進国の難民受け入れの状況や政策、さらに十分に難民問題に対応できていない世界的な現状について、事前にデータを収集や調査を行い、日本の難民受け入れ政策についての提言をもってディスカッションに臨む。

なお、上記大会へ臨む意気込みは並一通りのものではなかったことを追記しておく。これは、昨年度末開催の「SGH甲子園2019」において日高高校の発表グループが「日本語ポスター・プレゼンテーション部門・最優秀賞」を受賞したことが大いに影響する。授業での取組が大きな賞に繋がったことを地方紙や校内広報など諸処で目にしたことが、今年度探究活動に取り組む生徒達にとっての強いモチベーションとなったと考えられる。同時に、決して教科専門分野とは言えない4テーマの指導に携わる指導担当教員にとっても、手探りで進めてきた探究学習の指導法が大きく間違ってはいないという心強い後押しを得る機会となったと考えられる。

d 成果の普及・発信

S G 課題研究の研究内容や国内外での研修内容、成果について校内での共有と校外への普及を図るため、「S G H通信」を昨年度に引き続き発行した。加えて、日高高校のHPからも閲覧可能にすることにより、S G Hの取組と成果の普及に努めている。さらに、校内の各所の掲示板も活用し、隨時、S G H事業や探究学修に関する情報を掲示し、日高高校職員及び生徒、またそれ以外の来客にも日高高校の取組を知ってもらえるようにしている。

また、国内外の研修成果については、協力機関・企業への報告はもとより、隨時地元新聞を通じて積極的に発信に努めた。また、中学3年生および保護者対象の学校説明会において、日高高校のS G H事業の取組や研修内容について説明を行った。

また、校外の発表会にも積極的に参加し、研究成果のプレゼンテーションやポスター発表を行った。今年度は、9月に「『世界津波の日』2019 高校生サミット in 北海道」に参加し、プレゼンテーション発表を行った。12月にはSWG全国高校生フォーラム、2月には第7回全国海洋教育サミットへ参加し、ポスター発表を行った。書類審査を通過し、WWL・S G H×探究甲子園へ出場し、ポスター発表をする予定であったが、開催中止のため、発表することができなかった。

年度末の成果報告会は、臨時休校措置のため開催中止となったが、以下のように計画し取組を進め、研究成果の普及と発信に努めた。今年度は、探究学修の成果の普及と共有を図るため、和歌山県教育委員会の支援を得て、「和歌山県高校生探究活動発表会」としてポスター発表審査会を開催し、県内の高等学校に参加を呼びかけた。2校から3グループの参加があり、日高高校の探究学修のグループと共にポスター発表を行い、優れた発表を県教育委員会から表彰する計画であった。

また、年度末にはS G H研究開発実施報告書を作成、県内外の高等学校や研究機関に配布し、研究成果の普及と共有に努めた。

その他にも、前述（③地方創生グローバルサミット——d 校外への発信、表1）の通り、地元地域と連携した「まなぼう災 2020（於 日高川町）」での発表や、海外研修での探究活動・事後研修として参加した「第7回全国海洋教育サミット（於 東京大学）」での発表等、これまで3年間に発表してきた枠だけに留まらず、より広く発表する機会・より多くの人々と発表交流する機会を得たことが4年次の大きな成果であると考える。

⑥運営指導委員会の開催

運営指導委員会は8月と3月の2回開催を計画した。第1回目の運営指導委員会では、今年度の事業計画とその内容と目的を説明した。事業の進捗状況、生徒の様子などを報告した。出席者からは、S G H事業終了後の継続事業や方向性に対する質問と提案など建設的な意見、助言をいただいた。

第2回目の運営指導委員会では、成果報告会のポスター発表を参観していただく予定をしていたが、報告会は中止となつたため、今年度一年間の取組状況と課題、来年度の計画とS G H事業終了後の取組の方向性について説明した。

7 目標の進捗状況、成果、評価

指定を受けて以来実施しているアンケート調査のうち、各種研修後に実施している記述アンケートや振り返りシートについては、毎回改善を加えながら実施している。これは、「学び」を回答しやすい設問に変えることで、生徒が自らの「学び」を明確化することを企図したためである。同時に、指導者が生徒の「学び」や変容（成長）を把握しやすくするねらいも含めた。その結果を検討し、探究学修の内容や進度、計画の調整を行うことができた。

定期的に実施するアンケート結果の推移から、地元地域や企業に対する理解が深まり、将来的には地元で生活し貢献したいと考える生徒が徐々に増加していることが見て取れる。このことは、SGH事業の中心的な取組である地域探究プログラムで地元地域の課題を研究テーマとして取り組むことにより、地域社会に対する関心や理解が高まり、今まで気づかなかつた魅力や可能性を見出している成果を考えることができる。さらに2年次においてSG課題研究II（探究学修）を1単位増加させ連続2時間で展開していることで、地域のフィールドワークに取り組む機会が増えたことも、その要因の一つとして考えられる。フィールドワークから得られる「学び」、すなわち地域との関わりの中で発見する地域課題や新たな気づきが、新たな動機付けとなり、フィールドワークが年々活発化し、地元の企業や団体などとの連携が深まっている。その結果、研究テーマが広がり、探究学修が深化している。加えて、グループ活動を通じて、「協働力」「マネジメント力」が向上し、グループ活動がスムーズに進められるようになった。成果発表会に向けた取組の中では、他グループよりもすぐれた発表を意識し、ポスター作成やプレゼンテーション方法にも独創性が加わり、「想像力」や「やる気」も高められた。

海外研修に関しては、事前・事後アンケート調査より、参加者の9割が、海外の高校生との協働学修を通して、「コミュニケーション力」や「発信力」を向上させる必要性を認識したことがわかる。また、その手段としての語学力の向上の意識も高まっている。さらに、共通の研究テーマによる探究学修の成果発表としてのプレゼンテーションの取組についても、海外の高校生の発表や質疑を通して、自分たちとは異なる視点や発想も学ぶことが出来、「グローバル力」も高まっている。

1、2年生対象に年2回実施しているGTECに関しては、本年度から従来の3技能にスピーキングを加えた4技能の能力を判定するようになった。その結果、スピーキングにおいて全受験者453名中80%以上の364名が16ポイント以上の伸長を示している。英語科では、コミュニケーション英語I・IIの授業において、学期毎、1年を通じて3回のスピーキングの実技試験を計画し、試験前の10日～2週間、集中的にスピーキング力向上に向けた取組を継続してきた。その取組の結果が表ってきたとみることができる。

また、SGH海外研修参加者20名のスコアについて、リーディング55%、リスニング35%、ライティング15%、スピーキング75%が16ポイント以上の伸びを示している。このことから、海外研修が、英語力向上のための動機付けとして機能していることがうかがえる。

さらに、年1回2学期末に授業アンケートを実施しているが、従来のアンケートは、受講科目ごとに同様の質問に答える形式であったために、生徒1人あたり十数回同じアンケートに答えなければならなかった。そのため、ともすると惰性で回答する例も見られ、結果の信頼性に疑問を持つ部分もあった。今年度、大幅な見直しを行い、生徒に負

担のかからないものとした。設問数も 22 から 15 へと項目を減らし、同時に、生徒自身が、自身の「学び」について振り返りながら、1 回のアンケートにより授業を評価する形式とした。15 の設問のうちアクティブラーニングに関する設問を 4 間設定した。具体的には、11 「課題（問題や目標）の解決や達成に向けて、自ら考える力が必要とされ、それが鍛えられると感じる授業」、12 「生徒同士で学び合うことで理解が深まる、意欲が高まる等のメリットを感じられる授業」、13 「発言や発表を通して、積極性や行動力、発信することの重要性を学ぶことができる授業」、14 「授業で得た知識や背景等がきっかけとなり、実社会への興味や関心が広がる授業」の 4 項目である。また、アンケートは従来通り教育課程上の全教科科目を対象とし、それぞれの項目に当てはまる教科科目を複数回答も可能として回答するものとした。結果は、回答数に占める割合(%)を用いて、分析した。

アンケート結果の全学年のデータを見ると、「総合的な学習〔探究〕の時間」はもとより、国語や英語において、ほぼ 4 項目全てにおいて、高い数値を示している。具体的には、4 項目の全科目的平均値 8.3 のところ、国語、英語がそれぞれ、14.2、13.6 という数値となっている。また、項目・学年別で結果を見ると、第 14 項目において地歴公民や理科の回答が学年の進行に従って、数値も上昇している。1 年生と 3 年生の比較では、全体平均が 7.3 から 8.4 への上昇に対して、地歴公民は 20.1 が 37.6 へ、理科では、9.4 から 12.5 へと上昇している。このことは、授業で得た知識が知識としてとどまっているのではなく、社会を見る力として身についていると判断できる。生徒の学びの姿勢も探究的で能動的な学びへと深化していると考えられる。

教員側の変化としては、SGH 指定を受け 4 年が経過し、「総合的な学習〔探究〕の時間」の指導で身につけた手法やワークシート等の教材をそれぞれの指導者が他教科でも応用、活用することで授業に変化が現れていると言える。このことは、「総合的な学習〔探究〕の時間」を一部の教員が担当するのではなく、過半数の教員が毎年担当することによる波及効果であると判断できる。

今年度も、海外研修実施後のアンケート調査により研修前後の生徒の意識の変容について海外研修参加者 25 名全員に対して調査を行った。質問項目は、(1)「グローバルな視点」に関するもの 5 項目、(2)「グループワークの視点」に関するもの 5 項目、(3)「自己の成長」に関するもの 3 項目、合計 13 項目にとし、回答は、1.「あてはまらない」～10.

「あてはまる」の 10 段階とした。その中で、研修後、「様々な文化圏の人々と積極的に関わりたい」（8.9）、そのために「英語力を伸ばしたい」（9.5）という「グローバル」に関する項目が高くなっている。さらに、「自分の意見に反対する人の前でも、自分の意見を言うことが出来る」（9.5）、「物事の全体像をつかむために、多面的に見ることが出来る」（9.6）といった、「グループワーク」や「自己の成長」に関する項目も意識が高まっている。海外研修で高められた意識が動機付けとなりその後の学修の深化と広がりをもたらすことが期待できる。

成果普及、情報共有のための取組として昨年度に引き続き SGH 通信の発行を行った。今年度は 25 号まで発行し、HP 上にも掲載している。さらに、SG 課題研究「地域防災」班の成果である「防災カレンダー 2020 年度版（2020 年 4 月～2021 年 3 月）」を発行し、地域自治体や学校、関係機関に配布したほか、希望者には頒布し、成果の普及（防災意識の向上）を行っている。加えて、「地域産業」班の成果として地元特産のスターチス

を使った雑貨を提案し、地元自治体の「ふるさと納税」の返礼品として採用されることが決まっている。以上のように、地元地域から学ぶだけではなく、成果を地元地域に還元する取組が実際のものとして顕著になってきたことが、指定4年目の特徴である。これらを含め、学習成果の普及・発信に努めてきたことで、当初の計画は達成できていると考えている。

8 次年度以降の課題及び改善点

日高高校のSGH事業の中心を担うSG課題研究において「地域産業」「地域防災」「地域文化」「移民難民」の地元地域の課題に関する4テーマを設定し、探究学修を進めてきた。従来SG課題研究Ⅱの授業展開において、探究テーマの決定の際に、生徒の希望をとりまとめたうえで、各テーマの生徒数が、ほぼ均等になるように調整してきた。SGH指定から4年が経過し、フィールドワークも活発となり、指定直後に比べ、生徒の学びが深化し、興味関心がより広汎なものとなっている。こうした中、SG課題研究Ⅰで4テーマの概要を学修し、希望テーマを持っていても、人数調整のために希望順位の低いテーマに割り当てられる生徒も現れることとなっている。そのため、探究意欲が十分に高められない事例も見受けられる。この問題を解決するために、次年度のテーマ決定に際しては、テーマ毎のテーマ間の人数バランスにとらわれることなく、テーマ決定ができるようにシステムの見直しを行う。

次年度、SGH事業は、最終年度を迎えることになる。現在取り組んでいる事業内容を検討し、継続可能、代替可能、廃止等の見直しが必要となる。新たな視点としては、各テーマでの探究活動においては、ローカルとグローバルの視点だけではなく、これから持続可能な社会の実現に向けたSDGsを念頭に置いた課題発見、探究活動、課題解決に向けた取組を進めていく。グローバルで普遍的な視野をもって地方を活性化することの出来る人材育成が出来るようにSGH終了後の探究学修の方向性を探っていきたいと考えている。

海外研修については、現在3か国で行っているが、研修先の見直しを検討するとともに海外研修で培った海外の高校生との協働学修の手法を、現在は生徒交流が主体となっているデンマークと中国の姉妹校交流に取り入れ、新たな学修の場を創設していく計画である。加えて、海外研修は、事前・事後学修として地元の企業や団体の協力を得ながら進めているが、SGH終了後、構築された協働体制を日高高校の教育資源として維持・継続していく方策を探っていきたいと考えている。

【担当者】

担当課	県立学校教育課	T E L	073-441-3681
氏名	岸本 高幸	F A X	073-441-3652
職名	指導主事	e-mail	kishimoto_t0004@pref.wakayama.lg.jp

I SG 課題研究 I・II・III（総合的な探究・学習の時間/課題研究）

1 学年 SG 課題研究 I（総合的な探究の時間）

SG 課題研究 I は 1 単位、クラス単位で実施している。

1 全体の流れ

学習のねらい（目標とするスキル）		
	普通科	総合科学科
(ア) 発信力	(ア) 情報処理と情報発信スキルの獲得	
(イ) 情報の収集や処理の手法	(イ) 原理探究の姿勢の向上	
(ウ) アンケート調査の手法	(ウ) 論理性の向上	
(エ) プрезентーションの手法	(エ) 科学的社会的視野の拡大	
実施内容		
月	学習項目（学習時間：全 35 時間）	
	普通科	総合科学科
4月	1. オリエンテーション（1）	
5月	2. 地域文化（7）	2. 論文から学ぶ（2）
6月		3. 京都大学瀬戸臨海実験所研修（6）
7月		
8月	3. 地域産業（8）	4. サイエンスフェスタ（10）
9月		
10月		
11月	4. 地域防災（8）	
12月		5. ディベート（12）
1月	5. 移民難民（8）	
2月		
3月	6. 成果発表会（3）	6. 課題研究 II に向けて（4）

生徒の学び（年間取組全体を通して）

- 地域のことについて調べて発表する授業が多かったため、この地域についてより関心を持つようになった。一年前に比べて、地域への興味や愛着が湧いた。
- 総合的な探究の時間はグループで話し合うこと、その意見をまとめること、またそれをわかりやすく発表することが必要だったため、コミュニケーションの大切さや人と協力することの大切さを学ぶことができた。
- 災害時はまず個人で行動しなければいけないこと、そのためには積極性や行動力が必要であることを学んだ。

2 学科の特性と学習活動

【普通科】

総合的な探究の時間

(1) ねらい

本校が設定する地域課題全4テーマを一年間で学習しながら、2年次の探究活動で必要となるスキルを学習する。

(2) 内容と方法

4テーマを4単元として、スキル学習に重点をおいた授業を行う。

第1単元「地域文化」——目標とするスキル：発信力

第2単元「地域産業」——目標とするスキル：情報の収集や処理の方法

第3単元「地域防災」——目標とするスキル：アンケート調査の手法

第4単元「移民難民」——目標とするスキル：プレゼンテーションの方法

・学習活動

第1 単元	地域文化			
目標とする スキル	発信力を身につける。			
月	時間	学習内容	形態	生徒の活動
4月	1	科目的理解 発信力を学ぶ	個人 ペア	年間を通じた学習内容を理解する。 伝達ワークを通して発信力を学ぶ。
	2	発信実践	ペア	居住地域の身近な文化素材を広報する。
5月	3	発表準備（1）	個人	メディアを活用して資料を収集し、伝える内容を決定する。
	4	発表準備（2）	個人	発表実践に向けて視覚資料をデザインしまとめる。
6月	5	発表実践（1）	班	班内で発表する。 ・傾聴姿勢、質問精選、振り返り
	6	発表実践（2）-1	全体	クラス内で発表する。 ・傾聴姿勢、質問精選、振り返り
	7	発表実践（2）-2 まとめ	全体	発信力についての学びを今後どう生かすか、考察しまとめる。

生徒の学び

- ・発言や発表は得意ではないが、自分を現すチャンスであることを学んだ。積極性や行動力、発信することの重要性を学んだ。
- ・聞いている人に対してわかりやすく説明しようと意識するようになった。

第2 単元	地域産業			
目標とする スキル	数値データを表やグラフを用いてまとめる。 表やグラフを見やすく表現する。数値データを分析する。			
月	時間	学習内容	形態	生徒の活動
7月	1	データの統計処理	個人	数値データを表やグラフを用いてまとめる。
	2	データの統計処理	個人	度数分布表を作成する。 表のレイアウトを見やすく整える。
	3	グラフの活用方法	個人	グラフの種類を知り、目的にあったグラフを作成する。
9月	4	課題設定	班	地域産業についてグループテーマを設定する。
	5	情報収集・分析	個人	国勢調査のデータを利用し地域産業に関するものを表にする。表からグラフを作成する。
	6	分析結果の考察 今後の課題	班	表やグラフからわかったこととわからなかつたことをまとめることをまとめる。今後の課題及び改善点を考える。
	7,8	クラス内発表 相互評価	全体	クラス内発表を行い、相互評価を行う。

生徒の学び

- ・グラフ作成の方法を学び、「和歌山の林業」のグラフを完成させることができた。また、そのグラフを使って発表に生かすことができた。

第3 単元	地域防災			
目標とする スキル	防災を自分事と捉える。アンケート調査の手法を学ぶ。			
月	時間	学習内容	形態	生徒の活動
10月	1	防災知識を得る 自分事と捉える (1)	個人 班	自助・共助・公助について知る。 ワークシートを用いて災害状況をイメージし、共有する。
	2	自分事と捉える (2)	班	避難所運営シミュレーションを通して避難所としての日高高校及び日高高校生の役割を考える。
11月	3	自分事と捉える (3)	班 全体	避難所運営シミュレーション(2回目)に取り組み2回分の分析や気づきをクラスで共有する。
	4	防災アンケート (1) 質問紙調査の基礎	班 個人	アンケート作成の手法を学び、防災アンケートの項目を考える。
	5	防災アンケート (2) 作成と実施	班 全体	アンケート用紙を作成し、クラス内アンケートを実施する。
12月	6	防災アンケート (3) 集計と分析	班 個人	調査結果を集計し、発表用ポスターとして可視化する。分析し、傾向や特徴をまとめて、予想と結果の違いを知る。
	7,8	防災アンケート (4) 共有と総括	班 全体	班単位またはクラス全体で発表を行い、相互評価する。

生徒の学び

- ・防災アンケート作りや避難所運営シミュレーションの授業では、一人一人の意見を聞いてよりよい選択をしようとする姿勢が身についた。

第4 単元		移民の歴史・難民問題			
目標とする スキル	国内や海外の文献の検索方法を学ぶ。問題点、課題の抽出方法を学ぶ。 集めた資料をまとめ、プレゼンテーションを行うまでのスキルを習得する。				
月	時間	学習内容	形態	生徒の活動	
1月	1	現状を知る	個人	映像視聴と語句調べを通して移民問題や難民問題の現状を知る。	
	2	課題設定	班 全体	移民の歴史または難民問題のうち一つを選択し班を構成する。班のメンバーで調べたいことを付箋に書き、用紙に貼ったうえで、共通項目や比較項目を探り、テーマを決定する。決定テーマをプレゼンし、全体で共有する。	
	3	資料収集 (1) 文献検索の方法	班	メディアを活用し資料収集作業に取り組む。引用、文献検索の方法を学ぶ。	
2月	4	資料収集 (2)	班	メディアを活用し資料収集作業に取り組む。集めた資料から、分かることや問題点、課題の解決方法を考える。	
	5	プレゼン資料作成 (1)	班	パワーポイントを作成する。レイアウトを工夫し、伝えたいことが効果的に伝わるかどうか検証する。	
3月	6	プレゼン資料作成 (2)	班	パワーポイントを仕上げる。発表用原稿を作成し、発表練習を行う。	
	7,8	プレゼン発表 相互評価	班 全体	各班でプレゼン発表を行い、相互評価する。	

生徒の学び

- 外国人と日本との関係を調べることで現状を理解することができた。実際の社会への関心が広がった。

(3) 4年間の成果と5年次に向けての課題**①生徒自己評価**

今年度 12 月に実施した授業アンケートのうち、探究的な学習活動に関しては問 11～問 14 の 4 項目で調査した。

※調査方法：各設問に該当する授業を回答する（複数可）。数字はのべ数に対する%である。

表(1)測りたい力と実際のアンケート項目

番号	測りたい力	実際の問
問11	思考力	課題（問題や目標）の解決や達成に向けて、自ら考える力が必要とされ、それが鍛えられると感じる授業。
問12	協働力	生徒同士で学び合うことで理解が深まる、意欲が高まる等のメリットを感じられる授業。
問13	発信力	発言や発表を通して、積極性や行動力、発信することの重要性を学ぶことができる授業。
問14	参画力	授業で得た知識や背景等がきっかけとなり、実社会への興味や関心が広がる授業。

表(2)グローバルスキル(本校独自の「付けたい力」8項目)との対応

	I 個人力			II チーム力			III 行動力	
問11	①やる気	②想像力	③コミュニケーション力	④グローバル力	⑤協働力	⑥マネジメント力	⑦発信力	⑧参加・参画力
問12	①やる気	②想像力	③コミュニケーション力	④グローバル力	⑤協働力	⑥マネジメント力	⑦発信力	⑧参加・参画力
問13	①やる気	②想像力	③コミュニケーション力	④グローバル力	⑤協働力	⑥マネジメント力	⑦発信力	⑧参加・参画力
問14	①やる気	②想像力	③コミュニケーション力	④グローバル力	⑤協働力	⑥マネジメント力	⑦発信力	⑧参加・参画力

表(3)授業アンケート結果（有効回答数：1学年 211人、単位：%）

1年	国語	地歴公民	数学	理科	保健体育	芸術	英語	家庭	情報	総合探究
思考力	14.2	4.2	23.4	7.4	2.4	3.0	13.4	0.9	4.5	11.9
協働力	25.3	1.1	8.1	3.2	7.4	2.8	6.0	0.7	9.1	20.4
発信力	7.5	2.8	3.5	2.4	1.2	1.2	5.1	0.4	2.4	45.7
参画力	4.7	20.1	5.0	9.4	4.3	5.0	11.4	1.3	3.3	8.7

②結果

「総合的な探究の時間」への評価と他授業への評価を比較し、以下3点を挙げる。

- (ア) 発信することの重要性について学んだ、身についたと回答する生徒が半数に迫る。
- (イ) 思考力・協働力・発信力への評価が高い。
- (ウ) 参画力への評価は特段高いとは言えない。

③分析

②を以下のように分析する。

- (ア) 授業ではほぼ毎時間生徒に発表を求めるワークを実施している。小班の中での発表や班を代表して全体に発表する等、物理的な発表機会の多さが生徒個人の気づきやそれに伴う成長につながったと考える。
- (イ) 授業形態は、4単元いずれにおいてもペアワークやグループワークを取り入れている。また、グループが固定する2学年の探究授業とは異なり、1学年では単元やワークの中でペアやグループが頻繁に変わる。これらのことから、個人力・チーム力いずれの重要性にも生徒が気づき得たと考える。
- (ウ) SG課題研究Iでは次年度2学年で取り組むSG課題研究IIに必要なスキル学習を目標としている。フィールドワークを実施し、地域調査を経て探究活動を進めるのは2学年のカリキュラムとして設定しているため、年次を経て本項目への評価が高まるこことを企図している。そのため、評価の高い他教科の特性と比較した時、1学年の現段階では参画力への評価は特段高いと言えないのも妥当であると考える。

④成果

4年間の取組の中では学習例が生徒間で後輩に引き継がれ、また、総合的な探究の時間を担当する教員数も増えた。年々校内で共通理解が深まる好ましい傾向にあり、2年次の「SG課題研究II」の基礎固めとして定着し成果を上げてきている。共通理解の深まりとともに、4つの単元ごとの生徒の学びの長所、短所を検討できる機会が増えてきたので、各担当教員で生徒の学習状況を考慮しながら柔軟に修正できるようになってきた。

⑤課題

「SG課題研究I・II」の関連性が高まり、2年次の学習の基礎固めとして大きな役割を果たしている一方で、4単元で習得させたいスキルが複数存在することから、各ワークを実施する物理的な時間の確保が難しい状況にある。SG課題研究IIを実践する中で再度学習させたいものなど、重複するスキルもある。他行事や他授業との関連の中、1単位で効果的にスキル学習とテーマ理解を進めるためにも、スキル項目を整理する必要を感じている。

(4) 校外研修——JICA 関西・関西学院大学研修

①目的

SGU として様々な取組を行っている関西学院大学（西宮市）、青年海外協力隊の派遣や ODA などの国際協力の拠点となっている JICA 関西の事務所（神戸市）を訪問し、グローバル人材についての理解を深める。

関西学院大学ではグローバル人材に必要な資質について大学教授より講義を受け、国際機関でいろいろな活動をサポートしている大学生の体験を聞く。さらに大学の関連施設を見学して理解を深める。

JICA 関西では、JICA 活動の概要や派遣隊員の体験談を聞いたり、また実際に JICA 関西の施設を見学したりして国際協力について理解を深める。

②実施時期、対象

2019 年（令和元年）年 10 月 7 日（月） 普通科 1 学年 182 名（普通科 5 クラス）

③研修内容

a 事前学習

JICA(Japan International Cooperation Agency)、青年海外協力隊、ODA(Official Development Assistance)、また、実際に青年海外協力隊の活動報告をしてくれる国（ベトナム・インドネシア）、そして関西学院大学の基本情報を担当教員が作成したレジメをもとに担当者による事前学習を行うとともに関西学院大学の担当教授からの与えられた課題「将来の自分の夢とその理由」、「大学生活について関学生に聞きたいこと」のレポート作成を行う。

b 校外研修

研修内容より、効率的な学びができるよう 5 クラスを A 班（1、2、3 組）と B 班（4、5 組）の 2 班に分け、実施した。

時刻	1組	2組	3組	4組	5組
8:20			集合(18m道路)		
8:25			バス出発		
10:25			バス到着		
10:40	JICA関西 ・JICA概要説明 ・JICA施設見学 ・元青年海外協力隊体験談 インドネシア　織田　芳孝氏		関西学院大学 ・特別講演 質疑応答 国際教育・協力センター 山田好一教授/学生		
11:40			昼食(学生食堂)		
11:50			大学施設見学ツアー		
12:30	・昼食(各自用意)講堂				
13:00	バスで午後のそれぞれの会場に移動(入れ替え)				
14:00		到着・トイレ休憩			
14:10	関西学院大学 ・特別講演 質疑応答 国際教育・協力センター 山田好一教授/学生		JICA関西 ・JICA概要説明 ・JICA施設見学 ・元青年海外協力隊体験談 ベトナム　柳瀬　友梨香氏		
15:10					
15:20	大学施設見学ツアー				
15:50					
16:00		バス出発			
18:00			バス帰着・解散(クラス毎)		

④生徒の学び

- ・関西学院大学の学生さんからは、外国で生活するために必要なことは人を認めることだと教わった。ベトナムと日本は似ているところが多く、少し親近感がわいた。勉強をしている理由を大学生は皆持っていて、「人間は勉強をやめると終わってしまう」と言ってくれた言葉が響いた。人の役に立つためにも、恵まれた環境でしっかり勉強することが大事だと学んだ。
- ・JICA 研修では、自分たちは開発途上国との連携のうえで生きていけることを感じさせられた。技術協力は押しつけではダメで、相手の文化を理解したうえで技術を伝えていくことが、互いにわかり合うために必要なことだと学んだ。物事のとらえ方は様々で、それをどうとらえるかによって一個人から世界までの壁がなくなるのだろうと思った。

⑤成果

国際機関や大学が少ない和歌山県において、実際にグローバルを感じられる関西学院大学、JICA 関西への 1 年生の訪問は貴重な体験であった。地理や歴史の授業などで海外の基本的な知識の学びは深められるが、その国の人々の暮らしを理解し、その中で課題を見出し、その解決に向けて奮闘する具体的な姿を理解することはできない。実際に、JICA の青年海外協力隊の報告や関西学院大学の教授や学生の話を聞き、質疑応答を深める中で参加した多くの生徒はグローバル時代に我々はどんな学びをしていくべきかという糸口をつかめたと思われる。今後 2 年次に向けて校内外の様々な学びへのモチベーションも高められた。

⑥課題

校外研修をより効果的にするために、1 日 2 か所ではなくいずれか 1 か所で内容の濃い研修ができるないかとの意見が昨年度から挙がっており、今年度はその方向性を模索した。しかし日程面、受入人数面等で調整が渉らず、昨年と同様 2 か所での研修とした。2 か所で充実した研修ができたとの声もある。バスでの移動時間ロスを減らしたい、研修内容は 1 か所でも深められるのではないかという方向性はこのまま持ちつつ、次年度に向けての研修計画を練っていきたい。



【総合科学科】

総合的な探究の時間

(1) ねらい

総合科学科第1学年の生徒は、本校附属中学校より進学してきた39名の1クラスである。総合科学科の生徒たちは、中学校次において、調べ学習や実験学習、ディベートや卒業研究など、多くの機会に自分たちで調べ、発表をするという学習を行っている。また2学年になる際には、「総合的な探究の時間」を「課題研究」と置き換え、自然科学的な観点からの課題の設定と学習を行う。このような特性を生かし、次の4点を狙いとした。

- (ア) 研究を行うためのスキルの獲得と情報を発信する力
- (イ) 原理探究の姿勢の向上
- (ウ) 科学的視野の拡大
- (エ) 論理性の向上

(2) 内容と方法

① 単元の構成と目標

本授業では以下の5つの単元と目標を設定した。

第1単元「論文から学ぶ」

- 目標
- ・論文検索の手法と論文作成の注意点について知る。
 - ・データ処理の方法と提示方法について学び、論文における「考察」の方法について知る。

第2単元「サイエンスフェスタ」

- 目標
- ・小学生に行う科学実験ショーとして、適切なテーマ決定ができる。
 - ・論文検索、予備実験等を行い、原理の探求を行い理解する。
 - ・「サイエンスフェスタ」を企画し、小学校への広報活動ができる。
 - ・よりわかりやすく伝える方法を探究し、表現する。

第3単元「ディベートプログラム」

- 目標
- ・論題について情報収集を行い、客観的に分析する力を身につける。
 - ・収集した資料を利用し、論理的に立案を構成することができる。
 - ・論理的かつ分かりやすく伝えるため、表現方法を工夫する。
 - ・ディベートを行う中で、傾聴力と判断力を身につける。

第4単元「課題研究に向けて」

- 目標
- ・他者の発表と自らの興味関心から、次年度の課題研究の適切なテーマ設定を行う。
 - ・次年度課題研究のテーマについて、情報収集と客観的な分析を行うことができる。

第5単元「校外研修」

- 目標
- ・地域の自然環境の豊かさに注目し、地域の特性を活かした情報発信について学ぶ。
 - ・生物の分類についての知見を深める。

②学習活動

第1 単元「論文から学ぶ」

次	内容	次	内容
1	卒業研究に関する文献を検索	3	卒業研究の「考察」を書き直す
2	文献から「考察」などについて学ぶ		

第2 単元「サイエンスフェスタ」

次	内容	次	内容
1	オリエンテーション・グループ決定	7	フリップ等の作成
2	テーマの検索と決定	8	直前準備・リハーサル
3	原理の探究(1)	9	直前準備・リハーサル
4	原理の探究(2)	10	サイエンスフェスタ
5	予備実験(1)と準備	11	振り返り・自己評価
6	予備実験(2)と準備		

第3 単元「ディベートプログラム」

次	内容	次	内容
1	オリエンテーション・グループ編成	11	フリップ等資料の作成(1)
2	テーマ研究	12	フリップ等資料の作成(2)
3	テーマ提示・担当グループの決定	13	フリップ等資料の作成(3)
4	テーマ別探究・データ収集と処理(1)	14	リハーサル
5	テーマ別探究・データ収集と処理(2)	15	ディベート「電子辞書」
6	テーマ別探究・データ収集と処理(3)	16	ディベート「朝食を和食に」
7	立論などの作成(1)	17	ディベート「原子力発電」
8	立論などの作成(2)	18	ディベート「ポリ袋有料化」
9	立論などの作成(3)	19	振り返り・自己評価
10	立論などの作成(4)		

第4 単元「課題研究に向けて」

次	内容	次	内容
1	2年生の研究テーマ説明	3	テーマ決定に向けて(1)
2	本校生徒研究発表会への参加	4	テーマ決定に向けて(2)

第5 単元「校外研修」

次	内容
1	① 野外実習(磯観察と採集) ② 分類実習と講義 講義「田辺湾の生物多様性とその分類」 ③ 水族館実習 講師：京都大学瀬戸臨海実験所 助教 大和茂之 氏

(3) 生徒の学び（生徒感想より一部抜粋）

①サイエンスフェスタ

- ・原理の理解することは何よりも大切だと思った。
- ・知らないことを知ることができてよかったです。
- ・15分間という短い時間で伝えるのは難しく、もっと内容を削るべきだった。
- ・準備が計画通りにいかず、スケジュールを立てる難しさを知った。
- ・一人ではできないことも、みんなでやればできることを知った。
- ・科学の実験は、見たり体験したりして楽しめるものが多いので、科学について知らない人も、興味を持ってくれると思った。
- ・自分が発表、実験するテーマの原理を学び、しっかり理解することで、子どもたちにも伝えやすくなるんだなと感じた。また科学を伝える楽しさも、今回から学ぶことができた。

〈サイエンスフェスタ当日の様子〉



②ディベートプログラム

- ・ディベートを通して、テーマについてさらに关心や理解を深めることが出来ました。グループでの役割分担の大切さも改めて学ぶことが出来ました。
- ・「論理的に」という難しさを感じた。伝えたいことの説得力をもたらせるのが難しい。
- ・肯定側、否定側で同じ資料を扱ってもメリットとしても、デメリットとしても使われることがあり、面白さを感じた。
- ・情報をどう汲み取ってどう活かすか、とても考える余地があると思った。

〈ディベート当日の様子〉



③校外実習

- ・同じ種類と思っていたが違ったり、違う種類と思っていたが同じだったり、個々の差が意外とあることに気づいた。
- ・自然を PR する形で地域活性化ができれば良いと感じた。
- ・自分で採った生物を調べることで、より楽しく生物についての関心が高まった。
- ・世の中に多くの生物がいるからおもしろい。
- ・たくさんの生物がいたがゴミもたくさんあり、今の状態を保つためにも生き物の大切さをもっといろんな人に知ってもらいたいと思った。
- ・黒潮の温暖な海流のおかげで珊瑚が育っているので、珊瑚にスポットをあてるのも面白いと思った。
- ・生物にそんなに種類があるとは思いませんでした。自分たちの足下にたくさんの生物が隠れているのだと考えると、少しドキドキします。
- ・自分の知らない世界を見ているようでとても楽しかった。
- ・和歌山県、特に紀南の珍しい生態系について、英語を用い、その自然の特異性をアピールすることで、日本の食文化のみならず、自然にも関心を持ってもらえるのではないかと思います。

〈生物採集の様子〉



〈同定と分類分けの様子〉



〈校外実習参加者〉



(4) 4年間の成果と5年次に向けての課題

・成果

①サイエンスフェスタ

昨年度よりも集客数が増え、来場者からも「昨年も来た」との声があり、地域にもイベントとして根付いてきているようである。そのため今年度は、多くの来場者を見込み、大人数に対応し、小学生が「楽しめる」、「理解しやすい」をより意識して、実験ショーの企画や準備を進めることができた。より簡素に伝えるため、テーマとなる事象をかみ砕いて理解する必要があるため、生徒たちの理解もより深まったと考えられる。

②ディベート

テーマとする内容は、昨年度よりも身近な内容や社会問題となることを扱い、自分たちでテーマの設定を行った。自然科学的な内容は少なかったものの、多くの文献を参考とし、引用を行い、資料のグラフの読みとを行うことができた。昨年のディベートの記録ビデオを見たこともあり、準備段階からディベート当日の流れをより意識し、取り組むことができた。

ディベートプログラムや2年次での課題研究のテーマ設定にも良い影響が出ている。

③校外研修

校外研修では、生物の生態だけでなく、生態系をとりまく環境や、ゴミ問題、また自然の豊かさを活かして観光業のアピールもできないかなど、多岐の分野にわたり興味関心が芽生えている。これから活動と情報の発信に期待が持てる。

・課題

今年度の活動では、自分たちが得た情報を整理、分析し、活用する力は十分身についてきたと考えられるが、情報発信という点では、まだまだ課題が見られた。今年度の活動においては、サイエンスフェスタやディベートにおいて、場面に応じた適切な資料を提示するということはできなかった。次年度は、場面に応じた資料の作成や提示を行うという点で、情報を活用する力を身につける必要がある。また、他学年他学科にも活動を知ってもらえるよう、情報発信ができれば、さらに充実した活動になると考えられる。

2学年 SG 課題研究Ⅱ（総合的な学習の時間/課題研究）

SG 課題研究Ⅱは2単位（授業は二時間連続）で実施している。生徒はテーマごとにグループ別で探究活動を行った。全体の流れは以下の通り。

1 全体の流れ

学習のねらい（目標とするスキル）			
月	学習項目（学習時間：全 70 時間）		学習活動
	普通科	総合科学科	
4月	1. オリエンテーション (2)		<ul style="list-style-type: none"> 研究分野を決定する。 研究グループを決定する。（担当者決定）
5月	2. 研究テーマの検討と決定 (8)		<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマを検討する。 テーマと仮説を設定する。 研究計画を策定する。
6月	3. 研究活動 (43)	3. 研究活動 (44)	<ul style="list-style-type: none"> 研究計画に従い、研究を進める。 必要に応じて校外での調査活動を行う。
7月			
8月			
9月			
10月	4. 校外研修 (6)		<ul style="list-style-type: none"> 研究機関や専門家を訪れ、知見を広める。 研究設定や進捗状況について校内で発表し、指導助言を得る。
11月			
12月		4. 和歌山県生徒 科学研究発表 会 (10)	<ul style="list-style-type: none"> 研究内容をまとめ、ポスター発表用資料を作成する。 研究発表会に参加し発表を行うほか、他校の生徒や専門家との意見交換を行う。
1月			<ul style="list-style-type: none"> 研究発表会等で得られた意見を参考に研究を深める。
2月			
3月	6. 成果発表会 (6)	5. 校内課題研究 発表会 (4)	<ul style="list-style-type: none"> (普)パワーポイント発表用の資料を作成し、校内で発表する。 (総)ポスター発表用の資料を再作成し、校内で発表する。
	7. 自己評価 (2)	6. 自己評価 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ループリック等を用いて自己評価を行う。

2 学科の特性と学習活動

【普通科】

総合的な学習の時間

(1) ねらい

地域の現状と歴史、及びそこに存在する様々な課題について理解を深め、体験的な活動や課題解決的な学習を通して課題解決の方策を探求する。また、その学習を通して地方と世界のつながりにも目を向け、グローバルな視点をもちながら、地域の発展に寄与しようとする態度を身につける。

(2) 内容と方法

本校が設定する地域課題 4 テーマから生徒が一つのテーマを選択し、課題を発見し、その課題を解決するための方法の探究を図る。生徒はクラスの枠組を超えて 5 人程度のグループを結成し、一年間の探究活動を進めた。

(3) フィールドワーク

各探究グループは、授業時間を活用して随時地域フィールドワーク (FW) を行う。それ以外に、今年は地域の専門機関や専門家を訪ねる、「1 日フィールドワーク」を実施した。今年度の地域フィールドワーク場所および協力機関は以下の通り。

日 時 :	・ 1 日フィールドワーク ・ 地域フィールドワーク	2019 年（令和元年）7 月 5 日（金）終日 授業日を中心に随時実施
内 容 :		

地域文化	道成寺、由良町中央公民館、道の駅 SanPin 中津、霧の郷たかはら、本宮大社、本宮世界遺産センター、夕陽丘短期大学、日高川町役場、山口八幡神社、岩内王子、善童子王子跡、御坊市立図書館、川辺保育所、湯川幼稚園、本校調理室、本校図書館
地域産業	地域ラーメン店、地域パン店、ロマンシティオーパワ御坊店、JA 紀州、あんちん、AEON モール和歌山、和歌山城、本校調理室
地域防災	1 市 6 町防災担当課（御坊市、印南町、日高町、日高川町、美浜町、みなべ町、由良町）、稻むらの火の館、日高川町防災センター、愛徳幼稚園
移民難民	紀州の花生産協同組合、特別養護老人ホーム日高博愛園、有限会社小池園芸、国際ビジネス情報協同組合、和歌山高等専門学校助教、和歌山高等専門学校職員

(4) 中間発表会

日 時： 2019年（令和元年）10月11日（金） 午後（5～6限）
内 容：

昨年度までとの相違点①個人発表シートを作成し、班活動状況についてジグソー法を用いて発表・共有する。

テーマ別分科会の形式で、中間発表会を実施した。研究動機、現在の状況、困っていること等についてジグソー法を用いて発表・共有し、大学教授等から研究の進捗状況に応じたアドバイスを受けた。昨年に引き続き、生徒相互コメントシートも用いた。

成果と課題：（○：成果、△：課題）

- 個の取組・発表が増えた分、生徒一人一人の活動量が増えた。
- （昨年度まで）PowerPoint スライド準備に発表会直前の放課後はばたばたしていたが、それが解消された。
- ワークシート形式の発表にすることで、スライドアニメーション効果に凝りがちな傾向を払拭できた。
- △個人発表シートを作成して臨む形にしても、やはり人任せにして班員の原稿をそのまま写す生徒もいた。
- △班に戻ってから情報共有する時間ももっと長く確保してもよかったです。



(5) 成果発表会

日 時： 2020年（令和2年）3月17日（火） 午前（1～4限） 分科会
2020年（令和2年）3月18日（水） 終日（1～6限） 全体会
内 容：

昨年度までとの相違点①全班ポスター発表に取り組む
②他校生徒にも発表機会を提供する
③より優れた発表をした班は県教育委員会が表彰する

今年は全班ポスター発表形式とした。これは過去3年間の本校での取組を見直した結果、さらには他校の取組視察から得た知見をもとに改良した結果である。また、4年目を締めくくるにあたり、県内唯一のSGH指定校として本校が果たすべき役割を検討した結果、他校生徒にも発表機会を提供することが県内の探究活動に関する情報共

有、取組の広がりに結びつくと考え企画したものである。

テーマ別分科会では、各班が 1 年間の研究の成果をポスターで発表した。各発表については 10 の観点に基づいて評価を行い、その結果をもとに全体会代表班（審査対象班）を選出した。指導助言者からは、1 年間の取組についてきめ細かく講評をいただくことができた。発表生徒は 3 学年での論文作成に向けて、1 年間の取組を振り返り、改めて成果を確認することができた。

全体会では、有志班によるステージ発表と 2 年生の SG 課題研究 II ポスター発表が行われた。今回初めて、広く県内に参加者を呼びかけたところ 2 校 3 グループが参加し、地域課題解決に向けて同一会場で発表交流することができた。他に県内 2 校から教員による視察申込もあったことから、情報共有の機会提供および取組普及を目指す第一歩として果たすべき役割を果たせたと考える。同時に、本校 1 年生にとっては来年度の分野選択および探究活動の見通しを持つ貴重な場となっている。

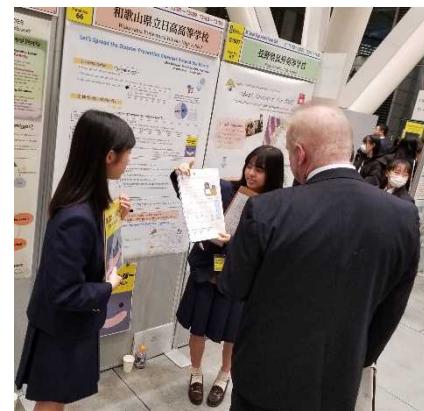
(6) 校外への普及

・ SWG 全国フォーラム（東京都）

SG 課題研究 II における探究活動をポスター化し、英語で発表した。今年度は防災分野で「Spread the Disaster Prevention Calendar Around the World」に取り組むグループが代表発表した。

・ WWL・SGH×探究甲子園（兵庫県）

SG 課題研究 II における探究活動をポスター化し、発表した。今年度は防災分野で「防災すごろく」に取り組むグループが代表発表した。



・ 和歌山県高校生探究活動発表会（本校）

県内全高校に案内を送付し、広く校外に生徒グループの発表参加および教員の参観を呼びかけた。また、校外でのフィールドワークで訪問や聞き取りにご協力いただいた事業所や自治体にも発表会案内を送付した。感染症の影響で発表会の年度内開催は叶わなかつたが、研究成果を伝え地域とのつながりを大切にすることが、来年度以降の生徒の研究充実にもつながると考えている。

・ SGH 海外研修

SG 課題研究 I～III を通して養うこと目標としている、本校が身に付けさせたい力「グローバルスキル 8 項目」の実践の場として SGH 海外研修を設けている。同時に、SG 課題研究 II で取り組む探究テーマを深める場として 3 つの派遣先を設定している。各派遣先における研修内容については「II 海外研修」に記載した。

* グローバルスキル 8 項目：やる気、想像力、コミュニケーション力、グローバル力、協働力、マネジメント力、発信力、参加・参画力

・全国海洋教育サミット

SGH 海外研修ベトナムチームがその探究活動を総括し、上記サミットでポスター発表した。「海洋問題」という絞られたテーマの中で、小学生から大学研究機関や水族館等さまざまな年代や団体と発表交流することができ、自分たちの発信力を高める以外にテーマへの理解を深めることができた。

(7) 生徒の学び（各種報告より）

・探究活動

一年間の探究活動について、生徒の振り返りには以下 6 点についての記述が多く見られた。

1 探究活動に対する姿勢

- ・自分たちで目標を設定して何をすべきか考え、行動に移すことができた。
- ・物事に疑問を持って追求しようとする大切さを学んだ。成長できたと思う。
- ・計画して実行することの重要性を学んだ。決められた時間の中で、やるべきことを一つ一つ実行していくことは、他の授業やこれから的人生において必ず大切になってくる。自分の甘さも実感し、反省することができた。

2 社会的な問題への関心

- ・世界で起こっている問題を他人事だと思わずに自分事としてとらえるよい機会となつた。
- ・今回取り組んだプラスチックごみ問題については、今後も自分の課題として考え方実践していくきたい。

3 チームワーク

- ・自分一人ではできないだろうと思ったことでも、メンバーで分担し協力することで成し遂げられることを実感した。意見をまとめていくのは大変だけれど、意見を交換して、考えを共有しながらよりよい答えを出すことの大切さを学んだ。
- ・チームとして行動するためにも、自分の意見を積極的に発言することが大切だと学んだ。

4 コミュニケーション

- ・話すことや相手に伝えることの難しさを学んだ。
- ・英語の発表であっても、相手の目を見て、反応を見て、どうにかして自分の言いたいことを伝えようとする姿勢が何よりも大切だと学んだ。コミュニケーションで大切なのは英語力以上に、ジェスチャーや笑顔で相手に応じようとする姿勢だと感じた。

5 多文化共生の視点

- ・この研究に取り組んだことで、普段あまり接することのない外国人との共生を考えることができた。私たちはわかりやすい看板でも、日本語に慣れていない人にとっては情報を読み取ることが難しいかもしれないということに気づけた。

6 地域への愛着

- ・探究活動を進める中で、今まで気づいていなかった地域の魅力を知ることができた。
- ・自分たちの活動に協力してくれる企業や地域の人のあたたかさを実感した。活動を通して、本当に多くの人に支えられているなと思うのと同時に、自分も将来、地域を支える優しい大人になりたいと思った。

・全国海洋教育サミット

全国規模の大会で発表することで、自分たちの発表技術を磨く経験ができたし、受賞校のレベルの高い発表を見ることで、素晴らしい発表とは何かを学ぶことができました。身ぶり手ぶりを増やす、相手に問い合わせを投げかける、聞き取りやすい言葉と声の大きさで伝える、それらの重要性を直接学ぶことができました。自分たちの発表についても褒めていただきましたが、これからもっと自分の発表技術を磨いていきたいと思います。

また、テーマである「プラスチックゴミ問題」についての関心もこの一年を通して深まりました。サミットでは、小学生や大学で研究している方など、多くの人が海洋ゴミ問題について真剣に発表していました。これだけ多くの人が真剣に取り組んでいるのだから、地球上のごみも海洋ゴミも、きっと減らせるだろうという希望を持ちました。私たちの取組についても、もっとたくさんの人々に知ってもらえるようにこれからも発信し続けたいと考えています。（高校2年生）

(8) 4年間の成果と5年次に向けての課題

①生徒自己評価

今年度12月に実施した授業アンケートのうち、探究的な学習活動に関しては問11～問14の4項目で調査した。

※調査方法：各設問に該当する授業を回答する（複数可）。数字はのべ数に対する%である。

表(1)測りたい力と実際のアンケート項目

番号	測りたい力	実際の問
問11	思考力	課題（問題や目標）の解決や達成に向けて、自ら考える力が必要とされ、それが鍛えられると感じる授業。
問12	協働力	生徒同士で学び合うことで理解が深まる、意欲が高まる等のメリットを感じられる授業。
問13	発信力	発言や発表を通して、積極性や行動力、発信することの重要性を学ぶことができる授業。
問14	参画力	授業で得た知識や背景等がきっかけとなり、実社会への興味や関心が広がる授業。

表(2)グローバルスキル(本校独自の「付けたい力」8項目)との対応

	I 個人力			II チーム力			III 行動力	
	①やる気	②想像力	③コミュニケーション力	④グローバル力	⑤協働力	⑥マネジメント力	⑦発信力	⑧参加・参画力
問11	①やる気	②想像力	③コミュニケーション力	④グローバル力	⑤協働力	⑥マネジメント力	⑦発信力	⑧参加・参画力
問12	①やる気	②想像力	③コミュニケーション力	④グローバル力	⑤協働力	⑥マネジメント力	⑦発信力	⑧参加・参画力
問13	①やる気	②想像力	③コミュニケーション力	④グローバル力	⑤協働力	⑥マネジメント力	⑦発信力	⑧参加・参画力
問14	①やる気	②想像力	③コミュニケーション力	④グローバル力	⑤協働力	⑥マネジメント力	⑦発信力	⑧参加・参画力

表(3)授業アンケート結果（有効回答数：2学年 222人、単位：%）

2年	国語	地歴公民	数学	理科	保健体育	芸術	英語	家庭	情報	2年 総合学習	1年 総合探究
思考力	27.8	5.2	22.6	8.3	1.4	0.0	10.9	0.3	0.3	15.5	11.9
協働力	46.1	2.8	6.0	6.0	2.2	1.3	5.0	1.3	0.0	18.0	20.4
発信力	25.6	3.6	2.9	1.4	1.1	0.7	7.2	0.7	0.4	32.9	45.7
参画力	7.7	17.9	1.9	6.8	7.7	1.5	12.3	7.4	0.3	13.9	8.7

②結果

2年「総合的な学修の時間」への評価と他授業への評価、また1年同授業への評価を比較し、以下2点を挙げる。

(ア) 1年同授業と比較して、思考力・参画力への評価が高い。

(イ) 1年同授業と比較した時、協働力・発信力への評価は少し低くなっているが、他授業との比較から見ると、評価は高い。

③分析

②を以下のように分析する。

(ア) SG 課題研究Ⅱでは生徒自らが協働して課題発見から課題解決に向けた提案まで取り組む。いわゆる主体的な探究活動を実践する中で、問題分析・意見の整理・地域調査・外部との折衝といずれの過程においても思考が必要となる。また、地域課題や社会テーマを扱うカリキュラムであることや、その中でフィールドワークや関係機関への連携および提案を推奨していること等が、生徒自身に社会に参加参画しているという実感を抱かせることに結びついていると考える。

(イ) ここで実施する探究活動は個人ではなく5人程度のグループでの協働となる。メンバー同士の意見調整や協力が必然となる中、一定の協働力は求められる。評価の数字は他授業と比較して低くないものの、1年次と比較した時にはグループが固定していることや毎時発表を求めるカリキュラムではないため、数字がやや下がっていると考える。同時に、1年次で取り組んできた発表・発信が一定のスキルとして既に身についたために、2年次での発表・発信を目新しく感じないことも一つの理由であると考える。

④成果

(ア) 研究内容の質的な深まり

2年次以降はカリキュラム上2単位に増加させたことが功を奏し、徐々に課題研究の意識が高まってきた。地域課題を調査研究した上で自分たちなりの解決法を示すという基本姿勢が身についてきた。高校生らしい視点を生かした取組も見られるようになっている。

(イ) 地域への広がり

4年次にはより地域に根ざしたフィールドワークを設定することで、地域との繋がりを密にすることことができた。多くの班で、実際に地域調査を行ったり、地域の団体や個人に働きかけたりする動きが見られる。アンケートの記述からもこの経験が生徒の成長につながったことが読み取れる。この地域とのつながりを来年度以降も維持発展させていく。

(ウ) 英語への意識と姿勢の変化

高校生津波サミットや SWG フォーラム、英語での発表など、生徒一人一人が英語の授業外の目的を持って英語を使うことで、英語を使ったコミュニケーションに意欲が高まってきつつある。今年度は留学生の存在が探究活動により影響を与えた。例として、生徒同士で英語や異文化に関する情報交流が自然な流れでできていたことが挙げられる。

(エ) 管理機関との連携

SG 課題研究 II の総括として設定している成果発表会を、今年は管理機関との更なる連携のもと「和歌山県高校生探究活動発表会」として昇華させることができた。これまで県内の高校に参加を呼びかける発信源として支援をしていただいていたが、今年度は管理機関として賞状を出すという形でも支援いただき、校内外の生徒にとって探究活動に取り組むモチベーション向上の動機付けとなつた。

他に、海外研修を実施するにあたっては「英語プレゼンテーション」の講義を担うという形で支援いただいた。生徒にとって、常日頃接する教員以外から指導を受ける機会は貴重で、その分リーダーとしての自覚も得ることに繋がったようである。年次を経て管理機関との連携が円滑になってきた。

⑤課題

(ア) チームビルディング

5人を基本とした探究チームの中には、意欲の差が生じ、まじめに取り組む生徒に仕事が集中することが起こる。今年度は中間発表会の形に修正を加え、個人作業部分を増やすことで課題解決を試みた。同様の課題はこれまでも、そして今後も起りうると考えられるため、今後も教員の関わり方や個々のワークの設定を工夫する等して対応していきたい。

(イ) 校外への波及

校外への波及として、年度末成果発表会への参加を広く校外に呼びかけた結果、2校3グループが参加する運びとなった。本校でも初めての試みであるため、時期設定や運営方法を含めて今年度の成果を検証し、最終年次となる来年度はより多くの学校に参加してもらい成果を波及できるよう努めたい。

(9) 探究テーマ一覧

地域文化	1 道成寺
	2 髪長姫
	3 和歌山県の方言を絵本で発信
	4 曰高川町（寒川地区）の活性化～限界集落について考える～
	5 熊野古道に外国人が来る理由
	6 地元の行事食～お寿司を中心に～
	7 曰高地方の祭り
	8 和歌山の特産品を使ってフルコースを作ってみた
	9 鯨について
	10 熊野古道
	11 方言を広めよう！
	12 和歌山県の昔話が消えていかないように
地域産業	1 地元のラーメン店を宣伝して活性化させる
	2 地域のパン屋について
	3 REMAKE USED CLOTHES
	4 スターチス グッズ販売にむけて
	5 かくれた特産品
	6 校内にじゃばらをPR
	7 商品の配置について
	8 御坊市のラーメン屋
	9 和歌山の観光
地域防災	1 すべての人が安全に避難するには
	2 ペットの避難対策
	3 防災意識向上化計画
	4 遊んで学ぼう防災カードゲーム！
	5 防災教育
	6 ハザードマップを広める
	7 乗客の命を守るしおり
	8 楽しく学べる防災すごろく
	9 かるたで楽しく防災学習！
移民難民	1 難民について～関心を高めるために私たちにできることは～
	2 外国人移住者の現状～日本とスペインの比較～
	3 移民の日本での暮らし
	4 移民に対する関心を高めるには
	5 外国人労働者について
	6 技能実習制度について
	7 外国人労働者との共存を目指す！
	8 難民イメージ改革～難民大国の料理を食べてイメージをよくしよう～
	9 日本の移民政策～ドイツと比較してみよう～
	10 外国人技能実習生がおかれている労働環境の改善

【総合科学科】**課題研究****(1) ねらい**

地域の現状と課題について自然科学の観点から検討し理解するとともに、必要な情報を収集し、自然科学の手法を用いて潜在的な可能性を追求する。これらの学習を通じて、課題を発見し探究する能力の向上を図り、広い視野を持ちながら課題の解決に迫る姿勢を育成する。

(2) 内容と方法**①事前説明の実施**

1年次の3月、「総合的な学習の時間」の授業において、令和元年度の課題研究の実施内容に関する説明会を行い、希望する研究分野・テーマなどについてのアンケート調査を行った。

②テーマなどの決定

事前に実施したアンケートなどをもとに、令和元年度の課題研究の実施内容について提示し、研究グループと担当教員・分野を決定した。

各グループ内で、研究テーマおよび研究計画などの策定を行った。

③研究活動の実施

各グループで研究の目的・方法などを検討し、研究を行った。研究結果は12月19日に和歌山県民文化会館で行われた和歌山県高等学校生徒科学研究発表会にて発表した。3月17、18日に日高高校 SGH 成果報告会で発表を予定していたが休校のため実施できなかった。

④各研究の実施内容

以下のテーマについて例示する。

(a) 「和歌山県民に愛されるトマトとミカンを用いた日焼け止めクリームの作成」

和歌山県はミカンの生産量、トマトの消費量が日本一である。本研究では、この二つに共通する「肌への影響」に着目して情報収集を行い、これらを利用した日焼け止めクリームの作成を目指し、研究を行った。実験方法、データの比較等、検討を行いながら研究を行った結果、ミカンの皮が紫外線を散乱し、日焼けを防ぐ効果がある可能性が考えられた。和歌山県高等学校生徒科学研究発表会では、ステージ発表を行った。

(b) 「日高地方のメダカの生態と水泳能力に迫る」

現在、絶滅危惧種Ⅱ類に指定されているメダカは、用水路等の整備が進んだ場所では生息しづらくなっている。その原因として用水路の水流が速く、水草も生えにくいためだと考えた。しかし調査の結果、現在の日高周辺の用水路にはメダカが生息している地域が複数存在することが分かった。メダカが生息している環境を参考に、生息できる水流速度や、季節ごとの行動範囲に焦点を当て実地調査を行うことで、メダカが生息できる環境条件を探った。

(c) 「麺の子～ねえ、今から 湯 切るよ～」

御坊市はラーメン店が多く、有名店も存在する。麺料理の味は、調理する過程で、ゆであがり後の麺から水分を取り除く作業が重要だと言われている。実際のラーメン店では、どの程度の衝撃で水分を取り除いているのか。また、その衝撃を再現することは可能なのかについて研究を行った。地域のラーメン店に協力頂き、生徒が実際に情報収集を行い、そのお店で使われている麺を利用して湯切りに必要な風速などの条件について実験を行った。

<課題研究テーマ一覧>

	小分野	テーマ
1	物理	麺の子～ねえ、今から 湯 切るよ～
2	物理	空気砲！！～空気を使って煙を飛ばそう～
3	化学	和歌山県民に愛されるトマトとミカンを用いた日焼け止めクリームの作成
4	生物	高2の夏、粘菌生活。
5	生物	日高地方のメダカの生態と水泳能力に迫る
6	数学	2次方程式
7	数学	ポーカーを吟味せよ

(3) 和歌山県生徒科学研究発表会

日 時： 2019年（令和元年）12月19日（木）

会 場： 和歌山県民文化会館

内 容：

午前に行われた SSH 指定校ステージ発表にまじり、本校の「和歌山県民に愛されるトマトとミカンを用いた日焼け止めクリームの作成」が参加した。午後からは、各ブースでポスター発表が行われ、課題研究全テーマが参加し、聴衆とのディスカッションを行い、研究内容についての理解を深めた。ポスター発表では、他校の研究内容も知ることができ、よく似たテーマでは情報交換を行った。特にディスカッションでは生徒だけでなく、大学教員など専門家からも質問を受ける場面があり、問われた内容について的確に答えるためにどうすれば良かったのかと、後日生徒が考え、追加実験を行っている姿がみられた。このことから、課題研究に対する生徒の意識を高めることができたと考える。自分たちの発表を基にディスカッションを行う形式は、生徒に大きな刺激となったことが、振り返りの中でも確認できている。また、ポスター発表後に行われた近畿大学生物理工学部 宮本氏の講演では、理系学部での研究過程や博士号取得の流れなどを直接聞くことのできる良い機会になった。

(4) 成果発表会(以下の日程・内容で実施予定だったが、休校のため実施されなかった)

日 時： 2020 年（令和 2 年）3 月 17 日（火） 午前（1～4 限） 分科会

2020 年（令和 2 年）3 月 18 日（水） 午後（1～6 限） 全体会

会 場： （分科会）日高高校会議室、課外棟、剣道場、翔栄館、図書館

（全体会）日高高校体育館

内 容：

分科会は総合科学科（課外研究）のみで行い、12 月の生徒科学研究発表会で指摘された部分などを検討・発展させた成果をポスター発表する予定だった。

全体会では代表 1 テーマがステージ発表を、他 6 テーマがポスター発表を行う予定だった。また、この発表では 1 年生や附属中学校生に対する、次年度以降の取組に向けた意識付けの場となる予定だった。

(5) 生徒の学び(自己評価シートより)

2 月に実施したアンケートなどの記載では次のような項目が見られた。これらの記載から、生徒は探究活動に対しておおむね前向きに取り組み、失敗やつまずきから多くのことを学んでいることがわかる。研究を通して研究対象に対する理解だけでなく、他者とのコミュニケーションや、互いを尊重し意見をまとめることの重要性を学んだようだった。さらに、研究における役割分担、計画立案などは日常生活にも通ずるところがあり日々の生活にプラスとなったこともうかがえる。

① 探究活動に対する姿勢

- ・自分たちの実験結果と文献の実験結果が異なり、その原因を調べることが面白いと感じた。
- ・たくさんの実験をして様々な情報を集められるようにした。また、実験結果から考察する力がついた。
- ・知識が少なくとも、自分たち目線の素朴な疑問を実験・考察に反映させていきたい。
- ・1 年間だけなくさらに長い期間研究を行い、考えを深めたかった。
- ・実際に実験すると様々な要因により、教科書で述べられている事実とは異なる結果が得られることがあると分かった。
- ・物事を段階的に発展させ、研究の信憑性を確立させるために先行実験を行うなど、研究を一つつかみ碎きながら進められた。
- ・長期間 1 つのテーマについて研究することで、内容に対する考えが深まった。

② 社会的関心

- ・メダカの生態について詳しく調べたことで、その希少性について学び、美浜町には、全国的にも珍しい黒メダカが多く生息していることが分かった。私達はこれからも生態系の保全に努めなければならないと思った。

③ チームワーク

- ・研究テーマが一般的にもまだ謎の多い内容だったため、班内でしっかり話し合い実験計画を立てた。
- ・班内で役割を分けて研究を進めることで、より深い知識を共有することができた。
- ・放課後も残って研究を進めることで連帯感が高まった。

- ④ コミュニケーション
 - ・協調性をもって、意見を出し合いながら研究を進めていこうと思った。
 - ・知りたい情報を確実に得るために、質問力とコミュニケーション能力が高まった。
 - ・研究をまとめて初めて聞く人にもわかりやすく説明できるようにし、論文を書いて記録も残したい。
 - ・互いの意見を尊重するという社会的に必要な能力も身につけることができた。
 - ・自分の考えを伝えることはすごく難しいが、議論するのは面白い。
- ⑤ 研究のためのスキル
 - ・限られた時間の中でデータを多く得るためには、最初にしっかりと計画をたて、見通しをもっておくが大切だと知った。
 - ・対照実験を行うための条件設定の重要性を知った。
 - ・実験は自分たちの思い通りにならないと知った。実験上での矛盾や、さらに調査したい事柄が増えると実験の変更を余儀なくされた。しかし、その分成功したときの喜びもひとしおだった。
 - ・実験方法を工夫できた。実験方法例がないところから始めたのでオリジナルの実験ができたと思う。
- ⑥ その他
 - ・計画を立て実行していくという経験から、日常生活でも今本当にやるべきことは何かを考えて行動するようになり、充実するようになった。
 - ・メダカを育てながら研究を進める中で、命を相手にしているという責任を怠ってはならないと強く感じた。

(6) 4年間の成果と5年次に向けての課題

① テーマ決定と研究の進め方

今年度の課題研究では、グループ内で研究内容についての議論が活発に行われた様子が、アンケートの記述からうかがえた。これは附属中学校時代から探究的な学習を取り入れてきたことに加え、生徒科学発表会という目標を設定することで探究活動に真摯に取り組む姿勢が向上された結果だといえる。研究テーマの決定に関しても、これらの経験が生かされている。しかし依然、教員に依存した形でテーマを決定するケースも少なくない。また、その研究を進めることができ本当に可能なのかを精査する力や、先を見越して計画的に研究を進める能力に課題が見られた。身近なところに关心や疑問を持つ姿勢や、計画的に物事を進める能力を育てることがこれからも求められる。

② 社会的事象への関心の広がり

身近なところから発想を広げた研究内容が年々多くなっており、単に自然科学研究にとどまらない関心の広がりが出てきたといえる。これは、担当教員の意識にも現れている。

③ 英語への意識

英語による成果物の作成などはすすんでいないため課題である。しかし、一部の生徒から「要旨を英語で記述しなくて良いのか」という発言が出ており、生徒の中に英語で結果をまとめるという意識があることが窺えた。

3学年 SG 課題研究Ⅲ（総合的な学習の時間）

SG 課題研究Ⅲは 1 単位で実施している。2 年次にグループで探究活動に取り組んだ過程及び成果について、3 年次では一人一人が個人論文として整理した。全体の流れは以下の通り。

1 全体の流れ

学習のねらい（目標とするスキル）		
普通科/総合科学科		
(ア) 活動を言語化して整理する力 (イ) 論理立てて記述する力 (ウ) 英語化する力		
実施内容		
月	学習項目（学習時間：全 14 時間） 普通科/総合科学科	学習活動
4 月	1. 論文の構成と型 (2)	
5 月	2. 論文作成 (10)	<ul style="list-style-type: none"> ・研究論文の形式を学ぶ。 ・研究内容を論文にする。 ・要約を英訳する。 ・論文をデータ化する。
6 月		
7 月		
8 月		
9 月	3. 英語要約作成 (2)	
10 月		

2 学科の特性と学習活動

【普通科】 【総合科学科】

総合的な学習の時間

(1) ねらい

2 年次までグループ単位で取り組んできた探究活動を、3 年次では個人で総括し、論文として言語化する。それにより、上表にある「言語化して整理する力」「論理立てて記述する力」を涵養する。また、全員が英語要約(Summary) 作成に取り組むことにより、英語化することの必要性を意識させ、その力の向上を目指す。

(2) 内容と方法

これまでの探究活動を素材として、個人の視点で総括し、論文化する。2 年次とは異なり、3 年次ではクラス単位かつ個人単位で、情報教室や生徒用パソコンを活用して作業を進める。また、英語要旨の作成に取り組む。

(3) 4 年間の成果と 5 年次に向けての課題

・成果

生徒が取り組みやすいよう、昨年度作成したひな形をさらに改良した。目標とするレベルも同時に示したことで論文作成のモチベーションが高まった。また、時間的に制約が大

きく内容を精査することができなかつたとの反省を生かし、論文作成にかける時間を大幅に確保した。じっくりと取り組むことにより、自分たちの研究について再確認するとともに発展的に見直すことも可能となり、論文の内容を深めることとなつた。進め方としては、2クラス同時展開の形で行つたが、このことが、同一テーマの研究を行つたグループ間の情報交換を円滑に進める効果を生んだ。

・課題

今年度まで使用可能だったPCがWindows7のサポート停止により利用できなくなり、今年度のような進め方が難しくなることが予想される。機器の確保とともに、進め方の工夫などを検討する必要があるだろう。

昨年度の運営指導委員会で指摘された、表彰等の形式で、よりよい論文に仕上げようという生徒の動機を喚起する仕組を設ける仕組みについては、未検討であるため、今後の課題としたい。

II 海外研修

1 研修設定

SG 課題研究 I～IIIを通して養うことを目標としている本校が身に付けさせたい力「グローバルスキル 8 項目」の実践の場として SGH 海外研修を設けている。同時に、SG 課題研究 II で取り組む探究テーマを深める場として 3 つの派遣先を設定している。探究テーマと研修との関わりは以下の通り。なお、地域文化学修についてはいずれの派遣先においても異文化と自らの住まう地域について比較探究する姿勢を培うことができると考える。

- (1) 地域防災学修「ふるさとの防災に学ぶ」—— インドネシア研修
- (2) 移民の歴史学修「ふるさとの先人に学ぶ」—— カナダ研修
- (3) 地域産業学修「ふるさとの産業に学ぶ」—— ベトナム研修

2 研修の流れ

月	派遣の流れ
4 月	
5 月	1. 募集開始（中間考査後～6 月第 1 週）
6 月	2. 派遣生徒選考（6 月 12 日～20 日）※課題レポートおよび面接
	3. 派遣生徒決定（6 月 21 日）
7 月	4. 全体研修（2 回）
	5. 国別事前研修開始（夏休み～派遣まで随時）※英語研修およびテーマ別研修
8 月	6. JICA 研修（8 月 22 日）
9 月	
10 月	7. 英語プレゼン研修（10 月 1 日）
	8. インドネシア研修（10 月 14 日～19 日）
11 月	9. カナダ研修（10 月 27 日～11 月 1 日）
	10. ベトナム研修（11 月 4 日～9 日）
12 月	
1 月	
2 月	
3 月	11. 研修成果ポスター発表（3 月 18 日）

※各派遣団は帰国後、事後研修を実施

3 事前研修

(1) 全体研修 (2019年7月10日, 7月17日 いずれも放課後40分程度)

第1回目 ねらい ・研修に臨む心構えを確認する。

- ・研修に臨む人々の意識を高め、共有する。
- ・発信練習をする。

教材

- ・ワークシート①

内容

・事前に作成したワークシートを持ち寄り、他テーマへの研修参加者が入り交じった7人程度のグループの中で、個人発表を共有する。

第2回目 ねらい ・研修に臨む心構えを確認する。

- ・チーム作りを開始する。
- ・発信スキルを一段階高める。

教材

- ・ワークシート①を生徒個人が改良したもの（下記資料参照）

内容

・研修チーム別にグループを構成し、第1回目よりも進歩させた内容のワークシートおよび発信スキルを用いて個人発表をし、チームで共有する。

成果 ・同内容のワークを段階を経て実施することで、生徒自身に自らの成長を視覚化して実感させることができた。

・研修先が異なる3チームに対して、本校のSGH海外研修団というもう一段階上のリーダー意識を持たせることができた。

<p>SGH カナダ 研修 2年 氏名 古部 了大</p> <p>1. 私がこの研修に参加する理由 The reason why I take part in this program is that I want to become a teacher in the future, so I think that I can do valuable experience.</p> <p>① Teacher → 指導する教員 ⇒ 教育への経験を積む。 ② なぜか... 美術・社会科における視野見方の拡張、変化が生じる 美術 ・時代だけではなく新しい発見 → 創作や見方による多様な表現 ・カナダの歴史と多様な文化 → その中で生まれた芸術を探る ⇒ 今後の芸術の道を拓く 社会科 ・カナダの深い歴史(様々な国々が開拓して形成された地理) → 世界の歴史を描む。 ・日本人移民の歴史と多国から移民、難民を受け入れて今のカナダの現代社会を育む。</p> <p>2. この国について事前に思い描いていたイメージと情報収集後のギャップ The gap between the images I have before and after gathering information about the country is that Canada's history is very deep and it was made by relationship between Canada and a lot of countries. 前 カナダの歴史はあまり深く掌んだことがない→曖昧 ⇒ 早くもううな印象? 後 植民地化、戦争や争いの舞台となり、巻き込まれたり ⇒ 周辺諸国との強い影響を受ける 公用語は英語とフランス語 ⇒ そんな歴史を乗り越えながらも独自の文化を伝承 そして様々な文化を融合 → 多様な文化の形成 現在の平和な社会が維持されている。</p>	<p>SGH インドネシア 研修 1年 氏名 渡本 乃愛</p> <p>1. 私がこの研修に参加する理由 The reason why I take part in this program is that I want to share measures to deal disasters with Indonesians. I think that it is important for us to prevent disasters. We will be able to use information to prepare disasters.</p> <p>日本 2011年 東日本大震災 1995年 阪神淡路大震災 インドネシア 2004年 スラウェシ島沖地震 2016年 メドネシア津波</p> <p>地震・津波での自然災害が多い ⇒ 防災について考えたい!! ・どうつながり組みか? できるのか??</p> <p>2. この国について事前に思い描いていたイメージと情報収集後のギャップ The gap between the images I have before and after gathering information about the country is that Indonesia is developing economy remarkably. I was so surprised to hear that. Indonesia had not been a rich country before, but many new buildings had been built and there are many public places in Indonesia.</p> <p>情報収集後 貧困 ストリートアーティスト 発展途上国 → 経済が急速に↑ 若いうち人口が多い → 安定した国内政治 ASEANの中核 世界に認めてる国みたい 正反対やん</p>
---	--

(2) JICA 研修（2019年8月22日 県教育委員会主催）

夏休み中に実施された「世界津波の日」2019高校生サミットin北海道 事前学習会
午後の部に本校の海外研修生徒も参加することができた。

ねらい ・JICA事業について理解を深め、国際協力について学ぶ。

・元青年海外協力隊員の講演を直接聞き、国際協力を身近なものとして捉える。

内容 ・第1部 講義「JICA事業と防災分野での協力について」

JICA関西市民参加協力課 石井潔氏

・第2部 講演「大洋州トンガ王国における防災教育～日本人だからできたこと～」

元青年海外協力隊 水野幸子氏

成果 ・国際協力の実際について、そのやりがいや難しさを感じる点を直接聞くことで学びを具体的なイメージとともに得ることができた。

・本研修は、当初より午後の部「JICA研修」への参加を申請し許諾を得て実現した研修であった。しかし、この日一日を通して研修に参加した教員より、午前の部「英語研修」の内容も本校生徒にとって効果的であるのではないかという報告を受け、後日、管理機関である県教育委員会に、本校生徒に向けた「英語研修」の実施を依頼したところ快諾いただき、次の研修へと繋げることができた。



(3) 英語プレゼンテーション研修（2019年10月1日）

ねらい ・プレゼンテーション（日本語、英語）における注意点を確認する。

内容 ・講義と演習 「英語でのプレゼンテーション」
県立学校教育課 指導主事 岸本 高幸 氏

成果 ・「原稿ばかりに視線を落とし聴衆の反応を見ていない例」「PowerPoint 資料の字が細か過ぎる例」など、発表時に陥りやすい問題点数パターンを講師自らが実演して教示する形式が、生徒にとって非常にわかりやすいと好評であった。
・県指導主事が直接生徒に関わり指導する機会を設けたことで、管理機関との連携が目に見えて密になった。



4 海外派遣

1 インドネシア研修

・ねらいと研修プログラム

- (1) インドネシアにおける防災対策、自然災害への危機管理と取組について連携機関で学ぶ。

プログラム1 国際協力を学ぶ – JICA インドネシア事務所
公共事業省水資源総局

プログラム2 アジア経済の仕組を学ぶ – ERIA ジャカルタ本部

プログラム3 世界遺産の被災と復興を学ぶ – ボロブドゥール史跡公園
プランバナン寺院史跡公園

- (2) 「総合的な学習の時間・防災分野」の取組を紹介するとともに、現地高校生と協働学修をする。

プログラム4 英語を用いた協働学修に取り組む – マダニア高校

- (3) 研修期間を通してコミュニケーション力を磨き、自国文化および異文化への理解を深める。

プログラム5 異文化の中で自らを客観視し、成長させる – ジャカルタ市内

プログラム6 事前事後研修を含むすべての研修の中で協働することの意義を学ぶ
– 本校及び現地

・日時

2019年（令和元年）10月14日（月）～10月19日（土）

・研修先

インドネシア共和国（ジャカルタ市、ジョグジャカルタ市、ボゴール市）

・事前研修、事後研修

事前研修① 全体研修：7月上旬2回

事前研修② 英語研修：夏期休暇中6回

事前研修③ 防災学修：夏期休暇中1回

事前研修④ プレゼン研修：夏期休暇～渡航まで

事後研修 研修総括、発表用ポスター作成、報告書作成：10～2月

・研修団構成

参加生徒：2年生1名 1年生3名 引率教員：2名

・研修日程

日次	月/日(曜)	地名	現地時刻	交通機関	予定(宿泊地)
1	10/14 (月)	関西空港 集合 大阪 発 デンパサール経由 ジャカルタ 着 ホテル 着 夕食・ミーティング ・点呼	08:30 10:40 16:45 18:43 19:45 21:00 21:30	GA883 GA417 専用車	・ジャカルタへ (ジャカルタ市内泊)
2	10/15 (火)	集合出発 ジャカルタ市内 ホテル着 点呼・ミーティング	08:30 20:00 20:30	専用車	・JICAインドネシア事務所 ・公共事業省水資源総局 ・ERIAジャカルタ本部 (ジャカルタ市内泊)
3	10/16 (水)	集合出発 ジャカルタ 発 ジョグジヤカルタ 着 ジョグジヤカルタ 発 ジャカルタ 着 ホテル着 点呼・ミーティング	05:45 06:30 08:10 18:20 20:00 21:00 21:50	専用車 GA204 GA215 専用車	・ボロブドゥール史跡公園 ・プランバナン寺院史跡公園 (ジャカルタ市内泊)
4	10/17 (木)	集合出発 ボゴール 着 ボゴール 発 ホテル 着 夕食 点呼・ミーティング	06:30 07:50 15:30 17:20 18:00 21:00	専用車 専用車	・マダニア高校訪問 (ジャカルタ市内泊)
5	10/18 (金)	集合出発 ジャカルタ市内 ジャカルタ発 デンパサール着	09:30 18:40 21:40	専用車 GA418	・ジャカルタ市内： 国立博物館,独立記念塔,イスティクラルモスク,ファタヒラ広場,スンダクラバ港 (機内泊)
6	10/19 (土)	デンパサール発 大阪 着 解散	00:25 08:20 09:00	GA882	・大阪へ

・生徒の学び

(1) インドネシアにおける防災対策、自然災害への危機管理と取組について連携機関で学ぶ。

JICA では主に 3 つのことを教えてもらいました。1 つ目に、JICA のインドネシア支部の皆さんに行っておられる災害関連の事業を説明してもらいました。2 つ目に、液状化について説明してもらいました。中部スマラウェン地震で、大規模な液状化と地滑りが一度に起こり、その原因解明に日本の研究者も尽力されているということだった。3 つ目に、地盤沈下についてだ。首都ジャカルタは現在、多くの商業施設やマンションが建設されており、急激な経済成長を遂げている。だが、一方でそのような施設が地下水を大量に組み上げるため、大規模な地盤沈下が起こっていると伺った。ERIA では、経済格差の深化・発展格差の縮小・持続可能な経済成長、この 3 つを目標に、日々ご尽力をされているということだった。

これらのお話を聞きして、私が感じたことは 3 つある。まず、災害に関するインドネシア人と日本人の考え方の違いに驚いた。日本人は防災意識が高い一方で、インドネシア人は自然には逆らえないため仕がないという考え方を持っているそうだ。よって、住民たちは災害発生後、政府の援助を待たずに自主的に仮設のテントを立て、新たなコミュニティを築いていくそうだ。日本では被災後、公助が中心になってくるが、インドネシアの復興は自助、共助が大きな役割を果たしているように感じた。被災してもすぐに自分たちで何とかしよう、生活を元に戻そうとする精神と行動力は凄いなと思った。だが、政府が災害発生後にあまり機能していないという点では、国力の脆弱性を感じた。そして、そこで JICA が "Built Back Better" をモットーに活動されていることを知り、ただ支援するのではなく、より良くすることを目指しているのがすごいと思った。

(参加生徒より一部抜粋)

(2) 防災分野について、マダニア高校の生徒との協働学修及び学校交流を行う。

オープニングセレモニーを終え、“防災意識を高める”をテーマとしてプレゼンテーションをしあいました。私達は、日本は高齢化社会なので“私達が高齢者にできること”を発表しました。インドネシアは子供が多い国なので“子供たちにできること”を発表してもらいました。マダニア高校の生徒さんはみんな英語がペラペラで自分のレベルの低さを痛いほど実感しました。発表も案内も質問もすぐに英語で言え、長くしゃべり続けられていたのが、本当にすごくて私も話せるようになりたいと刺激を受けました。聞きたいことがあってもすぐに言えなかったり、移動の飛行機や町中でも話しかけてもらえる機会があったのですが、すぐに会話がおわったりしてふがいなさを感じました。

日本の案内には英語、中国語、韓国語の表記がありますがインドネシアにはなかったので困った時の共通語である英語の大切さを実感しました。

(参加生徒より一部抜粋)

(3) コミュニケーション力を磨き、自国文化および異文化への理解を深める。

民族学と地理に関係する、とても大きなインドネシアの全領土を表す地図と民族の顔写真が展示っていました。民族によってそれぞれの顔立ちが異なっていて、私はその時に「民族の多様性」を実感しました。インドネシアは、17000 の島があり、そのうち 9000 は都市があり、8000 は植物、中には砂だけの無人島からなっています。東側の島は、電気が通っておらず、昔の民族の形がそのまま残っているとガイドの方が説明してくださいました。ま

た、彼らは選挙権を持っていないそうです。民族の顔写真には、カラフルな羽などがついた帽子などを身につけていたり、鼻に長い針のようなものを突き刺していたりしていて、怖いと感じたけれども、そのような民族が、近代化が進んでいる世の中でまだ実在することに感動しました。他にも、昔の建物の模型、化石化した人間の脳や、ミイラを近くで見ることができ、インドネシアの歴史を深く学べた貴重な時間を過ごす事が出来ました。

モスクの祈りの場は男性と女性で分けられていました。これは男性が集中するためだそうです。私がモスクで印象に残っていることは、イスラム教を学ぶための学校があったことです。私たちが訪れた時には、アラビア語を勉強している小学校の女の子たちがいました。アラビア語はとても難しいイメージがあるので、小学校が勉強するなんてとても驚きました。また、宗教を信仰するためには、その宗教に関する学習をしなければならないという風に感じられました。

(参加生徒より一部抜粋)

(4) 研修を振り返って身につけた力

私が今回の研修を通して成長できたと感じることは三つある。1つ目は、物怖じせずに話しかけることができるようになったことだ。初めは、何か尋ねたりお願ひしたりするのに、どんな単語を使ったらいいのか、作った文は合っているのかと、事細かにチェックして会話をしていた。だが、研修の最後の方では何か伝えたいことができたら、すぐに喋っていた。それは色々と考える前に、単語とジェスチャーで伝わるだろうという確信を持っているからだと思う。このような心持は話しかける勇気に直結している。つまり、会話をする時は細かいことは気にせず、自分の持っている知識と技術をフルに活用することが必要なのだ。失敗を恐れないくらいの勇気と行動力が自分の苦手意識を克服し、挑戦することに繋がると思う。

2つ目は、質問力がついたということだ。JICAとERIAの訪問では特に質問をする機会がたくさんあった。まだまだレベルの低い質問しかできなかつたが、それでも質問は礼儀であり、学びを深めるためには必要不可欠だ。プレゼンで本当に大切なのは質疑応答やディスカッションではないかと私は思う。だからこそ、自分自身やそのプレゼンを聞いた人の全員の学びを、より一層深めるような質問ができるようになりたいと思う。また、質問とは逆に答える技術を身につけるとみんなの理解も深まると思う。そのためには情報を全て管理し、時と場合によって瞬時にそれらを取捨選択する力や、質問の意図をくみ取る力をつける必要があると感じた。

3つ目は、リスニング力だ。リスニング力といつても言葉を拾って繋げることで内容をくみ取る力だが、完璧に英語をマスターしていない私にはまだ難しい。だから、聞き取れなかつたことや理解できなかつたことをはっきり相手に伝え、きちんと言葉のキャッチボールができるようになりたい。なぜなら、私は遠慮して分からなかつたことを聞き流し、後悔したからだ。

最後に、このような体験をさせていただいたのはたくさんの人の支えがあってこそものだという感謝を忘れず、学んだことをこれから的生活に活かしていきたい。

(参加生徒一部抜粋)

・研修の記録

(1) JICA での防災についての研修



(2) 公共事業省での研修



(3) ERIA での取り組みについての研修



(4) ボロブドゥールでの史跡公園での研修



(5) プランバナン寺院史跡公園での研修



(6) マダニア高校での防災協働学習①



(7) マダニア高校での防災協働学習②



(8) マダニア高校での授業交流



(9) 国立博物館での研修



(10) 独立記念塔内の研修



(11) 学校交流での記念写真



2 カナダ研修

1. 目的

- (1) 異文化コミュニケーション、異文化理解に関する見識を深める。
 - プログラム① 現地高校生との交流
 - プログラム② インタビュー調査を主とするフィールドワークの実施
- (2) 日系カナダ移民の歴史について学修を深める。
 - プログラム③ 現地和歌山県人会にて、日系カナダ人からの聞き取り調査及び交流
 - プログラム④ バンクーバー市近郊の日系博物館の見学
- (3) 生徒自らの主体性を涵養する。
 - プログラム⑤ 生徒自らが計画実行する「自主研修」の設定

2. 日時

2019年（令和元年）10月27日（日）—11月1日（金）（現地4泊、機中1泊）

3. 研修先

カナダ・ブリティッシュコロンビア州
(バンクーバー市、バーナビー市、リッチモンド市)

4. 事前・事後研修

- (1) 事前研修① 英語研修：夏期休暇中6回
- (2) 事前研修② プレゼン準備、自主研修計画、インタビュー準備：
9月—10月放課後
- (3) 事後研修 研修総括、プレゼン準備、報告書作成：11月—2月

5. 研修団

参加生徒：1年生2名、2年生6名 計8名
引率教員：2名

6. 研修日程

日次	月日(曜)	地名	現地時刻	交通機関	内容(宿泊地)
1	10月27日 (日)	関西空港発 成田空港着 成田空港発 バンクーバー 空港着	14:05 15:25 18:40 11:45	GK204 JL018	① バンクーバー市内見学 (1) ギャスタウン (2) スタンレーパーク (バンクーバー泊)
2	10月28日 (月)	バンクーバー リッチモンド	終日	公共交通 ・メトロ	① 学校交流 Richmond Secondary School (1) 授業参加 (2) プレゼン (日加教育比較) (3) 生徒交流 (昼食、校内散策) (バンクーバー泊)
3	10月29日 (火)	バンクーバー リッチモンド バーナビー	終日	専用車	① 和歌山県人会訪問 (1) インタビュー (2) 交流 ② 日系博物館見学 (バンクーバー泊)
4	10月30日 (水)	バンクーバー	終日	公共交通 ・市バス ・メトロ	① 自主研修 (1) インタビュー調査 「捕鯨」「ゴミ問題」 (2) アンケート ② 散策 グランビルアイランド、イング リッシュベイ (バンクーバー泊)
5	10月31日 (木)	バンクーバー バンクーバー 空港発	午前 14:15	専用車 JL017	ホテル出発 (機中泊)
6	11月1日 (金)	成田空港着 成田空港発 関西空港着	16:25 20:00 21:40	MM318	乗り換え 関西空港着後解散

7. 主な訪問先・研修内容

(1) 学校交流

—Richmond Secondary School 7171 Minoru Blvd, Richmond, B.C.

本校の生徒それぞれに日本語クラスの現地学生がバディとしてついてくれ、体育や美術、法律などの授業と一緒に受けた。学校案内やランチ交流など、日本語と英

語を交えながら交流をした。午後には、準備していたプレゼンテーションを行い、日本とカナダの教育システムの違いについてディスカッションをした。

生徒感想

・今日気付いたことは、もっと身の回りのことについて考えたり、知っておいたりして、それを伝えられる力を持たないといけないと言うことです。リッチモンドの高校生と教育についてディスカッションをしたときに特にそう思いました。私たちよりも圧倒的に彼らの方がたくさん意見を言っていました。そして私たちの意見をよく聞いてくれました。

・今日の学校訪問では、カナダの生徒の積極性に驚いた。「何か質問等はありますか」という先生からの言葉にほぼ毎回、誰かが挙手し質問したり意見を述べたりしていた。また、1クラスの人数が日本より少なく、20人程度と決まっているとの事であった。それは、各個人で勉強の仕方や覚え方が違うので、多人数だと生徒にも先生にもデメリットしかない、と先生がおっしゃっていたことに驚きました。



(2) 和歌山県人会の方々との交流

—**Steveston Community Centre 4111 Moncton St, Richmond, B.C.**

現地県人会の方々が集まって下さり、座談会形式でお話を聞かせていただく機会を得た。第二次世界大戦時の日系人収容を実際に体験された方から、当時の苦労や気持ちを聞き、生徒たちはメモを取りながら真剣に耳を傾けていた。本校卒業生の方も2名来られており、地元の話や共通の知人の話など、様々な話題に花が咲いた。



生徒感想

・大人になってから移民としてカナダに来たというパティシエの男性の、「言語ではやはり苦労するが、それ以上に何か自分の武器になる技術を持っていれば大丈夫だ」という言葉が印象に残った。少しでも自分が興味のあることに目を向けて、可能性を広げて選択肢を増やしておくことが大事だと学ぶことができた。

・私が研修に参加するきっかけになったのは、私の祖先が移民としてカナダに渡っていたことだったので、県人会の方たちに話を聞けたのはとても良かったです。スティーブ斯顿に住んでいる私の親戚と、県人会で来られていたちずさんが友人で、差し入れてくれたおまんじゅうを前日に一緒に作っていたなんて、本当にびっくりしました。これを機にまた親戚と連絡を取り、家族で会いに行く約束をしました。

(3) 日系博物館を見学

—**Nikkei National Museum & Cultural Centre 6688 South Moncton St, Richmond, B.C.**

県人会の方々と交流した後、日系博物館を訪れた。壁には日系移民の歴史が年表としてまとめられ、野球チーム「バンクーバーの朝日」が使っていた野球用品や移民一世の生活用品等が展示されていた。また、当時の生活や仕事の様子、第二次世界大戦後の再興への苦労が分かる資料があり、県人会の方々が話されていた苦労や努力に頭が下がる思いだった。

生徒感想



ミュージアムの壁に、「怖いと思う道こそ進むべきだ」という内容の言葉が書いてあった。午前にお話を聞いた県人会の方も「成長や変化には不安がつきものだけれど、あえてその不安に立ち向かい超えることでより良い自分になれる」とおっしゃっていた。私はまだ成長の途中だけれど、少しずつ進んでいるこの道を、自分を信じて歩んでいきたいと思った。

ミュージアムにあった第二次世界大戦時の日本人収容者のリストに、県人会でお話を伺った方のお名前があり、非常に驚いた。何も持たずに和歌山からカナダに来て、せっかく築き上げた家や仕事などをすべて奪われたことを思うと胸が痛くなつた。今のカナダの多文化多民族国家があるのは先人の方々が作り上げた歴史があることを忘れてはいけないと思った。

(4) 自主研修

現地滞在3日目に自主研修日を設定し、1日の予定のすべてを生徒たちが計画した。バンクーバーが海辺の街であることや、世界的にも注目が高まっている話題であることから「海洋プラスティックゴミ」と「捕鯨」について、テーマを絞った。4人ずつ2班に分かれて「プラスティックゴミ削減に向けて行っている工夫」や「捕鯨の是非とその理由」などをインタビュー調査することとなった。調査場所は、日系人の多く住む街スティーブ斯顿と、グランヴィルアイランド、イングリッシュベイなどである。当日は地下鉄とバスを使い目的地へ。平日の午前であまり人がいなかつたことや、通勤途中で立ち止まる人が少なかつたことから、場所を変えインタビューを継続。各テーマで50人から回答を得るという自分たちで決定したノルマに苦しみながらも、何とか夕方にはそのノルマを達成した。試行錯誤しながら英語で意図を伝えたり、役割分担を行ったりと少しずつスムーズにインタビューを進める姿が見られた。



生徒感想

- ・初めは自分から声をかけることに緊張していて戸惑った。でもだんだん慣れてきて、たくさんの人々に話しかけることができた。案外聞こえた英語の単語だけでも相手の言いたいことが分かることを知った。50人にアンケートをとるというノルマはこの研修の中で一番スタミナを使いしんどかったけど、だんだんコミュニケーションを取るのが楽しくなっていることにとても感動した。
- ・インタビューでは断られることも多く、もうやめたいなと思うこともたびたびありました。でも他のメンバーが頑張っている姿に励まされ、自分を奮い立たせてみんなでノルマを達成することができました。自主研修を通して、英語力はもちろん大事だけれど、それよりも、自分の気持ちを伝えようとする気持ちや、簡単な英語で伝える工夫、分からぬ事は分からぬという意思表示が大切なだと気付けました。この研修で一番達成感があり、一番自分の成長を感じられた日でした。

(5) 全体感想

- ・この研修を通して、僕の勉強に対する考え方方が変わりました。リッチモンドスクールを訪問したとき、バディの生徒に「カナダの子たちはみんな授業中などに積極的に意見を伝えていてすごいね」と伝えると、「自分の意見を言い合ったりしてコミュニケーションを取らないと面白くないでしょ」と返事されました。このことから、カナダの生徒たちにとっては「勉強=面白いもの」と考えられていることが分かります。自分の意見が間違っていたらどうしようと自信がなく、授業中に発言することが今まであまりなかったのですが、個人の意見に正しいとか間違いとかはないのだと気付きました。
- ・今回のカナダ研修で、自分から何事にも積極的に取り組もうとする姿勢が養われたと感じた。自主研修では日本でもなかなか行ったことのない見ず知らずの人へのインタビューを行い、初めは戸惑いと不安があったが、断られてもめげずに、積極的にカナダの人々に話しかけに行く心持ちは生まれ、成し遂げられたと思う。また、ノルマを設定し、それをみんなで一致団結して達成しようとする重要性と、達成感の素晴らしさに気付けたと思う。この研修で得た積極性と、英語での会話の重要性、団結力等の学びをこれから学習に生かしていきたい。



3 ベトナム研修

・ねらいと研修プログラム

- (1) プラスチックをリサイクルするベトナム工芸村他、関連施設を訪問する。日越両国の「プラスチック問題」への取組を学ぶことで、持続可能な社会実現のためにできることを考える。

プログラム 1 ハノイ市ゴミ処理場および大型商業施設のゴミ対策状況を視察する
—— Soc Son Landfill (ごみ埋め立て処分場)

AEON MALL Bình Tân (イオンモール・ビンタン)

プログラム 2 ベトナムのプラスチックリサイクルの取組を学ぶ
—— Recycling Village in Minh Khai (プラスチック再生村)

プログラム 3 御坊市地元企業のペットボトルリサイクルへの取組を学ぶ
—— 大洋化学株式会社、御坊広域清掃センター

プログラム 4 JICA の活動を理解する
—— JICA ベトナム事務所

- (2) 地元企業と連携した学校内のペットボトルリサイクルに関する取組を現地で紹介し、現地高校生と協働学修を行う。

プログラム 5 高校生との協働学修と交流 —— チャンフー高校

- (3) 研修期間を通してコミュニケーション力を磨き、自国文化および異文化への理解を深める。

プログラム 6 異文化の中で自らを客観視し、成長させる —— 現地研修

プログラム 7 事前事後研修を含むすべての研修の中で協働することの意義を学ぶ
—— 日本、ベトナムにおける全研修

・日時

2019年（令和元年）11月4日（月）～11月9日（土）

・研修先

ベトナム社会主義共和国（ハノイ市、ホーチミン市）

・事前研修、事後研修

事前研修①英語研修：夏期休暇中7回、共通研修：7月～10月計3回

事前研修②大洋化学、御坊広域清掃センターでの研修：10月4日、10月25日計2回

事前研修③プレゼン準備：10月～11月

事後研修①研修総括、プレゼン準備、報告書作成：10月～1月

事後研修②成果発信2回[計画]：

2020年2月15日「第7回全国海洋教育サミット」(於東京大学)

2020年3月18日「和歌山県高校生探究活動発表会」(於本校)[中止]

・研修団構成

参加生徒：2年生 8名 引率教員：2名

・研修日程

日次	月日 (曜)	地 名	現地時刻	交通機関	予定(宿泊地)
1	11／4 (月)	関西空港 出発 ノイバイ空港着	10:30 14:00	VN331 専用車	・移動 ・市内見学 (1) 玉山神社、文廟 (ハノイ市内泊)
2	11／5 (火)	ソクソン県 ミンカイ村 ホテル付近	08:00 09:20 14:30 16:30	専用車	・和田秀樹氏と合流 (1)ゴミ埋め立て地 ①概要説明講義 ②現場視察 (2)プラスチック村 ①視察と講義 (3)廃品改修店 ②視察と講義 (ハノイ市内泊)
3	11／6 (水)	ハイフォン市	10:50	専用車	・チャンマー高校との協働学修 (1)「プラスチックゴミ問題」曰越相互プレゼントとディスカッション (2)昼食交流 (ハノイ市内泊)
4	11／7 (木)	ハノイ市 ノイバイ空港発 タソソニヤット空港着	09:10 14:00 16:15	専用車 VN239	・JICAベトナム事務所 (1)国際協力に関する講義と ディスカッション (ホーチミン市内泊)
5	11／8 (金)	ホーチミン市	11:00	専用車	・イソモ-ルビンタン (1)企業のゴミ問題への取組講義 (2)質疑応答、店内ゴミ集積所視察 ・市内見学 (1)市庁舎、展望台 (機内泊)
6	11／9 (土)	タソソニヤット空港発 関西空港 到着 解散	00:25 07:30 08:20	VN320	入国手続き後、解散

・生徒の学び

(1) 現地研修

ベトナムでは「プラスチックゴミリサイクル」に関する内容を研修しました。

ハノイでは現地で活動するコンサルタントの和田英樹さんが私たちの研修をサポートしてくれました。まず、和田さんは「VWP（ベトナムウェストプランニング）」について話してくれました。これはベトナム廃棄物エネルギー化プロジェクトの略です。ベトナムのゴミ問題の特徴の一つに、既存処理場からの環境汚染が問題視されていることがあります。また、ベトナムは家庭から出たごみをそのまま廃棄しているため、日本は100年間に7~8,000tの排出に対して、ベトナムは10年間で6,000tものゴミが処理場に送られている事実などを講義してくれました。

ゴミ埋め立て処理場では大きく分けて3つのことを教えてもらいました。

1つ目は、ベトナムは日本の技術を利用して最大4,000tのゴミを燃やすことやそれによって発電ができる焼却炉の設立を予定しており、それに対して1年に2度はゴミ処理場へ近隣住民からのデモがあるということです。ベトナムのゴミ問題における課題は既存処理場からゴミを燃やすことで飛灰やメタンガスなどが発生するために起る環境汚染問題です。また、汚水処理が1番難しく、困難だということです。

2つ目は環境対策として、悪臭を放たないように消臭剤を使ったり、汚水が雨に流れ出ないようにするためにゴミの上にセメントで膜を作ったり、また少しでも無駄に燃やすゴミの量を削減し環境を守るために可燃物か不可燃物かで分別をしているという内容です。

3つ目は市の対策として、道路、河川、鉄道からガス、電話などの生活基盤や社会経済産業基盤（インフラ）を作ること、市内住民の健康調査をすることや建物を建てるのこと、スーパーのレジ袋をナイロンから紙袋に変える取組をしているという内容でした。

研修を通して、日本とベトナムの企業とが協力し合いゴミ処理や水処理などを行っていることを学びました。今日両国が陥っているゴミ問題についての知識を深め、今よりもっと良い環境づくりをすることができる関係の素晴らしい感覚を感じました。

プラスチック村では特に分別の大切さを実感しました。日本では分別することを当たり前として私たちも行っています。ベトナムでは分別に対する呼びかけが、まだ人々の生活に浸透していないと感じました。自分が今捨てようとしているゴミを正しい処理の仕方で正しい場所に捨てるだけで、何人もの人の労力が少しだけでも省けます。それをたくさんの人に行うことによってもっとリサイクルしやすくなると思いました。自分たちが暮らす環境とはかけ離れた場所を実際に見てみると、資料だけではわからないゴミ問題の深刻さを体感することができました。

ホーチミンではAEONモールビンタンを訪れ、ゴミ問題への企業への取組を学びました。AEONではエコバッグの使用を奨励したり、毎月5日・20日にはイオンメンバーオ客様に米粉でできたリサイクルストローを配ったりするなど、プラスチックゴミ削減に向けた取組を進めているということでした。実際に店舗のゴミ分別箱やゴミ集積場を見せてもらった他、分別を市民に浸透させることの難しさなどを教えていただきました。

今回、どの研修においても多くの方々にお世話になりました。実際に講義してくださった方々はもちろん、現地 AEON に連絡を取っていただき私たちの研修に同行までしてくださった日高町商工会議所の荊木さんに、この場を借りてお礼申し上げます。

(高校 2 年生)

(2) チャンフー高校での協働学修

現地の高校、チャンフー高校では、両国のゴミ問題について話し合い、世界の環境問題への理解を深め、解決策や自分たちにできることは何かを追求しました。

チャンフー高校からは「3R の大切さを世界で共有しよう」、私たちからは「再資源化に向けての分別や意識向上に一緒に取り組もう」という内容をそれぞれ提案し、「3R、4R、5R を実践する人が増えることで、海洋ゴミは減らせるはずだ」という結論を導きました。

具体的には、私たちは大洋化学で学んだ内容や日高高校生を対象に行ったアンケートなど、事前学習の成果から分かった日本の課題やプラスチックゴミ問題、これらを解決するために自分が行っている活動についてプレゼンテーションをしました。誰でもできる、一般論を提案するようなプレゼンではなく、自分たちだからこそ伝えられることをたくさん詰め込んだ、よい内容の発表ができたと思います。

ただ、発表技術については詰めの甘い部分が多くあったと後悔しています。また、声の大きさ、抑揚、アイコンタクトなど相手を引き付けるような技術もまだまだチャンフー高校の生徒よりも足りなかったように思います。面白い内容をより興味をもって聞いてもらうにはこれらの技術は不可欠です。チャンフー高校の生徒の発表は私にとって、とてもいい刺激になりました。

(高校 2 年生)

(3) 研修総括

私達の高校ではリサイクル活動を行っています。その活動とは日高高校と地元の御坊広域清掃センター、大洋化学と連携しペットボトルのリサイクルを行うというものです。学校で集められたペットボトルは清掃センターが回収し、フレーク化されます。その後、大洋化学株式会社がそのフレークで食器などの商品を作り再利用しています。

この連携システムを知ったとき、私たちは日高高校生がリサイクル活動にどれだけ取り組んでいるのかを調査すべきだと考えました。そこで日高高校生 100 人にアンケートを実施しました。まず始めに、世界のプラスチックゴミが問題になっていることを知っているのかと尋ねると、知っていると答えた人は 91% でした。次に、ペットボトルを捨てるときどうしているのかと尋ねると、他のゴミと分別している人は 90%、ラベルをはがす人は 88%、リングをとる人は 87%、中を洗う人は 72% という結果でした。

この結果から次のことがわかりました。日高高校生のリサイクル意識は高い。しかし、この行動を何のためにしているのか、自分達が分別したペットボトルはどのような道筋を辿ってリサイクルされているのかという事を理解していない人が多い。加えて、地域、地元企業と連携してリサイクル活動が行われている事を知らない人も多い。

これらを分析すると、日高高校生はプラスチックゴミへの問題意識が高くリサイクル活動に貢献してはいるが、そこには十分な理解や動機、根拠がないと言えるということが分かりました。そこで私達が今後しなければいけないことは、日高高校生のリサイクル活動への動機付けだと考えました。具体的に、世界のプラスチック問題と日

高高校のリサイクルシステムについて描いたポップを使って活動することを決めました。ポップ作製で気をつけたことは、イラストや写真を使い誰もが分かりやすいように描いたことです。それをペットボトル回収箱の側面に取り付け、日高高校生と教職員にリサイクル活動への理解、動機を根付かせていく計画です。そしてそれを学校内だけでとどめるのではなく、地域、和歌山県、日本、世界に広めていきたいと考えています。それでこそ 私達の研修が意味のあるものになると考えています。

今後は、研修の事後活動として海洋汚染プラスチック問題について東京で発表する事になっています。そこで今まで述べたことを多くの人に伝えられるように私達は学び続けなければなりません。そして学校、日本、世界の第一率先者となり、プラスチック問題解決に向けて歩めるような人になることを目標としています。最後に私がこの研修を通して思ったことは、行動を起こすだけでなくそこに動機、理解、根拠が根付くと驚くべき効果が現れるということです。それを根付かせるため今後も活動していきたいと考えています。そして何十年後の世界の未来を明るいものに変えるために、貢献していきたいと思います。

(高校2年生)

・研修の記録

(1)事前研修 大洋化学株式会社



(3)現地研修 プラスチック村



(2)現地研修 AEONモールビンタン



(4)協働学修 チャンフー高校



(5) 発信 第7回全国海洋教育サミット



(6) 活動 生徒作成ポップ

ペットボトルのゆくえ

- ① 回収される
- ② 工場でペットボトルフレークになる
- ③ 大洋化学さんへいく
- ④ お皿やトレイになる!!

このペットボトルは業者さんに回収された後、お皿やトレイになります。
つぶさずキレイにして捨ててください

大洋化学について

大洋化学（株） 御坊市島にあるリサイクル事業を中心とする会社です。

リサイクルPET素材の
食器製造[LauLau]

島内約140ヶ所で設置されたペットボトルを御坊市立循環センターでペットボトルフレークにし、大洋化学で様々なものに変わっています。

その性による食器や雑貨などが作られています。

ペットボトル4つで
1つのマグカップができる

日高高島の海や森林などに
植樹していくトイも
大洋化学で作られています!!

III 調査分析

1 SGH アンケート調査

本校の SGH 事業の取組に対して、一定の評価を得るために生徒を対象に質問紙調査を実施した。調査の質問項目は 25 項目とし、「地方創生に関すること」「グローバルスキル 8 項目（本校独自）に関すること」「将来・自主的活動・自己に関すること」の 3 つの柱を設定した。調査は、1 年生については 4 月と 1 月の年 2 回、2、3 年生は 1 月の年 1 回として実施した。1 年生の 1 回目の調査は、入学直後の意識を調査するためのもので、回答は 1 「あてはまる」 2 「どちらかというとあてはまる」 3 「どちらかというとあてはまらない」 4 「あてはまらない」の 4 件法とし、「あてはまる」を 10 点、「どちらかというとあてはまる」 8 点、「どちらかというとあてはまらない」 6 点、「あてはまらない」を 4 点とし、点数化した。また、1 月の調査では、4 月の調査と同じ質問項目について生徒自身の意識の変容を検証する調査とした。1、2 年生は 1 年間の意識の変容について、3 年生は、3 年間の意識の変容について調査を行った。回答については、1 年前あるいは 3 年前と現在の自分の意識を 1 「あてはまらない」～10 「あてはまる」の 10 段階で評価するものとした。

本校は平成 28 年度に SGH の研究指定を受け、4 年目となり、SG 課題研究や各種研修、発表などの取組が充実してきている。今年度は、上記 3 つの柱に属する 25 項目において、生徒の意識がどのように変容したのかについて数量的に分析を加えることとした。分析には今年度、令和 2 年 1 月実施の「自己変容に関する意識調査」の結果のほか、昨年度、平成 31 年 2 月実施「自己変容に関する意識調査」の結果を利用する。

柱	項目	質問項目
地 方 創 生	1	「道成寺」や「アメリカ村」など、日高地方の歴史や伝統文化について、ある程度知っている。
	2	日高地方には世界と結びついた企業があることを知っている。
	3	日高地方の会社がどのような製品を作り、どのような経営をしているかについて、ある程度知っている。
	4	自分が住む地域（地元）に愛着を感じ、誇りに思っている。
	5	将来、できれば地元で働き生活したい。
	6	将来、地元で生活して地域の活性化に貢献したい。
グ ロ ーバ ル ス キ ル	7	自ら考えて、何事にも積極的に物事に関わろうとすることができる。
	8	新しく有益なアイデアを生み出すことができる。
	9	グループの中で、自分と他者の意見を大切にしながら、合意を形成することができる。
	10	多様な文化や価値観を尊重することができる。
	11	他者と目標を共有し、共に活動することができる。
	12	目標に向けて自分たちで計画し、適切に取組を進めることができる。
将 来 / 自 主 的 活 動 / 自 己	13	自分たちの取組の過程や成果を積極的に発信することができる。
	14	自分たちの取組について、学校外の人にも理解や協力を得ることができる。
	15	将来海外の大学等へ留学してみたい。
	16	将来国際的な仕事をしてみたい。
	17	今後の社会では世界的・国際的なものの見方や考え方方が求められると思う。
	18	今後の社会では、英語によるコミュニケーション能力がますます必要となってくると思う。
/ 自 己	19	語学力をもっと身につけたい。
	20	グローバルな社会課題に関心を持っている。
	21	自主的に地域ボランティア等の社会貢献活動に参加したい。
	22	自主的に資格試験受験等の自己研鑽活動に取り組みたい。
	23	他者に適切に伝える工夫をしながら、人前で発表することができる。
	24	情報を収集し、ICT（コンピューター通信技術）等を活用して分析することができる。
	25	自然災害や防災に関心があり、必要な知識を持っている。

3つの柱	項目数	項目No
「地方創生に関するここと」	6	1~6
「グローバルスキル8項目（本校独自）に関するここと」	8	7~14
「将来／自主的活動／自分に関するここと」	11	15~25

1年前と比較して、生徒の意識がどのように変化したかを見るために、上記「3つの柱」の項目ごとの変容について検証してみる。

まず、(1) 「地方創生」に関する第1のカテゴリー（柱）においては、1、2年生の総合した結果を見ると、6項目中5項目で意識が向上していることが分かる。中でも第1項目「『道成寺』や『アメリカ村』など、日高地方の歴史や伝統文化について、ある程度知っている」、第2項目「日高地方には世界と結びついた企業があることを知っている」、第3項目「日高地方の会社がどのような製品を作り、どのような経営をしているかについて、ある程度知っている」において、他よりも高い変化を示している。このことは、地方創生に関する学修において、生徒の地域への理解と関心が着実に高まっていると判断できる。また、第4項目においては、意識の変容は平均的なものであるが、もとより意識の度合いがどの項目よりも高い数値を示している。第5、6項目に関しても、1、2年生の意識の変容は高くはないが、3年生のデータから、3年間で着実に意識が変容してきていることが分かる。「地方創生」に関するカテゴリーを総合的に見て、1年生と2年生の意識の変容度の比較をすると2年生の変容度が大きくなっていることが分かる。2年次のSG課題研究Ⅱのテーマ別探究学修の成果が表れていると判断できる。

続いて(2) 「グローバルスキル」に関するカテゴリーについて考察してみる。全8項目全てにおいて意識の向上が見られる。中でも第7項目「自ら考えて、何事にも積極的に物事に関わろうとすることができる」、第9項目「グループの中で、自分と他者の意見を大切にしながら、合意を形成することができる」、第10項目「多様な文化や価値観を尊重することができる」において変容度が高くなっている。また、3年生の結果からは、第13項目「自分たちの取組の過程や成果を積極的に発信することができる」の変容も大きくなっている。このことから、SG課題研究や国内外研修におけるグループでの探究活動、成果発表に向けたまとめやポスター作成などの協働学修の種々の取組を通して、意識が高められていると考えられる。加えて、海外姉妹校訪問や受け入れ、海外高校生の研修旅行団の受け入れとそれに伴う交流活動や協働学修を活発に行っていることも異文化尊重や異文化共生のグローバルマインドの養成に寄与していると考えられる。

(3) 「将来・自主的活動・自己」に関するカテゴリーにおいては、各項目において平均的な意識の向上が見られるが、その中で、第17項目「今後の社会では世界的・国際的なものの見方や考え方方が求められると思う」、第18項目「今後の社会では、英語によるコミュニケーション能力がますます必要となってくると思う」、第19項目「語学力をもっと身につけたい」、第20項目「グローバルな社会課題に関心を持っている」において高い数値を示している。このことから、世界に目を向け、関わりを持ちながら、課題解決に取り組んでいこうとする意識の高まりを読み取ることができる。そのために必要な、コミュニケーション力、語学力の必要性の認識も進んでいる。第24項目の回答からは、情報の収集と分析へのICT活用能力も身につけていることが分かる。このことは、探究学修においてコンピュータを用いて情報の収集、データ処理、プレゼンテーション作成などの取組の中でスキルを身につけてきたことを示している。

また、他の数値が上昇している項目には、「海外へ留学する」や「国際的な仕事をする」、「社会貢献活動に参加する」、「自己研鑽活動に取り組む」などの活動が含まれ、自己を広げ、高めていきたいとの意欲の高まりを見て取ることができる。

のことから、生徒それぞれが探究学修において協働学修をする中でスキルや能力を獲得できていると実感し、自らの「学び」への「気づき」が探究学修へのさらなる動機付けとなっていると考えられる。

以上の調査結果の分析から、生徒たちはグローバルスキルを着実に獲得しつつ、グローバルな視点を持って、社会をとらえ、自己の将来を展望する力を身につけてきていることが分かる。SGH指定を受けて4年が経過したが、地域課題の発見とその解決の方策を探っていくというSG課題研究の主題テーマの各種の探究活動を通して、生徒たちはグローバル人材として必要な資質を身につけ、自らとその将来に関わる意識について向上させている。次年度、最終年度を迎えるに当たり、SGH終了後にSGHの研究成果を最大限引き継げるよう、各種事業の内容を検討し・整理して、新たなプログラムを構築していきたい。

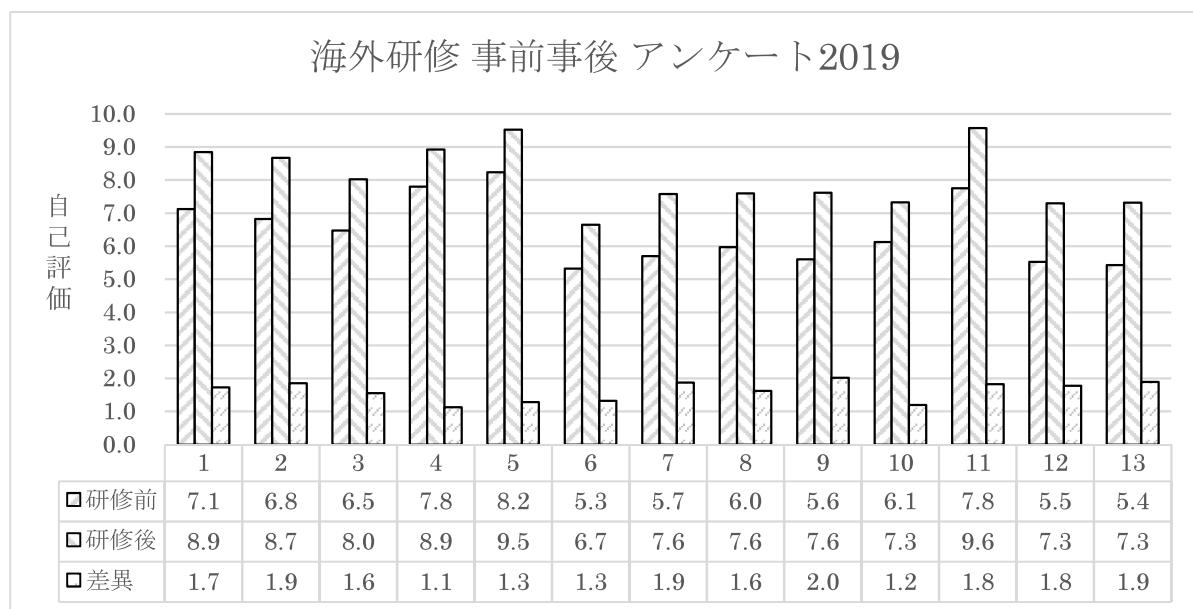
令和元年度 SGHアンケート（3学期）集計

柱	項目	2020.1			2020.1									2019.2			2019.2								
		1,2年生			2年生			1年生			3年生			1,2年生			2年生			1年生					
		1年前	現在	変容	1年前	現在	変容	1年前	現在	変容	3年前	現在	変容	1年前	現在	変容	1年前	現在	変容	1年前	現在	変容			
地方創生	1	4.0	4.5	0.5	4.3	4.8	0.5	3.7	4.2	0.4	4.1	4.9	0.8	3.8	4.2	0.4	4.3	4.7	0.4	3.4	3.7	0.4			
	2	2.5	3.1	0.6	2.9	3.5	0.6	2.2	2.7	0.6	2.8	3.4	0.6	2.8	3.1	0.3	3.1	3.4	0.3	2.5	2.8	0.3			
	3	3.1	3.5	0.4	3.4	4.0	0.6	2.7	2.9	0.2	2.8	3.6	0.7	3.0	3.3	0.2	3.1	3.4	0.3	3.0	3.2	0.2			
	4	5.1	5.4	0.3	5.5	5.7	0.2	4.8	5.0	0.3	4.7	5.2	0.6	5.0	5.2	0.2	5.3	5.5	0.2	4.8	4.9	0.2			
	5	4.0	4.0	0.0	4.3	4.3	0.0	3.6	3.7	0.1	4.2	4.5	0.3	4.0	4.0	0.0	4.1	4.1	0.0	3.8	3.8	0.0			
	6	3.8	4.0	0.2	4.1	4.4	0.3	3.5	3.6	0.1	3.9	4.4	0.4	3.8	3.9	0.1	4.0	4.1	0.1	3.7	3.8	0.1			
	平均	3.8	4.1	0.3	4.1	4.4	0.4	3.4	3.7	0.3	3.8	4.3	0.6	3.7	3.9	0.2	4.0	4.2	0.2	3.5	3.7	0.2			
グローバルスキル	7	4.3	4.8	0.5	4.5	5.1	0.6	4.1	4.5	0.4	3.9	4.8	0.9	4.2	4.5	0.3	4.3	4.6	0.4	4.0	4.3	0.3			
	8	3.9	4.2	0.3	4.1	4.5	0.4	3.7	3.9	0.3	3.7	4.0	0.3	3.7	3.9	0.2	3.8	4.0	0.2	3.6	3.8	0.3			
	9	4.8	5.3	0.5	5.1	5.6	0.5	4.6	5.0	0.4	4.6	5.3	0.7	4.5	4.8	0.4	4.6	5.0	0.4	4.3	4.7	0.4			
	10	5.6	6.1	0.5	5.8	6.4	0.6	5.3	5.7	0.4	5.6	6.3	0.7	5.2	5.6	0.3	5.5	5.8	0.3	4.9	5.3	0.4			
	11	5.6	6.0	0.4	5.8	6.3	0.5	5.3	5.6	0.3	5.4	6.0	0.6	5.1	5.4	0.3	5.4	5.7	0.3	4.9	5.1	0.3			
	12	5.2	5.6	0.4	5.5	6.0	0.5	4.9	5.1	0.2	4.9	5.6	0.7	4.8	5.1	0.3	5.0	5.3	0.3	4.6	4.8	0.2			
	13	4.7	5.0	0.3	5.0	5.5	0.5	4.4	4.5	0.1	4.2	5.0	0.8	4.4	4.6	0.2	4.5	4.8	0.3	4.3	4.4	0.1			
	14	4.6	4.9	0.3	5.0	5.5	0.5	4.1	4.2	0.1	4.1	4.7	0.6	4.2	4.4	0.2	4.5	4.7	0.3	4.0	4.1	0.1			
	平均	4.8	5.2	0.4	5.1	5.6	0.5	4.5	4.8	0.3	4.6	5.2	0.6	4.5	4.8	0.3	4.7	5.0	0.3	4.3	4.6	0.2			
将来／自主的活動／自己	15	3.1	3.5	0.4	3.2	3.6	0.4	3.0	3.3	0.3	3.2	3.8	0.7	3.5	3.8	0.3	3.7	3.9	0.3	3.4	3.8	0.3			
	16	3.1	3.4	0.3	3.2	3.5	0.4	3.1	3.3	0.3	3.2	3.7	0.5	3.5	3.7	0.2	3.6	3.8	0.2	3.4	3.6	0.2			
	17	5.8	6.4	0.6	5.9	6.6	0.7	5.6	6.2	0.6	6.2	7.2	1.0	5.6	6.1	0.5	5.7	6.2	0.4	5.4	5.9	0.5			
	18	6.5	7.1	0.6	6.7	7.3	0.6	6.3	6.8	0.6	6.6	7.4	0.8	6.3	6.6	0.4	6.5	6.8	0.4	6.0	6.4	0.4			
	19	6.7	7.2	0.6	6.9	7.4	0.5	6.3	7.0	0.6	6.3	7.3	1.1	6.4	6.9	0.5	6.6	7.1	0.5	6.2	6.7	0.5			
	20	4.9	5.3	0.5	5.2	5.7	0.5	4.5	5.0	0.5	5.0	5.9	0.9	4.8	5.1	0.3	4.9	5.3	0.4	4.8	4.9	0.2			
	21	4.7	5.0	0.3	5.0	5.3	0.4	4.3	4.5	0.2	4.7	5.2	0.5	4.5	4.7	0.2	4.7	4.9	0.2	4.2	4.5	0.3			
	22	4.8	5.1	0.4	5.1	5.6	0.5	4.4	4.6	0.3	5.0	5.8	0.8	4.7	5.0	0.4	4.9	5.2	0.3	4.5	4.9	0.4			
	23	4.3	4.7	0.4	4.6	5.2	0.5	4.0	4.3	0.2	4.3	5.0	0.7	4.2	4.5	0.3	4.3	4.6	0.3	4.1	4.4	0.3			
	24	3.9	4.2	0.4	4.2	4.5	0.4	3.5	3.8	0.3	3.8	4.4	0.6	3.6	3.9	0.3	3.7	4.0	0.3	3.5	3.8	0.3			
	25	4.7	5.3	0.6	4.9	5.6	0.7	4.4	4.9	0.5	4.6	5.5	0.9	4.5	5.0	0.5	4.7	5.2	0.5	4.4	4.8	0.4			
	平均	4.8	5.2	0.5	5.0	5.5	0.5	4.5	4.9	0.4	4.8	5.6	0.8	4.7	5.0	0.3	4.9	5.2	0.3	4.5	4.9	0.3			
	平均	4.5	4.9	0.4	4.8	5.3	0.5	4.2	4.6	0.3	4.5	5.2	0.7	4.4	4.7	0.3	4.6	4.9	0.3	4.2	4.5	0.3			

2 海外研修 事前事後アンケート

質問項目

グローバルな視点	1	様々な文化圏の人々とコミュニケーションをとれる機会があれば出席したい。
	2	海外に行って、地元の人の文化に触れたい。
	3	異なる文化の人と出会ったとき、自文化と異なっているところも尊重しようと心がけている。
	4	異なる文化を持つ人々とコミュニケーションをとるために英語は不可欠だと考える。
	5	4のために今後さらに英語の力を伸ばしたい。
グループワーク	6	自分の意見に反対する人の前でも、自分の意見を言うことができる。
	7	他の人の意見を聞いたり、議論したりすることで、自分の意見の質を高めることができる。
	8	議論の目的を達成するため、他者の意見を尊重することができる。
	9	グループワークでは、自分の役割だけでなく、チーム全体のことを考えて動くことができる。
	10	意見が衝突したとき、複数の意見を取り入れた新しい意見を考えることができる。
自己の成長	11	現状に満足せず、いろいろなことにチャレンジするのは良いことだと考える。
	12	物事の全体像をつかむために、多面的に見ることができる。
	13	困難に直面したとき、問題について粘り強く考え続けることができる。



前年との比較

		グローバルな視点					グループワークの視点					自己の成長					
		1	2	3	4	5	平均	6	7	8	9	10	平均	11	12	13	平均
2019	研修以前	7.1	6.8	6.5	7.8	8.2	7.3	5.3	5.7	6.0	5.6	6.1	5.7	7.8	5.5	5.4	6.2
	研修以後	8.9	8.7	8.0	8.9	9.5	8.8	6.7	7.6	7.6	7.6	7.3	7.4	9.6	7.3	7.3	8.1
	差異	1.7	1.9	1.6	1.1	1.3	1.5	1.3	1.9	1.6	2.0	1.2	1.6	1.8	1.8	1.9	1.8
2018	研修以前	6.0	6.7	5.6	7.7	7.5	6.7	4.9	5.3	6.0	5.8	5.4	5.5	7.3	4.5	5.0	5.6
	研修以後	8.4	8.6	8.4	9.5	9.8	8.9	6.8	7.2	7.7	7.8	7.0	7.3	9.3	6.6	6.9	7.6
	差異	2.4	1.9	2.8	1.9	2.2	2.2	1.9	1.9	1.8	2.0	1.7	1.8	1.9	2.1	1.9	2.0
差異	研修以前	1.1	0.1	0.9	0.1	0.7	0.6	0.5	0.4	0.0	-0.2	0.8	0.3	0.4	1.0	0.4	0.6
	研修以後	0.4	0.1	-0.3	-0.6	-0.2	-0.1	-0.1	0.4	-0.1	-0.2	0.3	0.0	0.3	0.7	0.4	0.5
	差異	-0.6	-0.1	-1.2	-0.7	-0.9	-0.7	-0.6	0.0	-0.1	0.1	-0.5	-0.2	-0.1	-0.3	0.0	-0.1

結果分析

海外研修旅行の前後でアンケートを実施し、生徒の意識の変化について調査をした。質問項目は、(1)「グローバルな視点に関するもの」、(2)「グループワークに関するもの」、(3)「自己の成長」、合計13項目とした。回答は、1.「あてはまらない」～10.「あてはまる」、の10段階とした。

調査の結果、13項目すべての項目において意識の向上が見られるが、(1)「グローバルな視点」に関する質問に対する結果では、5項目中、第1～3項目において変容度が他の2項目よりも高くなっている。前年度と比較して、今年度は、前者(第1～3項目)の変容度と後者(第4・5項目)の変容度の差が大きくなっているところが特徴としてあげられる。後者は英語に対する必要性の認識や学習意欲に関する回答であるが、海外研修で現地高校生と協働学修をしたり現地の人々とコミュニケーションする中で手段としての英語もさることながら何を伝えるか、何を学ぶかという内容の重要性を認識するに至ったことがその理由として考えられる。また、英語の必要性については、研修以前から認識していることが研修以前のデータが高い数値を示していることから判断できる。

(2)「グループワーク」に関する調査では、前年度は、5項目全てにおいてほぼ同程度の伸長を示していたが、今回の調査では、前年度の変容度よりも低い結果を示している項目が5項目中3項目を占めている。ところが、これらの項目においては、研修以前の意識が、昨年度よりも高く、研修後の意識は、昨年と同様の結果となっている。また、第6項目の「自分の意見に反対する人の前でも、自分の意見を言うことができる」が研修後の結果、9.5と前年度を上回り、高い数値を示していることが特徴として挙げられる。総合的に見て、「グループワーク」に関する意識は、昨年より高まっている。このことは、研修に向けた調査研究やプレゼンテーションの準備、現地での発表や生徒交流をグループで行う中で意見の隔たりを克服し、より質の高いものへと転化できた経験から得られた成果であると考えられる。

(3)「自己の成長」の3項目では、変容度は前年度に比べ低くなっているが、3項目中2項目において、研修後の意識は、昨年度を上回っている。また、平均値においても昨年度以上の結果が出ている。第11項目「現状には満足せず、いろいろなことにチャレンジするのはよいことだとかんがえる」のように、変容度は、他の2項目に比べ低くなっている項目もあるものの全体的に昨年度を上回っているところから、海外研修を通じて他2項目の伸長も合わせて、困難に直面した場合でも粘り強く継続して取り組む姿勢が強められ、困難に対する抵抗力が高められていることがうかがえる。研修に向けた準備として前述の調査研究活動やプレゼンテーションの準備に研修参加者が意欲的に取り組む中で力を身につけたものと考えられる。

以上の結果から、海外研修については、回を重ねるにつれて、より充実したものとなり、そこからの学びが、生徒の成長に結果として表れていると考えられる。今後、海外研修から得られる「深い学び」を継続的な姉妹校との交流活動の中に取り入れ、SGH終了後の探究学修の深化、発展について検討していきたい。

3 「各科目に関するアンケート」 アクティブラーニング集計

授業アンケート 2019.12

	国語	地/公	数学	理科	保体	芸術	英語	家庭	情報	総学	無	平均	
全 体	11	18.9	6.1	21.1	10.3	3.2	1.5	14.2	0.6	1.7	11.9	10.4	9.0
	12	28.8	3.3	6.5	8.0	6.3	2.1	13.5	0.8	3.0	14.2	13.6	8.6
	13	15.9	4.0	2.6	3.7	2.9	1.1	9.9	0.4	1.0	31.8	26.7	7.3
	14	6.3	25.4	3.4	9.6	5.2	2.9	10.6	3.5	1.8	9.9	21.5	7.9
平均		14.2	11.6	13.9	9.4	4.6	3.4	13.6	1.1	1.6	9.2	17.4	8.3
3 年 生	11	14.9	8.6	17.6	14.9	5.7	1.6	18.1	0.5	0.5	8.6	8.9	9.1
	12	15.8	5.6	5.6	13.8	9.1	2.3	27.6	0.6	0.6	5.6	13.5	8.7
	13	14.0	5.6	1.4	7.0	6.3	1.4	16.8	0.0	0.3	18.5	28.7	7.1
	14	6.4	37.6	3.4	12.5	3.4	2.4	8.3	1.5	1.8	7.0	15.6	8.4
平均		11.3	16.5	12.0	12.4	5.3	2.1	15.1	0.6	0.7	5.6	18.5	8.2
2 年 生	11	27.8	5.2	22.6	8.3	1.4	0.0	10.9	0.3	0.3	15.5	7.7	9.2
	12	46.1	2.8	6.0	6.0	2.2	1.3	5.0	1.3	0.0	18.0	11.4	8.9
	13	25.6	3.6	2.9	1.4	1.1	0.7	7.2	0.7	0.4	32.9	23.5	7.7
	14	7.7	17.9	1.9	6.8	7.7	1.5	12.3	7.4	0.3	13.9	22.5	7.7
平均		18.5	11.2	15.0	7.8	3.6	2.4	12.6	2.0	0.2	11.4	15.3	8.5
1 年 生	11	14.2	4.2	23.4	7.4	2.4	3.0	13.4	0.9	4.5	11.9	14.8	8.5
	12	25.3	1.1	8.1	3.2	7.4	2.8	6.0	0.7	9.1	20.4	16.1	8.4
	13	7.5	2.8	3.5	2.4	1.2	1.2	5.1	0.4	2.4	45.7	28.0	7.2
	14	4.7	20.1	5.0	9.4	4.3	5.0	11.4	1.3	3.3	8.7	26.8	7.3
平均		12.7	6.6	14.9	7.7	4.8	5.6	13.0	0.8	4.0	11.0	19.0	8.1

アクティブラーニング質問調査項目

11 課題（問題や目標）の解決や達成に向けて、自ら考える力が必要とされ、それが鍛えられると感じる授業。
12 生徒同士で学び合うことで理解が深まる、意欲が高まる等のメリットを感じられる授業。
13 発言や発表を通して、積極性や行動力、発信することの重要性を学ぶことができる授業。
14 授業で得た知識や背景等がきっかけとなり、実社会への興味や関心が広がる授業。

結果分析

例年2学期末に実施している生徒による「各科目に関するアンケート」調査のアクティブラーニングに関する質問項目について分析を試みた。昨年までの調査では、本校の教育課程上の全ての科目について、同じアンケートを実施する方式をとっていた。そのため、生徒にとっては、受講する科目ごとに同じ質問に10回以上回答する必要があった。そのため、中には、惰性による回答も見られ、結果の信頼性に疑問が生じる可能性があった。そこで、今年度、大幅に見直しを行い、生徒の負担を軽減するものとした。設問を22項目から15項目へと減らし、生徒自身が自身の「学び」を振り返りながら、1回のアンケートにより授業を評価する形式とした。15項目の設問のうちアクティブラーニングに関する設問を4項目設定した。具体的には、11「課題（問題や目標）の解決や達成に向けて、自ら考える力が必要とされ、それが鍛えられると感じる授業」、12「生徒同士で学び合うことで理解が深まる、意欲が高まる等のメリットを感じられる授業」、13「発言や発表を通して、積極性や行動力、発信することの重要性を学ぶことができる授業」、14「授業で得た知識や背景等がきっかけとなり、実社会への興味や関心が広がる授業」の4項目である。アンケートは、従来通り全ての教科科目を対象として、それぞれの項目に当てはまるものを複数回答も可能として回答するものとした。結果は、回答数に占める割合（%）を用いて、分析した。

アンケート結果の全学年のデータを見ると、「総合的な学習〔探究〕の時間」はもとより、国語や英語において、ほぼ4項目ほぼ全てにおいて、高い数値を示している。具体的には、4項目の全科目の平均値8.3のところ、国語、英語がそれぞれ、14.2、13.6という数

値となっている。また、項目・学年別で結果を見ると、第14項目において地歴公民や理科の回答が学年の進行に従って、数値も上昇している。1年生と3年生の比較では、全体平均が7.3から8.4への上昇に対して、地歴公民は20.1が37.6へ、理科では、9.4から12.5へと上昇している。このことは、授業で得た知識が知識としてとどまっているのではなく、社会を見る力として身についていると判断できる。生徒の学びの姿勢も探究的で能動的な学びへと深化していると考えられる。年次進行により数値の上昇や教科科目の広がりが見られることからアクティブラーニングの取組がSGHの取組と共に進められていると言える。つまり、総合的な学習の時間のアクティブラーニングの要素が他教科へも波及しているということで、その要因として、SGH指定直後からSG課題研究を一部の教員に任せることなく、過半数の教員で担当したことにより指導経験を持つ教員が増加し、その教員が自分の専門とする教科の授業実践で、アクティブラーニングの手法を取り入れているためであると結論づけることができる。

4 GTEC for STUDENTS の受験結果

(1) 2019年度の受験者数

① 第1回試験(7月中旬実施)

1年生全員(219名)がBasicコース

2年生全員(236名)がAdvancedコース

② 第2回試験(1月中旬実施)

1年生全員(213名)がBasicコース

2年生全員(232名)がAdvancedコース

(2) 受験結果の分析

① 生徒全体の伸び率

以下の表1より、1年生においては昨年と同様に、スピーキングのスコアが高い伸びを示しているが、リスニング、ライティングにおいては、スコアを下げる結果となっている。2年生は、昨年度スピーキングテストを希望者のみの実施としていたため比較するデータを持ち合わせていないが、今年度の結果のみを見ると1年生と同様にスピーキングの伸びが著しい。また、ライティングのスコアは、低下しているが、昨年度に比べて低下の度合いは低くなっている。両学年でスピーキングのスコアが伸びている要因として、コミュニケーション活動を取り入れた授業実践とコミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱにおいて学期毎に実施しているスピーキングの実技テストがあげられる。

表1 第1回試験と第2回試験のスコア比較

2019年度		Total	Reading	Listening	Writing	Speaking	2018年度	
1 学 年	第1回	464.9	142.0	152.0	170.9	170.9	1	387.0
	第2回	506.6	143.2	146.7	216.6	216.6	第1回	138.0
	差異	41.7	1.3	-5.3	45.8	45.8	第2回	145.5
2 学 年	第1回	464.8	138.0	145.5	181.3	173.9	差異	194.8
	第2回	517.2	147.3	147.6	222.3	215.0	第1回	181.3
	差異	52.4	9.2	2.1	41.1	41.1	第2回	222.3

②海外研修を経験した生徒の伸び率

2019年度に海外研修をした生徒と参加しなかった生徒のスコアを以下の表2に示している。2年生においては、4技能すべての伸びが非参加者の結果を遥かに上回っている。一方、1年生においては、リスニングを除いて参加者の伸びが非参加者の伸びを下回る結果となっている。

2年生に関しては、研修に際して、協働学修に向けた調査、まとめ、プレゼンテーションの準備などでリーダー的な役割を負い、英語を使いながら主体的に活動することでスキルの伸びが生まれてきていると推察できる。一方、1年生については、探究学修そのものにも不慣れなことが多く、研修の準備段階においても日本語主体の活動が多かったことも要因として考えられる。今後、研修に向けた事前研修や準備において、より英語に接する場面を創出していく必要を感じる。

表2 研修参加者と非参加者のスコア比較

2019年度

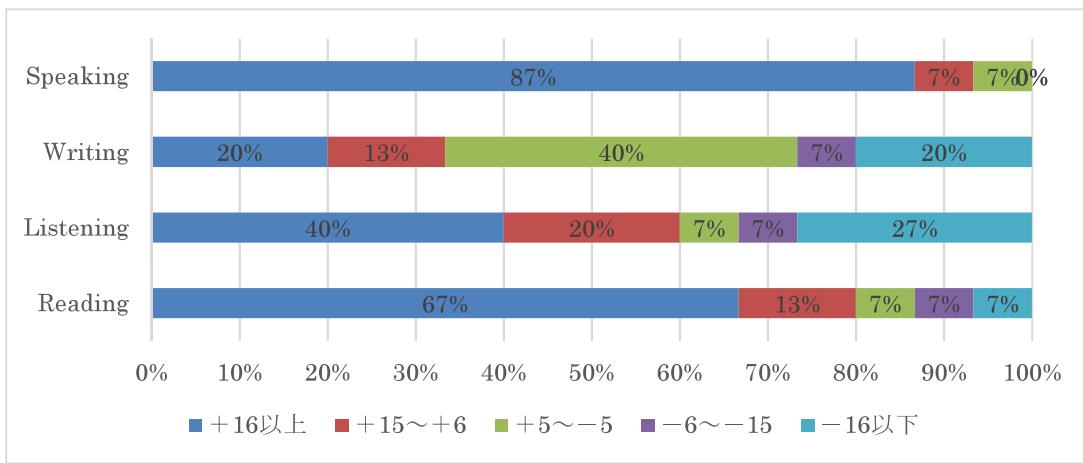
2年生		Total	Reading	Listening	Writing	Speaking
第1回	全体平均	721.9	164.9	171.2	211.9	173.9
	研修参加者	725.7	156.6	176.2	217.5	175.3
	非参加者	721.7	165.5	170.9	211.5	173.8
第2回	全体平均	767.8	171.0	172.0	209.8	215.0
	研修参加者	795.3	177.2	177.9	219.7	220.5
	非参加者	765.9	170.6	171.6	209.1	214.6
変化	全体平均	45.9	6.1	0.8	-2.2	41.1
	研修参加者	69.7	20.6	1.7	2.2	45.2
	非参加者	44.2	5.1	0.8	-2.5	40.8

1年生		Total	Reading	Listening	Writing	Speaking
第1回	全体平均	672.1	142.0	152.0	207.3	170.9
	研修参加者	878.2	206.8	206.0	236.6	228.8
	非参加者	666.6	140.5	150.1	206.6	169.5
第2回	全体平均	694.7	143.2	146.7	188.1	216.6
	研修参加者	882.6	197.6	213.6	217.8	253.6
	非参加者	690.3	142.0	145.2	187.4	215.8
変化	全体平均	22.6	1.3	-5.3	-19.1	45.8
	研修参加者	4.4	-9.2	7.6	-18.8	24.8
	非参加者	23.7	1.5	-4.9	-19.1	46.3

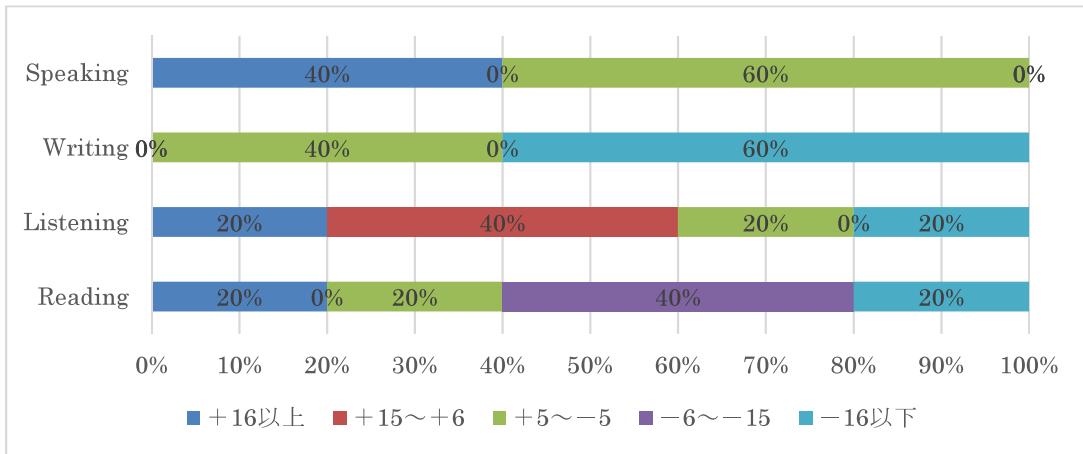
以下の図1では、研修参加者のスキル別のスコア推移を示している。2年生参加者の総合スコアの伸びが非参加者を大きく上回っているが、スキル別に見てみると、スピーキング、リスニング、リーディングの順にスコアを伸ばしている。一方、1学年参加者においては、スピーキング、リスニングの伸びが最も大きく、次いでリーディングの順となっている。これらのスキルは、日常の英語の授業での積み重ねと、準備段階を含めた海外研修での英語使用の経験を通して強化されたものである。いずれの学年にも共通するライティング力向上の課題についても、今後、英語の授業だけではなく、各種研修においても意識的に「英語で書く」機会を数多く設ける取組が必要である。

図1 研修参加者の GTEC スキル別スコアの推移

2年生



1年生



IV 交流活動

1 姉妹校交流

(1) 中国（西安中学）

①交流の経緯

2006年1月に本校が初めて外国の学校と姉妹校提携を結んだのが中国陝西省西安中学である。きっかけは、本校生徒の中国留学であった。中国がそれまでの短期留学に加えて、初めて長期留学生を受け入れた3名の中に西安中学に派遣された本校生徒1名がいた。その生徒の勤勉さを通して、本校が姉妹校として選ばれたという経緯がある。

調印後は年に一度の相互訪問を続けている。2019年の今年度は、姉妹校交流が始まって13年目の年となり、本校が訪問を行う年である。

②交流日程と訪問団構成

- a 2019年（令和元年）9月9日（月）～9月13日（金）の5日間
- b 附属中学（女子3名）、高校生（男子1名、女子6名） 引率2名

c 日程概要

日次	月日	時間	場所	内容
1日目	9/9 (月)	14:00 17:15 19:00	移動	訪問団、関西国際空港出発(3U8802便) 訪問団、西安空港到着 ホストファミリーと合流し、各家庭に帰宅
2日目	9/10 (火)	8:15 9:00 11:50 14:30 16:10 17:50	校内	ホスト生徒と登校 歓迎セレモニー 校内資料館散策 昼食（西安中学食堂） 授業への参加（数学、英語） 社会団体の課外活動見学 ホスト生徒と帰宅
3日目	9/11 (水)	9:00 12:10 13:30 17:00	校外	歴史博物館見学 昼食 兵馬俑見学 西安に戻り、ホスト生徒と帰宅
4日目	9/12 (木)	7:30 12:15 14:30 16:30 17:50	校内	ホスト生徒と登校 授業への参加 昼食及び生徒交流 授業への参加 環境保護のテーマに関する報告会 ホスト生徒と帰宅
5日目	9/13 (金)	6:30 7:00 8:40 13:00	移動	集合、出発 西安空港到着 西安空港発(3U8801便) 関西国際空港到着、解散

③交流内容及び成果

生徒たちは出発前には不安を抱えていたものの、訪問後の感想としては、現地での活動は大変有意義で、特に交流することが楽しかったという感想が多かった。今回は西安中学でプレゼンテーションを行う機会があったが、日本語が通じない状況で600人程度の生徒の前で行い、その内容が相手に通じたということに達成感があり、大きな自信に繋がったようであった。多くのプログラムの中で、生徒たちはそれぞれが思い出に残る交流ができ、教員同士でも交流する機会を設けて頂き、互いに大変良好な関係を築くことができた。来年度以降も姉妹校として、良い関係を築いていきたいと感じた。

④生徒感想（一部抜粋）

- ・日本を出たことで、自分の慣れ親しんだコミュニティとは丸きり違うコミュニティや文化とふれ合うことで、驚くほど自らの世界が大きく開けた。また、自分の他国に対する見方や価値観も大きく変化した。中国の良いところ、利便化が進んでいるとか、

日本の良いところ、水道水が飲めるとか、中国の良いところだけでなく、日本の良いところにも気づくことができた。自分の意識や気持ちが引き締まったように感じ、自ら行動を起こすことで世界は無限大に広がるのだと感じた。 (高校2年生)

・学校内交流、ホームステイ先などで世界共通語である英語で5日間のほとんど会話をしたけど、自分の英語力の低さをすごく実感した。日本の生徒とは比べものにならないくらいに英語の発音がネイティブに近かった。どうしてこんなにも差があるのかなと思ったが、授業を受けてみて納得の嵐だった。まず朝のホームルーム的な後に、30個ほどの英単語を何度も発音して先生の後にリピートする。その後に単語テストを行う。テストの後は次のテストの範囲の発音等をまた行う。また他の授業内でも英語の授業でなければ私たちは日本語で授業を受けるが、西安の学校では英語でほとんど説明する教科があつたり、オールイングリッシュでなくても中国語と英語が混じりながら説明している教科もあった。それでも何の問題もなく授業を理解している西安の生徒さんたちを見てすごく感動した。 (高校2年生)

・2日間一緒に授業を受けて、中国の生徒の方は全員が授業に積極的にやっていることが伝わってきました。日頃の日本の授業を想像すると、授業でもみんなが発言をしているとは言えません。でも中国ではみんなが先生の質問に答えていて、初めは少し驚きました。そしてすごいなあと心の底から素直に思うことができました。ゴミの分別発表についての質疑応答でも、次々に質問が来てすごいなと思いました。普段学校生活をしていて、そのような場面を見ることは少ないとと思うので、日本人の性格が関係するかもしれないが中国の学生のように出来たらいいなと思いました。だから私たちには中国の学生を見習わなければならないと思いました。そうすることによって、もっと色々なことを得ることが出来るのではないかと思ったので、中国の学生の積極性見習わなければいけないと思った。 (中学2年生)

⑤記録写真

〈授業内の集合写真〉



〈生徒交流〉



〈環境をテーマにした報告会①〉



〈環境をテーマにした報告会②〉



〈校舎内の集合写真〉



〈校内資料館の見学〉



(2) デンマーク（フレデリクスハウ恩高校）

① フレデリクスハウ恩高校との交流経緯

1957年2月10日、デンマークのエレンマースク号が日ノ岬沖で炎上している日本漁船に遭遇、船員を助けようと海に飛び込んだヨハネス・クヌッセン機関長は帰らぬ人となった。その後、事故現場を臨む日の岬パーク内に、クヌッセン機関長顕彰碑・胸像が建てられ、毎年2月、クヌッセン遺徳顕彰会による慰靈献花式が行われている。

この事件から50周年にあたる2007年8月、フレデリクスハウ恩市の博物館に開設されたクヌッセン機関長記念コーナーの除幕式に、美浜町や日高町から約30名の関係者がデンマークを訪問。その後「今後の交流は是非地元の日高高校生で」というお話をいただき、在デンマーク日本大使館の紹介を経て、フレデリクスハウ恩高校との交流が始まった。

2010年11月、本校から訪問団がフレデリクスハウ恩高校を訪問し、翌年10月には姉妹校提携調印式が行われた。その後もお互いに隔年で訪問団を派遣し、交流を続けている。

② 交流日程と訪問団構成

- a 2019年10月15日（火）～20日（日）の6日間
- b 高校生8名（男子3名 女子5名）・引率2名

c 日程概要

日次	月日	時間	場所	内容
1日目	10/15(火)	8時45分 12時30分 15時20分	移動 校内	訪問団、関西国際空港に到着 訪問団、日高高校に到着 ホスト生徒と昼食 体育館にて歓迎AS ホストファミリーの迎えで帰宅
2日目	10/16(水)	1限目 2~4限目 5,6限目 放課後	校内 校外 校内	校内案内 授業 道成寺へ校外学習(英語での絵解説法を鑑賞) クラブ体験(茶道部)
3日目	10/17(木)	午前 午後 放課後	校内 校内	授業(高校、附属中) 協働学習「教育」 クラブ体験(箏曲部)
4日目	10/18(金)	午前 午後 放課後	校内	授業(高校、附属中) 協働学習「防災」 生徒交流会 クラブ体験(弓道部)
5日目	10/19(土)	終日		ホストファミリーと行動
6日目	10/20(日)	午前		記念撮影、ホストファミリーとお別れ バスでホテルへ

③ 交流内容及び成果

フレデリクスハウゼン高校の生徒 8 名は本校生徒宅にホームステイをしながら、日本の生活を体験した。また、校外学習では地域の歴史を学び、協働学習ではテーマについてディスカッションをして活発な意見交流が行われた。

協働学習では「教育」「防災」をテーマに、各国の教育制度や防災に関する取り組みについてお互いにプレゼンをした。本校 2 年に在学中の留学生もインドネシアの教育について流ちょうに紹介した。自然と質問や意見が出るなど、活発なディスカッションが行われた。

今回ホストファミリーとしてデンマーク生徒を受け入れた本校生徒のうち、5 名は昨年度デンマークを訪問しており、来日前から情報交換等のやりとりをしてきた。今回の日程は、1 日ホストファミリーと自由に行動する日が含まれ、着物を着たり祭りを見に行ったりするなど、思い思いの休日を過ごせたようである。ホスト生徒やその家族からは、「日本の良さや文化、遺産等改めて自分も勉強する機会になった。中学生の弟も英語に興味を持ったようだ。」「口に合わない料理もあったが、何にでもまず挑戦し、日本のスタイルだからとお箸を練習していた姿が印象的でした。」「デンマークにも興味が出て、来年の訪問団

に応募しようと思うので英語の勉強を頑張りたい。」等の意見が寄せられ、互いに有意義な時間になったようである。

ホスト以外の生徒も、授業でデンマークの生徒を受け入れる中で、デンマークや英語に興味を持った様子であった。生徒たちは両国の国際交流の若い担い手として校内外からも期待されており、今後もこの姉妹校関係をグローバル教育に生かしていきたい。



2 海外研修受入

姉妹校訪問団以外で、今年度海外訪問団受入機会は計3回であった。概要は以下の通り。

日 時	2019年5月27日（月）10：00～17：20
訪問団概要	(国・地域) 台湾 (学校) 新北市立新北高級工業職業学校 (構成) 生徒37名 引率教員 4名
内 容	10：00 到着 10：40 歓迎集会（体育館） 11：40 校内案内・昼食交流（各引率生徒） 午後 授業交流（2学年英読II、英表II、古典、物理、地学） 放課後 部活動交流（箏曲部、弓道部、茶道部、英語部） 17：20 見送り

日 時	2019年11月14日（木）11：30～15：30
訪問団概要	(国・地域) 台湾 (学校) 華東台商子女学校 (構成) 生徒128名 引率15名
内 容	11：30 到着 11：40 歓迎集会（体育館） 12：30 昼食交流（1・2学年各HR） 13：10 HR交流（1・2学年各HR） 14：10 授業交流 1学年C 英I、古典、情報、音楽、美術 2学年古典、数B、英表II 15：30 見送り

日 時	2019年11月25日（月）13：50～16：00
訪問団概要	(国・地域) カナダ (団体) カナダ県人会 (構成) カナダ県人会メンバー 46名
内 容	13：50 到着 14：10 第一部・全体会 [歓迎集会・記念講演]（体育館） 15：10 第二部・交流会（翔栄館） 16：00 見送り

受入機会は昨年度と同様であったが、1回毎の受入人数の大幅な増加があった。また、カナダ県人会の受入では二部構成で生徒交流の場をつくった。これまで一部の生徒やクラスで交流をもつことが主であったが、今年度は受入人数の関係上1、2学年の全クラスで交流をもつことができた。このことは、生徒たちからもとても良い機会になったという声が聞こえた。外部からの受入要請と本校の行事計画等が上手く噛み合うことは稀であるが、今後ともできるだけ実のある交流機会を提案していきたい。

○交流の様子

(1) 歓迎集会



(2) 授業交流



(3) 部活動交流



3 アジア・オセアニア高校生フォーラム (7/27 ~ 8/1 於：和歌山市)

現在、県教育委員会が国内外から高校生を招聘して開催しているこのフォーラムは、日高高校が創立 100 周年記念事業として 2014 年に始めたものである。現在「観光・文化」「教育」「津波・防災」「環境」「食糧問題」の 5 つの分科会があり、発表者らが各テーマに沿った提案や意見を英語でプレゼンテーションする。今年度は 3 年生 1 名が分科会発表者、2 年生 1 名が全体会司会者として参加した。分科会では” Further involving school libraries in school education ” と題し、学校教育における図書館の重要性と役割の見直しを学生たちに提案した。全体会司会者は、分科会の内容をまとめて英語で紹介したり、ディスカッションの司会を務めたりとスムーズな進行につとめた。5 日間の様々なプログラムを通して海外参加者と交流し、多様な考え方や価値観に触れる機会となった。他の参加者のプレゼンテーション技術やジェスチャーなどの表現方法が刺激となり、さらなる学習に向かうモチベーションにつながった。

4 「世界津波の日」 2019 高校生サミット in 北海道

(1) 全体会

1. 開催概要

開催日	2019 年（令和元年）9 月 10 日（火）～11 日（水）
会 場	北海道立総合体育センター「北海きたえーる」
主 催	北海道、北海道教育委員会
共 催	国連国際防災戦略事務局（UNISDR）駐日事務所
後 援	国土強靭化推進本部、内閣府政策統括官（防災担当）、外務省、文部科学省、国土交通省、気象庁、経済協力開発機構（OECD）、東アジア・アセアン経済研究センター（ERIA）
参加者	506 名 海外参加者 257 名（43 か国） 国内参加者 249 名（68 校）

2. 「世界津波の日」 2019 高校生サミット in 北海道 日高高校の取組

① 事前学習

校内の選考を経て、日高高校より 2 年生 2 名が分科会でのグループ内発表とグループ討議に参加することになった。

8 月には、和歌山県教育委員会主催で県内の全参加高校生を対象に事前学習会が開催された。指導主事が講師を担い、英語でのプレゼンテーションの方法についての講義がなされた。引き続き、参加各校がサミットに向けて準備しているプレゼンテーション発表し、その後質疑応答がなされた。本番での発表に向けて、さらに工夫が必要な点、不十分な部分の確認ができた。

さらに JICA 関西から講師を迎えて「 JICA 事業と防災分野での協力について」とのタイトルで講義があり、 JICA が行っている海外支援事業の具体的な内容や防災分野での取組と貢献について、詳しく学習することができた。加えて、元青年海外協力隊で活動した隊員の、トンガ王国で防災教育に携わった体験やそこで学んだことについて講演を聞いた。

この事前研修を通して、サミットに参加して自分たちの研究成果を伝えたいという思い

をより一層、強くしただけではなく、海外から参加する文化や言語の異なる高校生との交流を通して、視野を広げていきたいとの刺激を受けた。

②「世界津波の日」2019高校生サミット in 北海道 参加 《第1日目 9月10日（火）》

9:00～12:00 分科会

13:00～13:45 分科会

14:00～14:45 開会式

15:20～17:00 分科会

第1日目の分科会は、国内5校、海外4校の合計9グループ31名の高校生が「意識を高める」のテーマについてのプレゼンテーション発表とディスカッションを行った。本校の参加者は、防災カレンダーの普及への取組と多言語版防災カレンダーの作成についての取組について発表を行った。この取組については、前年度の2年生が取り組んだ「防災カレンダーの作成」を引き継ぎ発展させていく取組として、継続してきたものである。国内外の高校生との意見交換・交流から、防災に対してそれぞれが持っている知識や災害の捉え方の違い、また国による防災対策の違いなど、それまで気づかなかったことを知ることが出来、視野を広げることができた。また、自分たち自身の防災意識を高めることもできる収穫の多い発表・ディスカッションとなった。分科会は、防災意識の向上には、「教育による幼少期からの意識向上への働きかけ」や「地域、政府、その他各組織・団体の協働」が重要であるとの結論に至った。

《第2日目 9月11日（水）》

8:15～8:45 記念植樹・記念碑除幕式

9:30～9:50 記念撮影

11:15～13:20 総会・閉会式

第2日目は、北海道知事公館で行われた記念植樹・記念碑除幕式に参加した。本校生徒は、海外参加者の介添え役を務めた。その後、メイン会場の北海道立総合体育センターへ戻り、全体会となる総会・閉会式に参加した。

各分科会からのまとめの報告や大会宣言などを聞きながら、本校からの参加生徒は、このサミットへの参加に向けた取組を通して得た自分の「学び」を振り返り、新たな「学び」に向けた視点と広い視野を得ることができた。



V 資料

運営指導委員会の記録

第1回

- 1 日時 2019年（令和元年）8月27日（火）14:30～16:30
- 2 場所 日高高等学校 会議室
- 3 次第
 - (1) 開会
 - (2) 和歌山県教育委員会挨拶
 - (3) 学校長挨拶
 - (4) 運営指導委員及び日高高等学校担当者紹介
 - (5) 委員長・副委員長選任
 - (6) 委員長・副委員長挨拶
 - (7) 事業説明
 - (8) 公開授業
 - (9) 協議
- 4 協議記録(主な意見や質問)
 - ・ SGH 指定終了後の事業について
 - 新規事業への応募はどうするのか。
 - 現在行っている研修に係る補助金の財源をどこに求めるのか。
 - ・ インドネシアからの留学生の活用について
 - インドネシア研修の事前研修として、インドネシアの国や言葉、文化などについて、留学生から学ぶ機会を設けてはどうか。
 - ・ 探究学修テーマ「移民難民学修」について
 - 「移民」は学校教育に取り入れられていないので、探究学修のテーマとして取り上げられていることは、喜ばしく、協力は惜しまない。

第2回

- 1 日時 2020年（令和2年）3月18日（水） 10:00～12:00
- 2 場所 日高高等学校 会議室
- 3 次第
 - (1) 開会挨拶
 - (2) 事業説明
 - (3) 質疑応答・協議
 - (4) 閉会挨拶

平成31年度実施教育課程表

全日制課程 普通科

		普通科										履修単位数	和歌山県立日高高等学校	
学科	標準単位数	2年					3年					教科別履修単位数	備考	
		1年		I類		II類		I類		II類			選択上の留意点	
学年	類型	共通	文系	理系	文系	理系	文系	理系	文系	理系	文系	理系		
国語	国語総合	4	5									5	14,15	※3年文系地理歴史 △の中から1科目選択
	現代文B	4		2	2	2	2	2	2	2	2	4		
	古典B	4		3	3	3	3	3	2	3	2	5,6		
	世界史A	2		2	2	2	2					2		
	日本史A	2		2	2							0,2		
	地理	2							2	2		0,2		
	歴史	2						△4		△4		0,4		
	世界史探究							△4		△4		0,4		
	日本史探究							△4		△4		0,4		
	公民	2	2					2	2	2	2	2		
数学	数学I	3	3									3	14~18	※3年I類文系数学・家庭 ☆の中から1科目選択 ※3年理系数学 ■または◆の組合せで 7単位をまとめて選択
	数学II	4		4	4	4	4					4		
	数学III	5						■5		■5		0,5		
	数学A	2	2									2		
	数学B	2		2	2	2	2					2		
	数学理解I							3	[◆4]	3	[◆4]	3,4		
	数学理解II							☆2	[◆3]	2	[◆3]	0,2,3		
	数学探究							■2		■2		0,2		
	物理基礎	2	2									2		
	物理	4		O2		O2		◎4		◎4		0,6		
理科	化学基礎	2		O2	2	O2	2					0,2	8~17	※2年理科 ○の中から1科目選択 ※3年理系理科 ◎の中から1科目選択 ただし、2年次からの継続 ※3年文系 ●の中から1科目選択 ただし、理科は2年次の選択 を継続
	化学	4			2		2		3		3	0,5		
	生物基礎	2	2									2		
	生物	4		O2		O2		◎4		◎4		0,4,6		
	地学基礎	2		O2		O2						0,2		
	化学探究							●2		●2		0,2		
	生物探究							2		2		2		
	地学探究							●2		●2		0,2		
	体育	7~8	3	2	2	2	2	2	2	2	2	7	9,11	※芸術 *の中から1科目選択 ただし、1年次からの継続
	保健	2	1	1	1	1	1					2		
科目	スポーツ探究							*2				0,2		
	音楽I	2	*2									0,2	2~8	※芸術 *の中から1科目選択 ただし、1年次からの継続
	音楽II	2			*2							0,2		
	音楽III	2						*2				0,2		
	美術I	2	*2									0,2		
	美術II	2			*2							0,2		
	美術III	2						*2				0,2		
	書道I	2	*2									0,2		
	書道II	2			*2							0,2		
	書道III	2						*2				0,2		
外國語	生活の書							●2				0,2	18,22	世界史探究、日本史探究、公民探究、数学理解I、数学理解II、数学探究、化学探究、生物探究、地学探究、スポーツ探究、生活の書、英文読解I、英文読解II、生活文化は学校設定科目
	コミュニケーション英語I	3	4									4		
	コミュニケーション英語II	4		4	4	4	4					4		
	コミュニケーション英語III	4						4	4	4	4	4		
	英語表現I	2	2									2		
	英語表現II	4		2	2	2	2	2	2	2	2	4		
	英文読解I						2					0,2		
	英文読解II											0,2		
	家庭基礎	2		2	2	2	2					2	2,4	世界史探究、日本史探究、公民探究、数学理解I、数学理解II、数学探究、化学探究、生物探究、地学探究、スポーツ探究、生活の書、英文読解I、英文読解II、生活文化は学校設定科目
	生活文化							☆2				0,2		
情報	情報の科学	2	2									2	2	
	普通科目計		30	30	30	30	30	30	30	30	30	90		
合 計		30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	90		
ホームルーム活動		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3		
総合的な学習の時間		0	2	2	2	2	1	1	1	1	1	4		
総合的な探究の時間		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4		
総 合 計		31	33	33	33	33	32	32	32	32	32	97		

平成31年度実施教育課程表

全日制課程 総合科学科 和歌山県立日高高等学校

学科			標準単位数	総合科学科			履修単位数	選択上の留意点	
学年		標準単位数		1年	2年	3年			
類型									
教科	国語	国語総合	4	4			4	※2年 ★の中から1科目選択 ※3年 「■4または■2+■2から2科目及び▲2」 または 「■4または■2+■2から1科目及び△3」 を選択	
		現代文B	4		2	2	4		
		古典B	4		3	3	6		
	地理歴史	地理A	2		★2		0,2		
		世界史A	2		2		2		
		日本史A	2		★2		0,2		
		地理探究			■4		0,4		
		世界史探究			■4		0,4		
		日本史探究			■4		0,4		
	公民	現代社会	2	2			2		
		倫理	2			■2	0,2		
		政治・経済	2		■2		0,2		
	体育保健	体育	7~8	3	2	2	7	※1年 ○の中から1科目選択	
		保健	2	1	1		2		
	芸術	音楽I	2	○2			0,2		
		美術I	2	○2			0,2		
		書道I	2	○2			0,2		
	外国語	コミュニケーション英語I	3	3			3		
		コミュニケーション英語II	4		4		4		
		コミュニケーション英語III	4			4	4		
		英語表現I	2	2			2		
		英語表現II	4		2	2	4		
	家庭		家庭基礎	2	2		2		
科目	普通科目計			19	18	17,21	54,58		
	専門教科(理数)	理数数学I	4~8	5			5		
		理数数学II	6~10		6		6		
		数学探究			□3	0,3	※3年 □3+□2または□5を選択 地理探究、世界史探究、日本史探究、数学探究、ナチュラルサイエンスI、ナチュラルサイエンスII、ナチュラルサイエンスIII、ナチュラルサイエンスIV、ナチュラルサイエンスV、ナチュラルサイエンスVI、理数物理探究、理数化学探究、理数生物探究、情報数学は学校設定科目		
		理数数学特論	4~10		□5	0,5			
		ナチュラルサイエンスI		6					
		ナチュラルサイエンスII			2				
		ナチュラルサイエンスIII			2				
		ナチュラルサイエンスIV			2				
		ナチュラルサイエンスV			▲2	0,2			
		ナチュラルサイエンスVI			□2	0,2			
		理数物理探究			▲3	0,3			
		理数化学探究			△3	0,3			
		理数生物探究			▲3	0,3			
		課題研究	1~2		2		2		
		情報数学				2	2		
	専門科目計			11	14	9,13	34,38		
合計			30	32	30	92			
ホームルーム活動			1	1	1	3	課題研究で総合的な学習の時間2単位を代替		
総合的な学習の時間			0	0	1	2			
総合的な探究の時間			1	0	0	2			
総合計			31	33	32	97			

生徒プレゼンテーション資料 インドネシア研修 現地プレゼンPPT（一部抜粋）

- (1)
- (2)
Many elderly
- (3)
② Can the elderly move by themselves?
YES NO
- (4)
④ Do you want to help people such as the elderly and other vulnerable when a disaster happened?
YES NO
- (5)
- (6)
- (7)
- (8)
- (9)
For That
- (10)
- Raise Disaster Prevention Awareness in High School Students

生徒プレゼンテーション資料 ベトナム研修 現地プレゼン PPT

(1)

For a sustainable society...

HIDAKA HIGH SCHOOL, JAPAN

(2)

To Solve the Plastic Waste Problem

Hidaka's efforts is...

**PAYING more attention to plastic problem,
TAKING actions for the problem.**



(3)

1. World's plastic waste problem

< at present >
150 million tons of plastic waste in the ocean

<for years>
8 million tons into the sea
↓

<in 2050>
the total amount of plastic waste = the total amount of fish



(4)

2. Japan's plastic waste problem

The amount of plastic on the coast of Japan

- 30,000-50,000 tons
- 60% to 90%
- **plastic**



(5)

3. Advantages and disadvantages of plastic products

⟨Advantages⟩

- Light
- Difficult to convey heat
- Resistant to water

⟨Disadvantages⟩

- Flammable
- Prone to deformation
- Low hardness and easy to scratch



(6)

In our community --Garbage disposal site



(7)

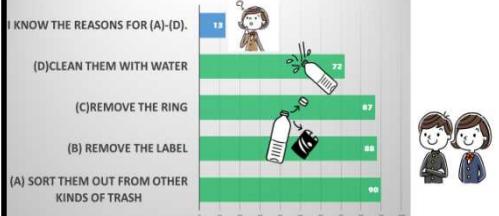
At a company -- Taiyo Chemicals



(8)

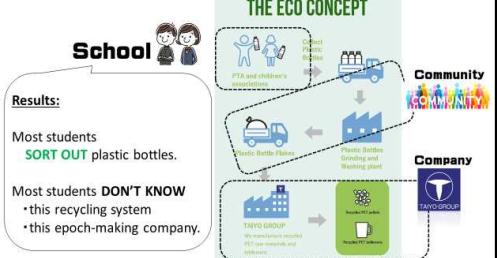
Reality-2

Q2. When you throw away plastic bottles at school, you



(9)

4. Our efforts to realize a sustainable society



(10)

5. What to do for a sustainable society

At our school

- ★ Spread the concept to the whole school
- ★ Share the concept with all students
- ★ Make the PERFECT recycling system

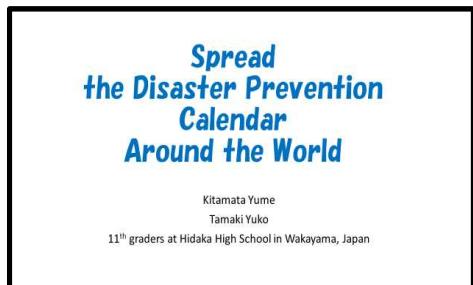


Hidaka's effort is

**PAYING more attention to plastic problem,
TAKING actions for the problem.**

生徒プレゼンテーション資料 「世界津波の日」2019 高校生サミット in 北海道

(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



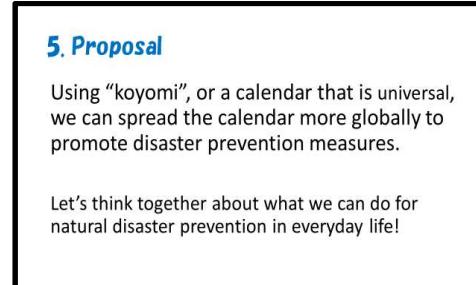
(6)



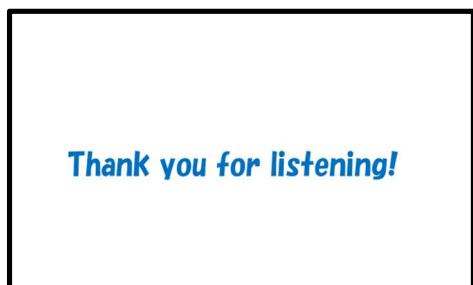
(7)



(8)



(9)



生徒ポスター資料 SWG 全国高校生フォーラム 2019

Let's Spread the Disaster Prevention Calendar Around the World

2808: Wakayama Prefectural Hidaka High School
Kitamata Yume Tamaki Yuko

1. Introduction **Background**

- Many typhoons have hit Wakayama.
- We expect major catastrophes will occur in the near future. (ex. Nankai trough Earthquake)
- We are affected by the 'Normalcy bias'.

① Pointed out in the paper
② Pointed out in the news
③ Questionnaire results at our school

When you encountered a kind of natural disaster, did you ever think, "I am OK. It doesn't matter to me," with no reason?

2. Methods and Results **Challenge**

→ How can we remove the normalcy bias???

Idea 1 To listen to lectures about disaster prevention	Finding We forget what we have learned as the days pass by. Long-term learning will be more effective than short-term learning.
Idea 2 To see information in everyday life A calendar is preferable <ul style="list-style-type: none"> Used in ordinary life Used in every family An everyday item in every family 	Action We combined a calendar and disaster prevention. We produced an original 'disaster prevention calendar'. <ul style="list-style-type: none"> → We made presentations and proposals at our school, the city government, and the prefectural government.
Idea 3 To produce a 'disaster prevention calendar' in multilingual version. (MIC say that it is necessary to deal with people from abroad in the event of a disaster.) In this way, people from abroad can get important information.	Action We will make a multilingual calendar. Then foreign residents feel closer to a calendar with information in their native language. We will put information about each country's disasters on the calendar. So they will see the calendar more often. Then, the calendar will provide an opportunity for them to talk about disaster in everyday life.

3. Conclusion

(1) It is effective to combine a calendar and disaster prevention.
(2) Producing and spreading the multilingual calendar bring information about disaster prevention to foreign people in Japan.

We intend to remove the normalcy bias by producing the calendar.
We need cooperation from you all at this forum to realize the second conclusion.

Let's make the Disaster Prevention Calendar together !

4. References

- 高橋征仁「緊急避難行動における心の脆弱性－東日本大震災における津波避難行動の分析－」
日本社会分析学会『社会分析』43号, 2016, 63~82頁
- ニュースevery 2014年3月10日放送回より
- 毎日新聞2017年10月23日朝刊「台風21号各地で猛威 和歌山で土砂崩れ」
- 過去の教訓を未来につなぐ災害カレンダー
- Portal:災害/今日は何の日

生徒ポスター資料 全国海洋教育サミット

For a sustainable society ~海洋プラスチックゴミ削減への私たちの取組~

和歌山県立日高高等学校

1. 現状：プラスチックを取り巻く動き

世界の動き

- ◆各国の取組
 - ・使い捨てプラスチック → 使用禁止、課税等
 - ◆グローバル企業
 - ・スターバックス、マクドナルド、コカコーラ等

私たち高校生が目指すこと

- ・問題の深刻さを高校生全体が正しく知る
- ・問題解決に向けた行動をとっていく

2. 確認：プラスチックはワルモノか？

プラスチック：主に石油から生まれた合成樹脂

- メソット
- ・軽くて丈夫
- ・多彩な色を表現できる
- ・熱を伝えにくい
- ・電気に強い
- ・成形しやすい
- ・酸素や水分を通さない



+ 海洋汚染



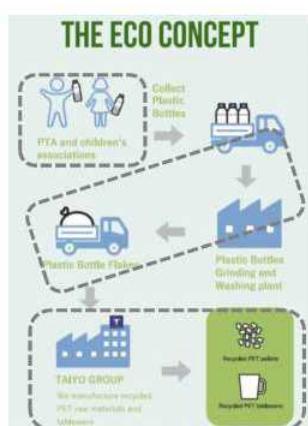
「資源」としての有用性

「海洋ゴミ」

3. 取組：

★ 「ゴミ」にしない

★ 「再製品化」活動に参加する → 「学校、地域、地元企業」の連携～ペットボトルリサイクル～

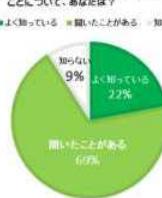


(1) クリップ

(2) 着目：日高高校生の意識

Q1. 世界でプラスチックゴミが問題になっていることについて、あなたは？

■よく知らない ■聞いたことがある ■知らない

分析：◆問題意識は決して低くないが、十分理解しているとは言えない。
◆行動できているが、その根柢がない。(周りに合わせているだけ)

仮説：行動に動機が加わると最強になる！

(3) アクション：①POPを作成し、高校生に広める。
②取組をベトナムの高校生とも共有する。**4. 結論：「3R, 4R, 5R」を実践する人が増えることで、海洋ゴミは減らせるはずである。**

(1) 日高高校生の意識変化

(2) ベトナムの高校生との問題意識共有

- ・チャンフー高校(ベトナム)の提案
→3Rの大切さを共有しよう。

- ・日高高校(日本)の提案
→再資源化に向けての分別や
意識向上に取り組もう。



(3) 大洋化学(地元企業)と和田さん(現地で活動する人)をつなぐ役割

日高高校 → 大洋化学に、再資源化・製品化への努力と
その製造工程を学ぶ日高高校 → 和田秀樹氏に、ベトナムにおける
プラスチックゴミ処理の現状と過程を学ぶ
※プラスチック分別と原材料輸出2019年11月、大洋化学の製品・企業理念を和田氏に
伝えた。**5. 参考文献および連携機関**

- ・「プラスチックを取り巻く国内外の状況」平成30年8月、環境省
- ・「2050年の海は、魚よりもごみが多くなるってホント？いま私たちにできる2つのアクション」2019.02.12記事 海と日本財団 (<https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2019/20107/>)
- ・「地域密着型ペットボトルリサイクルシステムの構築」松山弘樹、泉谷芳敬、多田修一(大洋化学 経営企画グループ)『第40回環境システム研究論文発表会講演集』2012年10月
- ・大洋化学株式会社(和歌山県御坊市島584番地)・和田秀樹氏(サステナブルデザイン研究所)

4年次（令和元年度）取組概要ポスター

和歌山県立 日高高等学校 令和元年度 指定4年目の取組
研究開発構想名 **翔べ 日高から 世界へ ~地方を創生するグローバルリーダーの育成~**

目的	魅力ある就業先や雇用の創出等に取り組み 地方を創生していく人材を育成する	背景	地方にとっての悪循環を断ち切る必要性 (若者の県外流出、地方の過疎化、経済の減退)
方法	1) 県内で高校生活を送る今、地元の魅力と課題に気づく(文化、産業、移民、防災) 2) 課題研究や海外研修を通してグローバルスキルを身につける	キーワード	地方創生

グローバルスキル (本校独自の「付けたい力」8項目)

①やる気 ②想像力 ③コミュニケーション力 ④グローバル力 ⑤協働力 ⑥マネジメント力 ⑦発信力 ⑧参加・参画力

I 個人力 II チーム力 III 行動力

◇日高から (課題研究)

S G課題研究 I —基礎研究— (1学年)

- 地域の実態や現状の理解
- 探究活動に必要なスキルの学習

S G課題研究 II —探究活動— (2学年)

- 地域課題に関する研究
- 成果発表会で探究成果発表

S G課題研究 III —発信— (3学年)

- 研究成果を論文にする
- 英語要旨作成

◇世界へ (海外高校生との交流、研究活動)

研究を深める

総合企画

JICA研修

トルコ大使講演

海外研修

カナダ (移民・文化) 11月
和歌山県人会(移民の歴史)
現地文化調査(移民) 現地高校(協働学習)

インドネシア (防災・文化) 10月
ERIA(東アジア経済) JICA(国際支援)
世界遺産(被災と復興) 現地高校(協働学習)

ベトナム (産業・文化) 11月
大洋化学、住友化学、アラスナック再生村、
リサイクルゴミ埋立処分場(全てアラスナックイクル学習)
JICA(国際支援) 現地高校(協働学習)

アジア・オセania高校生フォーラム
7/27～8/1(和歌山市) 2名が参加。3年生が「教育」分科会で図書館に焦点を当てた英語発表を行った。2年生は全体会司会者として分科会やディスカッションの内容を英語でまとめ、紹介した。

高校生津波サミット

SWG全国フォーラム

9/10・11(北海道)
「世界津波の日」2019
高校生サミット in 北海道、
12/23(東京)「SWG 全
国高校生フォーラム 2019」
に2年生2名が参加。
多言語版防災カレンダー
の協働作成を国内外の
高校生に提案した。

全国海洋教育サミット

2/15(東京都)
東京大学で開催された
上記以外にハートム研修団
が参加。「海洋アラスナック
ゴミ問題」についてボスター
発表を行った。

SWGフォーラム

海洋教育サミット

SGH通信

**和歌山県立
日高高等学校
SGH通信
第10号**

2019年10月29日

SG 課題研究Ⅱ中間発表会(3)

発表テーマ一覧

- 1班 すべての人が安全に避難するには
- 2班 減災（ペット）
- 3班 防災意識向上化計画
- 4班 ハザードマップを広めよう！
～御坊市立体化計画～
- 5班 防災教育
- 6班 ハザードマップを広める
- 7班 乗客の命を守るしおり
- 8班 楽しく学べる防災すごろく
- 9班 かるたで楽しく防災学習！
- 10班 みんなで遊ぼう防災カルタ

地域防災分科会・当日の様子**5限**

各班の進捗状況を真剣に聞き、今後の展望や、現時点での悩みや課題を出し合った。各班それぞれにしっかりと考えているものの、まだまだ研究を広げ深める余地を残している。生徒の中には改善点を求めている生徒、研究方法を深めていくアドバイスを求めている生徒があり、防災に関して生徒自身の関心も高まってきている。防災の大切さを伝えていく対象が高校生だけでなく、幼児や高齢者、海外の人たちにも向いており、多くの人のために役立つ研究が期待できる。

6限

各班で発表によって得たコメントを持ちより、アドバイスや改善点等を共有しあった。改善点についてそれぞれの考えを出していくなかで、新たな課題やアイデアが浮かんでいた。和歌山大学の今西教授からは、防災意識の現状改善や進んだ防災のアドバイス、研究を進めていく・広げていく方法を教えていただいた。

生徒たちが向けた目線は良いが、研究方法やその実行方法をこれからより深く考えていくことが必要ということであった。

(文責・地域防災指導担当)

和歌山県立
日高高等学校
SGH 通信
第14号

2019年12月9日



2019年度◆盛夏の記録◆
アジアオセアニア高校生フォーラム



活動を通して学んだこと

英語能力によって成されるコミュニケーションの大切さ

2年6組 小串 楓子

フォーラムでは、全国の高校生の英語能力の高さに圧倒されました。ついていくのに必死でした。フォーラム中、ホテルで同室になったインドネシア人のイダとも、初めの頃は全然話せませんでした。自分の司会者としての仕事の多さを、しゃべりかける勇気がない言い訳についていたように思います。イダの英語はとても流暢で、私には羞恥心もありました。

しかし、「せっかくフォーラムに参加したからにはしっかり交流を深めたい」と思い、最終日の夜、やっと話しかけました。話してみると、イダは本当に優しく、また、私と話したいと思っていてくれたことも分かりました。

イダが英語を上手く話せるのは、自身の夢のためだと言います。イダは将来インドネシアの教育を発展させるために働きたいそうです。そのためには各国に出向いたり、英語を使ってコミュニケーションを取ることが必要になるので、英語を学ぶ意欲が湧き、英語によってコミュニケーションが取れるようになったといいます。イダは英語がまだ話せない私を励ましてくれました。そして将来、私がもっと英語力を磨いてインドネシアに行った時は、必ず再会しようと約束しました。

このフォーラムでイダと出会えたことは、私の一番の宝です。英語の大切さを、フォーラム全体とイダから学んできました。

和歌山県立
日高高等学校
SGH 通信
第 22 号

2020年2月14日

2019 年度◆SGH 海外研修◆

ベトナム研修 ①



2019 年 11 月 4 日 ~ 11 月 9 日

テーマ「地域産業」

今年度は 2 年生 8 名が参加しました。

事前研修では大洋化学の本社と美浜工場を訪問し、学校で分別したペットボトルが新しい製品としてリサイクルされる過程を見学した他、英語での講義を受講しました。

今年のチームは「プラスチック海洋ゴミ問題」に焦点をあて、現地ではハノイで活動する和田秀樹さんにもご協力いただき、ゴミ埋め立て処理場やプラスチック村を案内していただきました。

主な研修内容

- 11/4 出国、ハノイ市内見学
- 11/5 ゴミ埋め立て地視察、プラスチック村視察
- 11/6 チャンフー高校での協働学修
- 11/7 JICA ベトナム事務所での研修、ホーチミンへ移動
- 11/8 企業（AEON）のゴミ問題への取組を受講、出国
- 11/9 帰国

事前研修
大洋化学本社にて



2年3組 武内 優希

事前研修で、世界のプラスチックゴミ問題はかなり深刻であるということを学びました。年間に少なくとも約 800 万トンものプラスチックゴミが海に流れ込んでいて、このままの状態が続くと海にあるゴミの量は 2050 年に魚と同じ量になってしまうと言われています。マイクロプラスチックといわれる目に見える見えないくらいの極小さいゴミが海にはたくさんあり、それを生き物が食べてしまって命を落してしまうなど、環境に大きな影響を及ぼしている事実を知り、私たちには何ができるだろうとメンバーで考え始めました。

現地研修では 2 日目にプラスチック村を訪れました。そこはプラスチックゴミを集めて分別し、それらをペレット（粒子）に加工後、プラスチック原料として国外へ輸出することで経済が成り立っている村でした。その村で見た機械の中に、事前研修でお世話になった大洋化学の工場にあったものとよく似ている機械があり、よい技術は世界で共有されるのだということを改めて実感しました。

また、協働してプラスチックゴミ問題への対策を共有しあったチャンフー高校では、最後に私たちからのお土産としてリサイクルトレーをプレゼントしました。これはもちろん、学校で皆が分別したペットボトルが市の清掃センターで粉碎後、大洋化学の工場で製品化されたものです。ベトナムの高校生は皆、このトレーに興味を持ってくれていました。その姿を見て、もっといろいろなところでこのトレーを広めることができ、ゴミ問題やリサイクル活動に関心を持ってもらうことに繋がるのではないかと考えました。しっかり考えて、何かしたいと思っています。



平成28年度指定スーパーグローバルハイスクール
研究開発実施報告書・第4年次

令和2年3月発行

発行者 和歌山県立日高高等学校

〒644-0003 和歌山県御坊市島45

TEL 0738-22-3151 FAX 0738-23-2922